

転身の構図

——「時代の小説」としての『魔の山』の
成立史と構造とについての一考察——

山 口 知 三

はじめに

本稿の課題は、トーマス・マンの長編小説『魔の山』を、今世紀初頭から一九二〇年代前半にかけてのドイツの（ひいてはヨーロッパの）時代相を描き、かつ同時期の時代状況によって強く規定された「時代の小説」として捉える視点から、この小説が一九二三年におこなわれた作者トーマス・マンのいわゆる政治的「転向」とどのように関わりあっているかを、特にその成立史と、この小説のもつ時代構造の特異性とに照準を定めて考察することにある。

あらかじめ断っておかねばならないが、『魔の山』はきわめて多面的かつ多層的な構造をもつ小説であり、それがどのような視点であれ、一つの視点のみからこの小説の全体像を捉えきけることは不可能であるというのが、『魔の山』を読むさい

の私の基本的姿勢である。一義的解釈を拒むのは、すぐれた文学作品に共通した特性であるが、『魔の山』の場合には、作者が意図的に多面性と多層性にもとづく多義性をつくりだしているばかりか、そのような意図自体をあらわに提示し、自らその多義性を楽しみ、読者にもそれを楽しむように勧めている。したがって、この小説の醍醐味を味わうためには、作者とともにその多義性を楽しむほかないのである。その意味では、『魔の山』は教養小説なのか否かという議論も、あるいは、『魔の山』は「時代の小説」なのか神話的小説なのかという議論も、さらには、『魔の山』はゲーテ的作品なのかヴァーグナー的作品なのかといった議論も、それぞれの論者がむきになっておのれの主張の絶対性を主張するときには、むなしの筈となつて「魔の山」の山中に吸いこまれていくほかあるまい。『魔の山』を味読することを一時中断して、これを一つの視点から論じようと試みる者は、自分の定めた視点が可能な一つの視点にすぎないことを自覚しておくべきであろう。すくなくとも、前述のような課題を掲げた本稿は、このような明確な自覚のもとに書かれたものである。

明確に自覚された自己限定は、必ずしも用心深さや禁欲性を意味するとはかぎらない。一つの視点のもちうる効用の限界をあらかじめ自覚することによって、かえって、ことその視点の有効な範囲内においては、思いきった仮説提示が可能になるのではないかというのが、本稿における私の狙いである。そして、そのような仮説提示によって、逆に『魔の山』の多義性、もしくは多面性や多層性のよってきたる所以の一端になりとも接近できれば、というのが私の密かな願いでもある。

それというのも、『魔の山』を「時代の小説」として見る視点そのものも、そう簡単には一義的に明確には設定できないからである。『魔の山』は、「時代の小説」という一側面においてすら、なおかつ多義的であり、多層的な構造をもつ小説なのである。『魔の山』の「まえおき」では、ここで語られるのは「生活と意識とに深い裂目を刻んだ転回点であり境界線であった」第一次大戦の前の物語であり、それゆえに「昔」の「時代の小説」であることが強調されているが、にもかかわらず、『魔の山』が同時に、第一次大戦後の「時代の小説」としての性格をも多分に内包していることは、マン自身もいろいろ

るな機会に示唆しているところであり、また多くの研究者たちによっても指摘されてきたことである。^①とすれば、『魔の山』を「時代の小説」として捉えるという限定された視点からの解説作業そのものが、実はただちに、この小説の本質的特性でもあり、ある意味では骨絡みの病毒ともいえる多義性や多層性の一側面との対決を強いられることになるはずなのである。

すくなくとも、そこまで踏みこんだときはじめて、この限定された視点は、それなりにこの小説の核心に接近する一つの方法としての有効性を獲得できるはずであるが、残念ながら、そのような試みは、これまでのところあまりなされていないようである。このことは、『魔の山』の受容がややもすれば第五章までの前半部に、第六章の中途までをつけ足した形でおこなわれがちなことと無関係ではあるまい。『魔の山』を二つに分けるとすれば、その分れ目が第五章と第六章の間にあることは誰の眼にも明らかであり、そして、この小説のなかに第一次大戦後の問題が顕著に侵入してくるのは第六章でのナフタの登場を契機にしてであることも容易に見てとれるにもかかわらず、それらのことを踏まえて、第六章以下の後半部全体を統括的に論じた『魔の山』論は意外にすくないのである。だが、先に述べたように、『魔の山』を「時代の小説」として読む視点がそれなりの有効性を獲得するためには、この戦後性の侵入が顕著に認められるようになって以後の後半部全体をこそ、その視点から読み解く試みを放棄してはなるまい。本稿は、そのような試みを、問題提起と仮説提示に不可避免的な種の偏りと強引さを承知のうえで敢えておこなうものである。

とはいえ、本稿の課題を冒頭に記したような形に限定しても、なおかつこの課題に関連して『魔の山』後半部が内包する問題は多岐にわたり、その全てを網羅的に扱うことは不可能なので、ここでは、ヨアヒム・モティーフを中心にすえて考察をすすめることにする。

主人公ハンス・カストルプの従兄ヨアヒム・ツィームセンは、『魔の山』に登場する主要な人物のなかでは、研究者たちによって必ず言及されはするものの、本格的に論じられることは最もすくない人物である。^②たしかに彼は、セテムブリー

ニやナフタのようにしちむずかしい議論を展開するわけでもなければ、一見ショーシャやペーペルコルンのようにカストルプに深刻な人生体験を与えるわけでもないかのように見える。彼は、小説のなかでもみんなに愛され、読者からも愛される好青年である。つまり、問題のすくない人物である。だから、問題性に乏しい人物として、研究者たちの関心をひくこともすくないのであろう。だが、彼は、たんにカストルプの従兄として設定されているのではなく、二人は「ディオスクレーンの双生児」として設定されているのである。そして、彼は、第六章の最後で息を引取りはするものの、さまざまな形で小説の最後まで存在しつづけるのであり、その意味では、主人公カストルプについて最も長期間にわたって読者がつきあわされる人物であるともいえる。しかも、最初はたんに主人公の呼出し役や引立役にすぎないかに見えるヨーアヒムは、『魔の山』が問題の後半部に入る第六章以降にいたって、急速にその独自の存在感を増してくるのである。そもそも、作中人物の性格の単純さは、必ずしも、その人物が小説のなかではたす役割の単純さを意味するものではないし、作中人物の性格や思想信条の不変性は、必ずしも、その人物が小説のなかで受持つ役割や機能の不変性を意味するものでもないはずである。こういったことを考えれば、従来の『魔の山』研究においては、ヨーアヒム像のもつ意義が不当に軽視されてきたのではないだろうか。特に『魔の山』を「時代の小説」として捉え、さらにこれを作者マンの「転回」問題との関連のなかで考えようとする場合には、「プロイセン的英雄精神」の形象化としての「兵士」ヨーアヒム像のもつ意義もまた、そのような視点に即した形で、もっと検討されねばなるまい。早い話が（詳しくは後で述べるように）『魔の山』においては、その特異な成立過程のゆえに、主人公カストルプだけでなく、セテムブリーニもナフタもショーシャも、それぞれにその経緯も表れ方も違っているとはいえ、小説が完成していく途中で全員が当初の構想とは微妙に異なった役割や意義を担わされるように変っていったのであるが、だとすれば、ヨーアヒムだけがその役割も意義も変らなかったと考えるのは、不自然であらう。というよりも、置かれた状況と関係の変化は、不可避的に関係者全員のはたす機能を微妙に変えていくはずである。むろん、本

稿においては逆に不当に過大な意義づけがヨーアヒム像にたいしてなされているという批判は十分に予測できるところであるが、私としては、そのような批判は承知のうえで、上述のような認識にもとづいて、一つの問題提起として、敢えてヨーアヒム・モティーフを考察の中心に据えることにした。

本稿のような課題をもって『魔の山』を論じようとする場合、その成立史をも問題とするのは必然的な要請である。そのため、本稿の第一章から第三章までは『魔の山』の成立史を中心とした記述になるが、しかし、そこでも、私の狙いは、『魔の山』の成立史自体の遺漏のない叙述にあるわけではなく、本稿の第四章以下でおこなう『魔の山』後半部の分析のための前提作業として必要なかぎりにおいて、成立史の問題を検討するにすぎない。

最後に、『魔の山』と作者トーマス・マンの政治的「転向」との関係を主題にした論考にしては、そのマンの「転向」の内容自体についての検討が不十分にすぎるといふ批判があるかもしれないが、本稿においてマンの「転向」それ自体についての記述を最小限にとどめたのは、次のような理由による。

一九二二年のマンの「転向」をめぐっては、当時から現在にいたるまで、実にさまざまな議論がおこなわれてきた。そして、事柄が政治的問題であるため、その解釈や評価は、それぞれの論者自身の主観的意図の有無とは無関係に、その時どきの時代状況によって深く規定されざるをえなかった。ひと頃の「民主主義者マン」を強調する論調に代って、近頃では、マンの「転向」も基本的にはあくまで保守主義的志向にもとづくものであったという解釈が優勢であるように見えるし、私も大筋としてその説に同意するものであるが、これもまた、私たちの生きている現代の世界的趨勢と決して無関係でないであろうことくらいは自覚しているつもりである。そうであるだけに、私は、マンの「転向」の内実を彼のいくつかの政治的評論の分析によって理論的に抽出し、性急に定式化することは慎しみたいと思う。それよりは、彼の「転向」にできるだけさまざまな角度から照明をあてることによって、その多面的な輪郭を明らかにしていく方法をとりたいと思っている。本稿も

そのような試みの一つであり、その意味では、本稿はあくまで、彼の「転向」をめぐる私の一連の仕事の一つの環にすぎない。むろん、本稿のような課題を追求するためには、その前提として彼の「転向」についての一定の解釈が必要であり、そのかぎりでの私の立場は本稿でも明示したつもりである。しかし、私にとって重要なのは、そのような狭義の「転向」解釈ではなく、「転向」を一つの核として多面的な輪郭をもつ、総体としてのトーマス・マンの転身の問題である。

I

『魔の山』を「時代の小説」として見るという視点も、これをマンの「転向」と関連づけて考えるという問題設定も、むろん、なんら目新しいものではない。それどころか、一九二四年末にこの小説が出版された当初から現在にいたるまで、この小説について語るほとんどすべての人によって、なんらかの形で必ず言及されてきた事柄にはかならない。したがって、今あらためてこの問題を正面から取上げる私の意図を理解してもらうためには、まず最初に、この問題に関連する近年の研究状況の一端なりとも紹介しておくことが必要であろう。そのさい、『魔の山』の成立史をめぐる研究状況の推移を中心に、話をすすめるが、それは、成立史の問題が本稿の課題ときわめて密接にかかわっているからにはかならないと同時に、『魔の山』の成立史をめぐる研究状況の推移は、近年におけるトーマス・マン研究全体の急速な進展を最も見やすい形で示している恰好な事例の一つであることを考慮してのことである。

『魔の山』は、マンが一九一二年初夏にダヴォースのサナトリウムで療養中の妻を見舞ったさいの体験から最初の構想が生まれて以来、一九一三年九月に執筆を始め、一九二四年九月二七日に脱稿するまで、その完成に約十二年を要した作品である。このこと自体は、マン自身もいろいろな自伝的文章で明言しているので、かなり早くから広く知られていた事である。

だが、それではこの約千頁におよぶ長編小説が具体的にどのような経緯をへて書きあげられていったのかという、ある程度まで細部に踏みこんだ『魔の山』成立史が明らかになってきたのは、きわめて最近になってからである。

トーマス・マンの死後十年目にあたる一九六五年に発表されたH・ザウアーエーシツヒの論文「小説『魔の山』の成立」は、当時ようやく実証的精密度を加え始めていたトーマス・マン研究全体の傾向を反映して、その時点で参照可能なさまざまな資料を踏まえて書かれた、今日なお参照するに足る最初の実証的な『魔の山』成立史の叙述であった。⁽⁵⁾しかし、この先駆的労作も、その後トーマス・マンの日記や各種の遺稿等の公表や調査によって加速度的に実証的精密度を深めてきた現在の研究水準からすれば、不備な点が多すぎるばかりでなく、『魔の山』の成立史それ自体を捕捉することに精一杯で、その成立史の解明が『魔の山』という小説を読み解くうえでいかなる意味をもつのかという、成立史研究の究極の課題には全く手を触れないままであった。

この課題を『魔の山』解釈の中心にすえて本格的に論じたのは、一九七四年に『伝統の利用』と題するトーマス・マン論を刊行したT・J・リードだった。⁽⁶⁾彼は、細心な成立史分析と綿密なテキスト分析とをつき合わせることによって、『魔の山』の特異な成立経緯が、この小説の核心部にまでいかに濃密に投影し、またこの小説の全体的構造をもいかに決定的に規定しているかを明かにしようと試みた。彼の論証や主張の具体的内容は、本稿のなかで折にふれて紹介することになるが、かつて彼の研究に最初にふれた時の目を洗われるような衝撃が、本稿執筆の大きな遠因となっていることは、あらかじめ断っておかねばなるまい。とはいえ、リードの研究も、マンの日記が公表されるはるか以前のものであり、その資料的制約を反映して、彼が『魔の山』解釈に不可欠の前提作業としておこなっている成立史研究も、真に綿密な実証的裏づけをもっているのは、約十二年間にわたる成立史の前半部分だけである。むしろ、彼は、成立史の後半部分についても、マンの政治的「転向」を軸とした観点からの補強をおこなったうえで自説を展開しているわけであるが、それでも、彼がこの小説の解

釈にさいして、その成立経緯の特異性に付与する意義の重さを考えれば、資料的制約から生ずる土台の不安定性は否定すべくもない。しかも、成立史の前半部についてさえも、今日からみれば、リードの研究には、一つの大きな問題点があった。それは、後で詳述するように、『魔の山』の主要な登場人物の一人であるレオ・ナフタにかかわる問題である。

ユダヤ人にしてイエズス会士、淫蕩性を秘めた禁欲主義者、プロレタリアート独裁を説く中世賛美者、コミュニストにしてファシストとして設定された登場人物ナフタが、『魔の山』を「時代の小説」として読み解こうとするさいに最も重要な人物であることは、誰の目にも明らかである。そして、この複雑な人物像と彼のイデオロギーのもつ意味を解明しようという努力は、この人物像の因って来たる由縁を求めて、ほとんど不可避的に、なんらかの形で『魔の山』の成立史に関心をよせざるをえない。ザウアーエーシツヒやリードらの仕事と並行して一九六〇年代後半から八〇年代始めにかけてなされた『魔の山』の成立史にかかわるさまざまな個別的寄与の一つの焦点がナフタ問題にあったことは、その意味で、ごく自然な成行きであったと言えよう。⁷⁾しかし、リードを初めとして、この時期に『魔の山』の成立史やナフタ問題を追求した研究者たちは、まだトーマス・マンの日記を資料として利用することができなかったために、マンが第一次大戦後に具体的にどのような形で『魔の山』の執筆を再開、続行したのかも、そしてまた、ナフタという登場人物がもともとはドイツ人のプロテスタントの牧師ブンゲという人物として構想されていたことをも知り得ないままに、彼らの研究をすすめねばならなかった。

トーマス・マンの一九一八年秋から一九二一年末までの日記が公刊されたのは、一九七九年である。⁸⁾マンが一九四五年五月二一日に、一九三三年三月以前の自分の日記を焼却したさいに、第一次大戦末期からヴァイマル共和国初期にかけての時期の日記だけを残しておいたのは、日記焼却時に執筆中だった小説『ファウストゥス博士』の資料として利用するためだったと考えられるが、結果的には、この残された日記は、小説『魔の山』の成立史を跡づけるうえでの貴重な資料としてマン研究者たちに役立つこととなった。というのも、この日記を読んでいくと、マンが一九一九年四月二〇日に、つまり当時彼

の住んでいたミュンヘンがバイエルン・レーテ革命運動の嵐のまただ中にあった時に、いわば革命と内戦の銃声を耳にしながら、一九一五年九月初旬から約三年半余にわたって中断されていた『魔の山』の執筆を再開したことを初めとして、『魔の山』の各章、各節の執筆状況を一九二二年末まではきわめて具体的に追跡することができるからである。また、先述のナフタがもともとはブンゲという人物として構想されていたことも、この日記の封印が解かれたことによって初めて明らかになったのである。

さらに、この日記が公刊された翌一九八〇年に、その一部分がアメリカのイェール大学の保管するトーマス・マン関係の資料の中に残っていることは早くから知られていたものの、公表されないままになっていた、一九一五年以前に書かれたものを含む『魔の山』の原稿の一部がついに公刊されたことによって、『魔の山』の成立史の研究は、いちだんと強固な実証的基盤を得ることになった。

これらの新しい資料を得たことによって、私たちは現在、十年前とは比較にならないくらい正確で詳細な形で『魔の山』の成立史を構成できるようになった。その大要は後で紹介するが、一九八一年に、現在までのところ一番新しいトーマス・マン全集であるフランクフルト版トーマス・マン全集の一冊として刊行された『魔の山』の巻末に「あとがき」として添えられたペーター・ドゥ・メンデルスゾーンによる長文の解説が、一応、現在の時点における標準的な『魔の山』成立史の包括的な叙述と言っているだろう。しかし、メンデルスゾーンの著作のほとんどがそうであるように、彼は多くの事実を整理し陳列してはくれるが、それらの事実から生じてくるはずの問題点の指摘や分析という点になると、常識的見解以上はなにも言っていないに等しい。

日記を初めとするさまざまな新しい資料の出現は、『魔の山』成立史の包括的把握という面においてばかりでなく、その成立史が内包する個別的な、しかし『魔の山』解釈にとってはきわめて重要な意味をもつ諸問題の追求においても、新しい

研究状況を生みだした。たとえば、一昨年（一九八六年）に刊行されたH・ヴィスキルヒェンの『小説のなかの時代史』は、マンの日記を手がかりにして、『魔の山』執筆時におけるマンのドイツ革命などに対する直接的反応ばかりでなく、それと密接にかかわりあった形でマンが当時『魔の山』執筆のための参考資料として読みあさったいろいろな書物の内容まで検証したうえで、これらのものがいかに多層的に堆積してナフタという特異な人物像が形成されていたかという問題をも含めて、『魔の山』と時代との関係を説明しようと試みた労作である。⁽¹⁰⁾

むろん、トーマス・マンの人と作品をめぐるこのような新しい実証的研究作業は、なにも小説『魔の山』の成立史に集中しているわけではない。ここでトーマス・マン研究の現状全般について紹介することはできないが、話を『魔の山』に限定するとしても、『非政治的人間の考察』『ゲーテとトルストイ』『ドイツ共和国について』など、約十二年間にわたる『魔の山』の成立過程の途中で書かれ、さまざまな点で『魔の山』の内容と深く密接な関係をもっているマンの諸作品についても、それぞれに新しい資料や調査にもとづく研究が次つぎと、まさに応接の暇もないほどの勢いで発表されつつある。同じことは、当時のマンのいわゆる「転回」の思想的背景をなすシュペングラー体験やハムスン体験などの研究についても言えることである。しかも、こういった各種の研究は、当時マンが陥っていた全面的な危機状況に内在していた問題の多面性と多層性を反映して、当時のマンにおける政治思想の連続性と非連続性といった視点や、あるいは、マンにおける神話学や心理学の受容といった視点から、マンにおける同性愛の問題といった視点にいたるまで、実に種々様々な視点からおこなわれている。そして、困ったことに、『魔の山』という小説自体が、マンの陥っていた全面的な危機状況の多面性と多層性との渾然一体となった見事な文学表現であるがために、これらの種々様々な視点からの照明によって浮かびあがってくる新事実や新解釈が、『魔の山』を読み解く作業に直接、間接にさまざまな新しい問題を提起してくるわけである。⁽¹¹⁾

H・コープマンとB・クリスティヤンセンとの『魔の山』は教養小説 (Bildungsroman) か、それとも教養解体小説

(Entbildungsroman) か」をめぐる論争にも端的に見られるように——あるいは、この両者の『魔の山』論に前述のH・ヴィスキルヒェンの著作を並べ、さらにその脇に、『魔の山』をもっぱら神話や文学遺産を下敷きにしての精妙巧緻にしてイローニッシュな芸術的戯れという観点から読み解くE・ヘフトリヒやL・ザントの『魔の山』論¹³を置いてみれば一層はつきりするように、ほぼ一九八〇年前後の時期を境にして、『魔の山』という小説をそもそものような小説として捉えるかという基本的なアプローチ姿勢についての共通基盤すら失われてしまった感じがあるが、その背景には、成立史をめぐる研究の推移を軸にして概観してきた上述のような研究状況があることを忘れてはなるまい。

私が本稿の課題を、冒頭に記したように、『魔の山』論としては陳腐と言ってもいいくらい、これまでに繰返し論じられてきたテーマに照準を合せた形で設定したのは、このような『魔の山』研究の渾沌とした、しかし活気に満ち満ちた現状を踏まえたうえでのことである。ただし、あらかじめ断っておかねばならないが、私には、いささか百家争鳴も度がすぎるのではないかとさえ思われる諸外国の研究者たちの中に割って入って、交通整理役を勤めようなどというお節介な気持もなければ、その種の整理の結果を一覧表にして日本に紹介しようなどという殊勝な気持もない。私はただ、上述のような研究状況を踏まえたうえで、諸研究者の発見や確認や解釈のさまざまな成果をも適宜利用させてもらいながら、私なりの問題提起をおこないつつ、私はどのように『魔の山』を読み解くかという一つの仮説のようなものを出してみたいだけである。

ここで仮説という言葉を用いたのは、決してたんなるレトリックとしてではない。いま概観したような研究状況からして、特に『魔の山』と時代との関係といった、その当否の検証に資料的裏付のもつ比重が小さくないテーマを扱う場合には、ある程度の仮説性は避けがたいところである。しかし、反面において、研究者たちの関心が細部の実証的検証作業に埋没してしまいかねないような状況のときにこそ、仮説のもつ危険性と脆弱性を自覚したうえで、敢えて問題の全体像に一つのパースペクティヴを提示する試みが必要なのではないだろうか。

だが、私の関心の所在や、そこから生じてくる問題を明らかにするためには、章をあらためて、ふたたび『魔の山』の成立史から話を始めねばならない。

II

まず、十二年余にわたる『魔の山』の成立史を概観しておこう。

トーマス・マンは、一九一二年五月一日に、スイスのダヴォースの高山サナトリウムで療養中の妻カーチャを見舞に行き、六月一三日まで約四週間そこに滞在した。この滞在中に国際的な高山サナトリウムの特異な雰囲気から受けた強烈な印象が、『魔の山』の最初の構想を生み出した原体験である。マンは、当時短編小説『ヴェニスに死す』を執筆中だったが、ダヴォースからミュンヘンに帰ってまもない同年七月にはこれを完成し、秋には、一九〇九年から翌一〇年にかけて書き始めたものの、その後中断されていた『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』の仕事にふたたび取組んだ。しかし、ほどなくこの仕事は再度中断され、翌一三年夏から『魔の山』を書くための準備作業にとりかかった。

『魔の山』の執筆が始められたのは、一九一三年九月初旬であった。この時点でのマンの構想では、『魔の山』は、あたかもギリシャ悲劇に対するサテュロス劇のように、悲劇的な小説『ヴェニスに死す』と対をなすフモールに満ちた作品となるはずであった。それは、分量的にも『ヴェニスに死す』と見合った形の「やや長めの短編小説」となるはずだった（ちなみに、最終的に完成した『魔の山』は『ヴェニスに死す』の約十一倍の長さである）。マンは後年、この当初の短編小説としての『魔の山』の構想を、タンホイザー伝説を連想させる「ヘルゼルベルク・イデー」という言葉で説明したりしているから、要するに、当初のプランでは、貴族に列せられるまでになった初老の芸術家がヴェニスの海辺で美少年に魅せられて自

已崩壊をきたしていく物語とまさに対をなす、ごく平凡な市民である青年技師がスイスの高山のサナトリウムで年上の女性に魅せられて自分を見失い、下界に戻れなくなってしまふ様子をフモリスティッシュに描く物語を考えていたものと思われる。

『魔の山』を書き始めて十一ヶ月後の一九一四年八月初旬に第一次大戦が勃発した。そして、マンは、後で紹介する大戦勃発の約半月後のある手紙のなかで、この大戦勃発を『魔の山』の物語の幕切れとして使うつもりであることを示唆している。しかし、開戦直後の愛国主義的興奮状態にまきこまれたマンは、『魔の山』の執筆を中断して、『戦時の思想』や『フリードリヒと大同盟』などの熱烈なドイツ擁護の時局評論を書き、一九一五年一月によろやく『魔の山』の執筆にもどり、同年夏頃まで執筆を続けた。すでに戦争の始まる少し以前から、この小説は最初の予定よりかなり長くなりそうな気配がみえていたが、この頃になるともう短編小説というよりも長編小説としての意識がマン自身にもちらつき始めたようである。それは、おそらく、一五年八月三日付のパウル・アマン宛の手紙で、『魔の山』は「一人の若者が、死というこのうえなく誘惑的な力と対決し、人文性フマニテットとロマン主義、進歩と反動、健康と病気、といった精神的な諸対立のなかを滑稽でかつ戦慄するような形で導かれていくという、教育的かつ政治的な基本的意図をもつ物語です」と説明しているように、マンがこの作品に、最初の構想を大幅に上まわる問題を盛りこもうと考えるにいたったことによるものと思われる。すなわち、『魔の山』は、第一次大戦の勃発という歴史的事件を契機にして、『ヴェニスに死す』の対をなすサテュロス劇的短編小説から、「教育的かつ政治的」な意図を基本にもつ長い物語へと変っていったのである。また、この時点で、主人公は七年間高山のサナトリウムに滞在することと、その呪縛状態が打破されるのは第一次大戦の勃発によってであるという小説の大きな枠組みは、いちだんと明確になったようである。——ちなみに、イェール大学に残されていた原稿の検証によって、最初の構想では、主人公カストルプのサナトリウムへの到着は、マン自身の最初のダヴォース訪問と同じく五月のことになっていて、それが

後に、第一次大戦勃発のちょうど七年前になるように、八月に変えられたことが最近になって判明している。^⑮このことは、成立史研究のうえで一つの発見であるばかりでなく、『魔の山』の物語展開のうえで、ある事件が起きる季節や月すらも「時代の小説」という観点からも周到な配慮にもとづいて設定されていることを教えてくれる点で興味深いものがある。

しかし、戦争の激化と長期化にもなつて、「安定していた一切のものの動揺、すべての文化的基盤の震撼」を自覚し、第一次大戦が小規模な民族間戦争などとは違って、これまで自明のものともみなされてきた全てのものの、「存在そのものの解体と問題化」をともなう「世界の転機」を意味するものであることに気づき始めたトーマス・マンは、この深刻な時代状況と全面的に対決し、自己の拠って立つ存在の基盤の徹底的な全面的検証をおこなうために、一九一五年の夏の終り頃に『魔の山』の執筆をふたたび中断して、大部な評論書『非政治的人間の考察』の執筆にのめりこんでいった。

この中断の時点までに書かれていたのは、第四章第七節「種々の疑惑と考慮」のあたりまでだったと推定されている。もちろん、後述のように、あとでかなり加筆修正されたり、一部では章節の配置変えさえおこなわれたので、完成稿そのままの形で第四章第七節までが書かれていたというわけではないが、大筋として第四章の半ばあたりまで、分量的に言えば完成稿『魔の山』のほぼ六分の一が書かれていたと考えられる。^⑯

以後二年半にわたる『非政治的人間の考察』執筆のあいだにも、『魔の山』の構想がふくらみつづけていたことは、一九一七年三月二五日付のパウル・アマン宛の手紙のなかで「私が中断させられた長編小説は、教育的・政治的な主要モチーフをもっていました。一人の若者が、カルドゥチの弟子でラテン的雄弁さをそなえた〈仕事と進歩〉の代弁者と、途方もなく才気煥発な反動家とのあいだに立たされるのです」と書いていることから推測される。リードも指摘しているように、^⑰先に引用した同じアマン宛の一五年八月三日付の手紙とこの一九一七年三月二五日付の手紙とを比較すれば、思想内容的には同じことを言っている、小説の構想という点では、後者の方がはるかに具体性をおびていて、『非政治的人間の考察』を書

いていく過程で、それと並行して『魔の山』の構想がますます深められていったことがわかる。

ただ、アマン宛のこの二通の手紙は、かなり以前から、『魔の山』の成立史を語るときには必ず引用される資料であるがこの手紙の資料としての利用価値を考えるさいには、アマンが第一次大戦中のマンの論争相手の一人ロマン・ロランに私淑していた人物で、当時のマンの文通相手としては特殊な役割をはたしていた人間であったことに十分留意しておく必要がある。加えて、マンの日記の公表によって、このアマン宛の手紙のなかで言及されている「途方もなく才気煥発な反動家」が、決してただちにナフタに結びつくものではないことが明らかになった以上、アマン宛の手紙を根拠にして、大戦中に完成稿『魔の山』の「教育的・政治的」な骨組みがあらかた定まっていたと考えるのは無理であろう。

この時期に関連して、もう一つ問題点を指摘しておくなら、マンは、アマン宛の第二の手紙のなかで（先に引用した個所のすぐ後で）、自分が『非政治的人間の考察』を書かなければならないのは、そうしないと、『魔の山』という小説が「堪えがたいほどの知的過剰積荷を背負いこむことになる」からであると言っている。手紙の文脈からして、ここで憂慮されている「知的過剰積荷」とは、「〈仕事と進歩〉の代弁者」と「反動家」との論争を指すと考えていいだろう。『魔の山』と『非政治的人間の考察』とのこのような関係については、マン自身が後年にも繰返し語っているところであり、メンデルスゾーンにいたっては、マンのこの証言に重みをもたせるために、当時のマンのメモまで裏づけ資料として採り出している。²¹しかし、『魔の山』は『非政治的人間の考察』のおかげで知的積荷を軽減された、という半ば定説化された視点は、本当に正しいのだろうか。もちろん、それがある程度まで正しいことは、二つの作品を読めば、誰の目にも明らかな事柄である。だが、同時に、完成された『魔の山』がいぜんとして「知的過剰積荷」に喘いでいる面があることもまた、誰の目にも明らかではないだろうか。『魔の山』の成立史を研究することに意味があるとすれば、それは、たとえばこの問題に関しても、作者マンの言葉を鸚鵡返しにくりかえすのではなく、マンが『非政治的人間の考察』を書くことによって知的積荷の軽減を狙った

のは、あくまで当時彼が構想していた『魔の山』に関してであって、それがそのまま完成稿『魔の山』についても言えるかどうかは別の問題であることを確認することにこそあるはずである。

もしもマンが、開戦当初の二、三の愛国的な時局評論だけにとめておいて、『非政治的人間の考察』を書かないでいたら、第一次大戦後における彼の「転向」は、主体的にも、また対社会的にも、もっとすんなりした、もっと屈折の少ないものとして実現できたはずである。そして、後で見るように、その「転向」をも反映せざるをえなくなった『魔の山』のありようも、当然かなり異なったものになったはずである。むしろ、このような仮定の話自体は無意味である。私が言いたいのは、『魔の山』をその成立史にそくして考えるとき重要なのは、今や通説化した『非政治的人間の考察』による『魔の山』の知的積荷の軽減という視点よりも、むしろ、『非政治的人間の考察』を書いたことによって、結果的に『魔の山』が背負いこまざるをえなくなった知的積荷の質的増大という視点の方であろうということである。本稿では直接そのことに立入る余裕はないが、本稿の論述全体が、このような視点をふまえたものであることは、ここで断っておきたい。

さて、マンは、『非政治的人間の考察』を一九一八年三月一六日に脱稿したあと、評論から小説執筆にもどるためのいわば手馴らしとして、小品『主人と犬』を書き始め、終戦直前の一〇月中旬にこれを書きあげると、すぐに、彼にしては珍らしく韻文による小品『幼な子の歌』に手をそめ、敗戦と革命の混乱のなかで、一九年三月下旬にこれを書き終えた。——ちなみに、マンの「一九一八年から二二年までの日記」として残されているのは、『主人と犬』を脱稿する直前の、一八年九月一日付の日記からである。

一九一九年四月八日の日記²⁸に、妻の実家に預けてあった『魔の山』の原稿とメモや資料などを引取ってきた旨の記述があり、翌四月九日から、この一五年八月以前に書かれていた原稿や資料の見直し作業が始められた。そして、十一日後の四月二〇日に、マンは『魔の山』の執筆を再開した。しかし、それは、すでに書きあげられていた原稿をふまえて、その続きを

書きすすめていくといった形での執筆再開ではなかった。まず、旧稿にはなかった「まえおき」が書かれ、続いて、旧稿では第一章に置かれていた主人公ハンス・カストルプの幼少時の紹介に、「祖父」、「洗礼盤」、「カストルプの精神状態の時代による被規定性」などの重要なモチーフを新に加えての全面的な書き直しがおこなわれ（この作業だけで約二ヶ月を費している）、さらに、この章と、旧稿では第二章とされていたカストルプの高山サナトリウムへの到着を物語る章との順序の入れ替えがなされるなど、文字通り、小説を最初から書き直す形での執筆再開だった。

それでは、『魔の山』は、一九一九年四月に執筆が再開された時に、従来の構想とはどの程度に異なる新しい小説へと生まれ変わったのだろうか。

この厄介な問題に対する私なりの解答は、最終的には本稿全体をもってこれに当てるほかないが、さしあたりここでは、マンが旧稿や創作メモ、資料などの見直し作業を始めてから、執筆再開にふみきるまでの十一日間の日記の分析を通して、この問題に若干の照明をあてておくことにしたい。

だが、この問題を考えるにあたって、あらかじめ確認しておかねばならない事が二つある。一つは、前述のように、マンが一九一五年夏の執筆中断までに書いていたのは、カストルプが子供の頃の同性愛的体験を思い出す「ヒッペ挿話」や、愛と病気との関係についてのクロコフスキーの「精神分析」的講演などの少しあとまでであり、それは、たとえ分量的にとっても短編小説の枠には収まりきれないという自覚がマンに生まれていたとしても（あるいは、語りのテンポがすでに長編小説のそれに近づいていたとしても）、基本的には一番最初の作品構想の枠内にとどまるものだったという事である。もう一つは、これまた前述のように、マンは、第一次大戦を体験する過程で、『魔の山』に「教育的・政治的」な狙いを盛込むことを考えはじめ、やがて、これを「進歩主義者」と「反動家」との論争という形で小説のなかで描くという構想までもつようになったとはいえ、厳密に言えば、これは一九一九年四月の執筆再開の時点でも、小説としてはまだ全く書かれていない、

あくまで一つの構想にとどまっているにすぎないものだったという事である。

すなわち、執筆再開の時点で、トーマス・マンの前には、二つの層からなる小説『魔の山』のプランが存在していたわけであるが、以下の記述をわかりやすくするために、最初の構想にもとづく第一の層を仮に「誘惑物語の層」と名づけ、大戦中に生まれた第二の層を「教育的・政治的小説の層」と呼ぶことにしよう。

このように整理することによって、『魔の山』は、大戦後の執筆再開時に、従来の構想とはどの程度に異なる新しい小説に生まれ変わったのかという問いに一義的に答えることの不可能性が明らかになる。なぜなら、マンは当然まず、すでにある程度まで書かれていた本来の構想である「誘惑物語の層」と、まだ書かれてはいないが、構想としては大戦中に生まれてある程度固まりつつあった「教育的・政治的小説の層」とを有機的に結合するために、小説の冒頭部からのかなりの加筆修正を迫られたわけだが、このこと自体は、第二の層の構想が育まれていく過程で不可避免的に生じてきた要請だったはずであり、そのかぎりでは、大戦中における構想の変化と拡大の範囲内に属するともいえるからである。しかし、反面では、執筆再開直前の一九四年四月一日の日記に「セテムブリーニとブンゲ」、つまり「進歩主義者」と「反動家」との論争という構想の創作メモなどの見直し作業の結果をただ一言「時代遅れだ!」と記していることに端的に示されているように、マンが、敗戦と革命という歴史状況の激変を眼前にして、第一の層の構想ばかりでなく、第二の層の構想も、すくなくとも大戦中に考えたような形のままではもはや使えないことを自覚していたことも明らかである。とすれば、その自覚をふまえた上で戦後になされた第一の層と第二の層の統合のための書き直し作業は、やはり、大戦中の構想の変化と拡大の範囲を微妙に踏み越える作業だったはずである。

長期間にわたる中断のあとで旧稿や創作メモなどに目を通したとき、マンをとらえた最大の迷いが、『魔の山』という小説はすでに「時代遅れ」なのではないかという疑念であったことは、旧稿の包みを開いてから執筆再開にふみきるまでの十

一日間の日記から読みとることができる。「『魔の山』の」メモ資料を調べる。鼻風邪ぎみの頭のせいかもしれないが、熱中と呼べるほどのものは、さしあたり感じない。全体が私自身にすら無意味で古臭いものに思え、たえず気乗りしない思いに悩まされながら仕事することになるのではないだろうか。いずれにせよ、全体が〈古き時代の物語〉であることを強調しなければなるまい。実際このなかには、過ぎ去ってしまった時代への諷刺がたっぷりと含まれている——私の見るところでは『臣下』のなかによりももっとたっぷりと。しかし、同じように、時代遅れという印象を与えることだろう——その病理学的な基本特徴からしてすでにそうであろう。……『魔の山』も、『詐欺師』と同様に、書きあげられるよりもずっと以前に、歴史的なものになってしまった（四月一二日）。「セテムブリーニとブンゲについて検討。時代遅れだ！」（四月一四日）。

この「時代遅れだ！」というマンの思いがいかに痛切なものであったかは、この日々の彼の日記に名前が出てくる人物たちをリスト・アップし、そこに浮かび上ってくる第一次大戦直後期のミュンヘンとドイツとヨーロッパのまさに激動する時代状況を、『魔の山』の小説世界——といっても、その全体ではなく、初期の構想を濃密に反映している前半部の小説世界と比べてみれば、私たちにもある程度は追体験できるのではないだろうか（後述するように、ここで、後半部になってようやく登場するナフタの革命論などを持ち出してきてはならない）。なにしろ、この日々の日記に登場するのは、クルト・アイスナー、エルンスト・トラー、マックス・レヴィーンといったミュンヘン革命の立役者たちであり、あるいは、左派革命運動の血まみれの鎮圧者として全ドイツに勇名をはせたグスタフ・ノスケやフランツ・フォン・エップであり、さらに、ヨーロッパの運命を案じる人びとがそれぞれの期待と不安をもってその言動を注目していたウッドロウ・ウイルソンやジョルジュ・クレマンソー、そしてウラジミール・レーニンである。これらの人名の出没する日記の文面には、当然のこととして、レーテ共和国、コムニスムス、ボルシェヴィスムス、内戦、赤衛軍、白衛軍、義勇団、ゼネストなどといった言葉も躍ることになる。このような人名や用語によって表象される時代状況は、『魔の山』の構想の第一の層をなす「誘惑物語」

の対幅画『ヴェニスに死す』を支えていた世界とはもちろんのこと、第二の層である「教育的・政治的小説」の構想の母胎ともいべき『非政治的人間の考察』をマンに書かせた時代状況とさえも、余りにもかけはなれたものであった。マンが執筆再開にあたって、まず「〈古き時代の物語〉であることを強調」する「まえおき」を書かずにはおれなかった気持は、痛いほどよくわかる——と同時に、このような激烈な時代体験に根ざす痛切な想いと創作上の切羽つまった窮状とを、あの「まえおき」のような余裕たっぷりの文章に託すことのできた小説家マンの精神構造には、感心するというよりも、ただ呆れざるをえない。

では、それにもかかわらず、マンをこの「時代遅れ」の小説の執筆再開にふみきらせたものは、何だったのだろうか。四月一二日の日記にいささかやけっぱちな気持をこめて書いている、これはともかく「片づけなければならぬ宿題なのだ」というマン特有の粘り強い職業的倫理感も大いに一役買っていただろう。また、旧稿の包みを開いた最初の日である四月九日の日記に（久しぶりに旧稿を手にし、まだ「時代遅れだ！」という疑念に強くとらわれる前に）「いくつもの刺戟を感じた。〈時間〉のテーマはすぐにでも取りかかりたいし、それに〈禁じられた愛〉のテーマ」と書いているように、『魔の山』の構想のなかでも時代状況と直接的にかかわることが比較的すくない側面への抑えがたい関心が、彼の創作欲を強く刺戟しつづけたということも否定できないだろう。²⁴

だが、それにしても、功成り名遂げた老作家ならともかく、作家としての地位は一応確立していたとはいえ、まだ四十歳台の半ばにさしかかったばかりの第一線の現役作家であり、特に長編小説としてはこれが三作目にすぎない小説家が、しかも世にすねた隠遁的生活や超俗的な形而上的思索を創作基盤とする作家ならまだしも、大戦中を通じて愛国的言論戦で派手に立ち廻りを演じてみせたばかりのマンが、「時代遅れ」と見きわめた作品構想を相手に、今後何年かかるかもわからない執筆にとりかかるはずはない。彼なりに、「時代遅れ」という懸念を乗越えうるかもしれないという可能性をわずかなりと

も見出したからこそ、執筆再開にふみきたはずである。

問題が小説の構想に——それも、すでにかかなりの程度に固定化していた構想にかかわることである以上、私たちも、できるだけ具体的に小説の構想に即した形で話をすすめなければなるまい。そのような視点に立つとき、重要な示唆を与えてくれるのが、四月一七日の日記にみられる次の記述である。ミュンヘンは、この四日前に共産党系のレーテ共和国が成立し、市内や郊外の各地で激しい戦闘がくりひろげられる内戦状態がつづき、ゼネストも始まって、郵便物も新聞もこなくなり、掠奪行為も横行する騒然とした状態にあった。マンは、そのような状況の一端を日記に記し、「事態に対する私の態度は、きわめて不安定だ。しかし、私の個人的願望は〈白軍〉の進入と市民的秩序の回復に向けられている」と書いたあと、『魔の山』についてこう書いている。

「そういうしながら、『魔の山』のことを考える。これにふたたび着手する時が、今こそ本当にはじめてやってきたのだ。戦時中には時機尚早で、中断しなければならなかった。戦争が革命の始まりであることがまず明確にならなければならなかったのだ。戦争が終結するだけでなく、それが見せかけの終結にすぎないことが認識されねばならなかったのだ。反動（中世愛好）と人間主義的啓蒙主義との戦いなど、まったく歴史的・戦前的だ。そのジンテーゼは（共産主義的な）未来のなかにあるようにみえる。人間を精神と肉体の一体性のなかに捉える新しい人間観（魂と肉体、教会と国家、死と生といったキリスト教的二元論の止揚）のなかにこそ、新しいものが本質的にあるが、このような人間観もまた、すでに戦前にも考えていたところである。問題は、キリスト教的な神の国を人間主義的なものと改新するような、つまり、なんらかの超越性に満たされた人間的な神の国をめざす、精神的にしてかつ肉体的志向性をもつ視点である。ブンゲの傾向も、セテムブリーニの傾向も、両者ともに正しくもあれば、間違ってもいる。ハンス・カストルプの戦争の中への解き放ちは、したがって、彼がキリスト教性と異教性といった両成分を教育的に味わい尽した後に、その新しいものを求めている戦いの始まりの中

へと解き放たれることを意味するのである」(括弧内の言葉もマンの記述)

長ながと引用したが、急いでつけ加えておかねばならないのは、私たちは、得たりとばかりにこの記述を完成稿『魔の山』の解釈に無媒介的に適用してはならないということである。マンがカストルプを「革命の始まりとしての戦争の中へ」と、「新しいものを求めての戦いの始まりの中へ」と解き放つのは、これから五年後のことであり、その間に「不安定」だったマンの「事態に対する態度」は徐々に一定の方向をとり始め、「戦争」や「革命」に対する態度も微妙に変わっていったからである。さらに、完成稿『魔の山』には、「ブンゲ」という「反動的な牧師」として構想されていた人間なぞ登場してこないからである。しかしまた、いま指摘した二点こそがマンに「時代遅れ」の構想をなんとかして時代に適したものに転換する可能性をほの見えさせたものと表裏一体をなしていたことも事実である。

先述のように、『魔の山』の結末部に第一次大戦の勃発をもってくることは、すでに開戦直後に思いつかれた着想だった。この着想を最初に明らかにした一九一四年八月二二日付のザームエル・フィッシャー宛の手紙では、マンは次のように書いていた。「かなり以前から私の心を占領していた問題である精神と自然との二元論、人間における市民的な傾向と魔性的な傾向との相剋といった問題が、戦争のなかで公然化してくることでしょう。私は『魔の山』の頽廢のなかに一九一四年の戦争を大詰の解決策として襲いかからせるつもりです。このことは、戦争が勃発した瞬間から確定しています」⁽²⁵⁾

この開戦直後の文章を、ドイツ革命のまった中で書かれた先の一九一四年四月一七日の日記の文章と比べてみれば、同じように第一次大戦の勃発を『魔の山』の結末にもってくるという構想でありながら、その意味づけに微妙かつ決定的な相違があることに気づかざるをえない。むろん、この相違は基本的には、開戦直後と終戦直後という時期の違いから必然的に生じてくるものである。しかし、開戦直後の構想にあっては、「戦争のなかで問題が公然化してくることでしょう」というかぎりでの先への展望はあるにしても、基本的には、大戦勃発は一つの大詰、一つの帰結として小説の最後におかれるはずで

あったのに対して、執筆再開直前の構想では、これが徹底して、未来に開かれたものとして語られているのは、やはり注目しに値しよう。

しかも、一九一四年八月の手紙では、問題はあくまで非政治的な言葉でしか語られていないが、一九一九年四月の日記では、問題は政治と深くかかわっていることが明確に示唆されている。なにしろ、今やマンは、第一次大戦を「革命の始まり」として捉えるだけでなく、終戦を「見せかけだけの終結」とみなすことによって、戦争とともに始まった革命（これを現実のドイツ革命と素朴に同一視してはならない）を現在なお進行中であるとしたうえで、「（共産主義的な）未来のなかにあるようにみえるジンテーゼ」としての「新しいものを求めての戦い」の中に主人公カストルプを送り出そうと構想するのである。『魔の山』がもともと、ぬきさしならぬ没落の物語『ヴェニスに死す』のフォーマルに満ちたサテュロス劇として構想されたものであることを考えれば、たとえ事は結末部の意味づけに限られたことであっても、流動しつづける現在の政治的社会的状況への直接的関与と、未来への開かれた志向とに裏づけられたこの新たな動機づけは、すくなくとも作者の創作姿勢としては大きな転換であったはずである。この創作姿勢の転換を梃子にすることによって初めて、マンは「時代遅れ」の構想にふたたび取組む決心をつけることができたのではないだろうか。——ただし、繰返し断っておくが、このような転換が完成稿『魔の山』でどのように、あるいはどの程度に実現されたかは別の問題であり、それは次章以下で折にふれ問題にしていくつもりである。

だが、創作姿勢の転換は、当然、結末部だけにとどまらず、作品構想の他の部分にまで変更を迫らずにはいない。それを集約的に示しているのが、やがてナフタ像へと変貌していくブンゲ像の問題である。詳しいことは、最終的に完成稿『魔の山』に登場してくるナフタの問題を扱うさいに述べることにするが、いま検討している一九年四月一七日の日記の記述を注意深く読むだけでも、『魔の山』が「時代遅れ」の小説から、「これにふたたび着手する時が、今こそ本当にはじめてやって

きた」小説へと再生するためには——一見「時代遅れ」ではあっても、今こそ書かねばならない「時代の小説」、同時代の小説へと再生するためには、ブンゲではなく、なんらかの意味でナフタ的な人物の登場が必要であったことが察知できる。マンは、大戦中に構想したような形での「進歩主義者」と「反動家」との対立はすでに「まったく歴史的・戦前的」であることを自覚している。また、たとえ小説の最後においてであれ、主人公を「新しいものを求めている戦いの中へと」「革命の始まりとしての戦争の中へと」送り出すことを作者が明確に意図し、その意図の自覚化を抛り所として「時代遅れ」な小説の執筆再開にあえてふみきるとすれば、すくなくとも、「新しいもの」の萌芽、もしくは予感といったものくらいは「歴史的・戦前的」な構想にとりこまれねばなるまい。そして、この時点においては、マンは、未来におけるジンテーゼを「(共産主義的な)」もののなかに認めようとしていたのである。今や「戦争は革命の始まり」と見る眼をもち、市街戦状態にまで尖鋭化したバイエルン・レーテ革命のまっただ中で構想を練り直しつつあったマンにとって、本質的にブルジョア進歩主義者であったハインリッヒ・マンやロマン・ロランら「文明の文学者」たちとの論争の枠内で構想されたにすぎない「教育的・政治的小説」の層の大幅な再検討と修正が要請されたことは、ごく当然の成行きであったと言える。その再検討と修正の作業がブンゲ像への戦後状況の投影という形をとることになったわけだが、これには、二日前の一九年四月一五日の日記に記しているように、当時マンが、「プロレタリア独裁への疑念と嫌悪」を抱きながらも、「社会的革命は、否定されるべきものの否定、すなわち協商陣営の勝利の否定を意味する」という観点から、理念としての左翼社会主義革命に一定の共感をもっていたことが関係していたと思われる。つまり、勝利に酔う不倶戴天の敵である西欧デモクラシーへの対立者「反動家ブンゲ」像を戦後状況のもとにあってもなお有効なものにするために、同じく西欧デモクラシーへの対立者である左翼革命とブンゲとをなんらかの形で結びつける可能性をマンは模索しようとしたのではあるまいか(未来のジンテーゼを「(共産主義的な)」もののなかに見ようとする志向も、このような連関の中にあるものとして考えるべきだろう)。

もちろん、『魔の山』は、たんなる政治的思想小説にとどまるものではない。もっと抱括的な視野から人間の問題を扱う小説である。そのことは、四月一七日の日記で「ジンテーゼ」や「新しいもの」を問題にしたとき、「(共産主義的な)未来」と書いたあと、すぐに一転して、「人間を精神と肉体の一体性のなかに把える新しい人間観」という非政治的用語法に転じているところにも端的に示されている。だが、マンは、これなら「すでに戦前にも考えていた」ことだとして、問題はこのような人間観に基づく「神の国」の実現への展望にあるのだと、ふたたび政治的問題圏に視線を投げかける。すなわち、『魔の山』が「歴史的・戦前的」構想の枠を越え、「時代遅れ」性を克服するためには政治的領域をとりこむことが不可欠であることをマンは承知していたばかりでなく、「(共産主義的な)未来」とか「神の国」といった言葉に示唆されているように、その政治的領域のとりこみ作業を「時代遅れ」に終らせないために、後に結果としてナフタ像として定着するような方向でのブンゲ像のある種の戦後化をその作業の軸とすることを、マンは決めていたと言っていだろう。

すなわち、一九一九年四月二〇日の『魔の山』の執筆再開は、やりかけた仕事は完成しなければならないというマン特有の職業的倫理感に支えられ、「禁じられた恋」というモチーフに代表される従来の構想の第一の層、「誘惑物語の層」への変ることのない持続的関心を当面のつかかりとし、第二の層である「教育的・政治的小説の層」を、大戦後の状況を睨んで流動化させることを前提としてはじめて可能になったのである。この第二の層の流動化が、めまぐるしく変る当時のドイツやヨーロッパの時代状況の激動に対する自己の対処法を求めて動揺しつづけるマンの迷いと苦悩を反映するものであったことは、彼の『一九一八年から一九二一年までの日記』を読めば明らかである。そして、一方にこの歴史的現実の激動、それへの対処の苦悩、その文学的表現を求めての小説構想の不可避的な流動化といった、言わば「変化」の問題の切実さがあったがゆえにこそ、「変化」と「永遠の今」との両面をもつ「時間の問題」が、従来にもまして強くマンの関心をひきつけたのであろう(この点については、後で『魔の山』第六章を扱うときに、あらためて論ずることにしたい)。

さて、執筆再開後の進捗状況は、すくなくとも一九二二年末までは、マンの日記などにもとづいて、かなり詳しくかつ正確に跡づけることができる。しかし、それを微細に紹介してもあまり意味はないので、ごく大まかに、いくつかの章節の執筆時期を確認しておくにとどめよう。

前述のように、マンは、まず「まえおき」を新に書き加えたあと、当時は第一章に置かれていて後に第二章と順序を入替えた章の大幅な加筆作業にかなり難澁したようだが、六月下旬にこの作業を終えた。その後は、ともかく旧稿が存在したということもあって、順調に筆をすすめることができた（ただし、第一章と第二章の入替えがおこなわれたのは翌二〇年一月で、その時また若干の加筆がなされた）。そして、一九年夏に第四章第七節「種々の疑惑と考慮」を最後に旧稿がなくなつた後も、とどこおることなく執筆をすすめ、十一月中旬には、主人公カストルプが今や見舞客としてではなく、患者としてサナトリウムに長期滞在することが決定する第四章の終りまで書きあげた。ここまでで、分量的には完成稿『魔の山』のちょうど四分の一である。残りの四分の三が、第五章以下の三つの長大な章にほぼ等分されているわけである。前述の第一章と第二章の入替作業がここでおこなわれ、二〇年一月一五日に第五章の執筆が始まった。同年夏には、この章の半ばに位置する第六節「フマニオーラ」まですすみ、翌二一年三月中旬に第五章の最終節「ヴァルプルギスの夜」にとりかかり、五月一〇日に第五章を書きあげた。²⁶

つまり、マンは、執筆再開後ほぼ二年間を費して、完成稿『魔の山』の前半二分の一を書きあげたわけである。

ここで確認しておかねばならないことが二つある。

一つは、第五章の終りまでで、分量的に『魔の山』のほぼ半分になるというのは、あくまで結果的にそうなったにすぎないということである。というのは、次章で述べるように、第五章を脱稿した時点では、マンは、完成稿にみられるような形の第六章と第七章の構想を明確にもっていたわけではないからである。

もう一つは、第五章の終りまでで物語られるのは、もともとは三週間の滞在予定で見舞客として高山のサナトリウムにやってきたカストルプが、いつのまにか患者となって居ついてしまい、進歩主義者セテムブリーニの執拗なまでの教育的警告にもかかわらず、滞在七ヶ月にしてついにロシア女性クラウディア・ショーシャと肉体的に結ばれるところまでであって、基本的には一番最初の構想、『ヴェニスに死す』と対をなす「誘惑物語の層」の枠内にとどまるものであるという点である。むろん、「まえおき」や第二章ばかりでなく、「フマニオーラ」や「探究」その他のいろいろな個所に、大戦前のマンなら書かなかったかもしれない文章を探し出すことは、いくらか可能だろうし、また、セテムブリーニの口を介して政治的問題がある程度論じられているのも自明のことである。しかし、構想の第二の層、「教育的・政治的小説の層」を現出させるためには不可欠の人物であるセテムブリーニの論敵がちらりとも姿を見せない以上、物語は基本的にまだ構想の第一の層にとどまっていると言わざるをえない。しかも、いぜんとして姿を現わさないこの「もう一人」の人物こそ、先に見たように、マンが「時代遅れ」の小説を再生させる大きな決め手にしようとした人物である。

誤解を避けるためにはっきり断っておくが、私は、なにも『魔の山』をもっぱら政治思想小説として読みたい一心から、その「もう一人」の人物の登場が遅すぎると非難したいわけでもなければ、だから『魔の山』の前半部は「時代遅れ」で、つまらないと言いたいわけでもない。それどころか、後でまた言及するように、この小説の発表当時から現在にいたるまで、『魔の山』の前半部はおもしろいが、後半部はどうにもついていけないという読者が多くいることは、私も十分承知しているばかりでなく、その意見にある程度まで共感をおぼえてさえいる。だからこそ、この小説のもつ構造上の問題性を、成立史にまでさかのぼって、私なりに整理しておきたいのである。

話を元にもどすと、ここで確認しておきたい二つ目のことは、要するに、マンは、「時代遅れ」を克服するために、すくなくとも従来の構想の第二の層「教育的・政治的小説の層」を戦後状況に対して開かれたものとする必要に、したがって

これがある程度まで流動状態におく必要に迫られたわけであるが、執筆再開後ほぼ二年が経過し、『魔の山』の物語が構想の第一の層「誘惑物語」の大詰まで到達しても、いぜんとして「もう一人」の人物を登場させず——その結果として、第二の層をいぜんとして流動状態に置いたままにしていたという事実にはかならない。

ちなみに、一九一九年四月から二一年五月までの間にも、ドイツは、国内的には、バイエルン・レーテ運動をはじめとする各種の左翼急進運動の武力による鎮圧、右翼勢力によるカップ一揆、バイエルン州に反動政府の成立、新憲法下の初の国会選挙におけるヴァイマル連合勢力の後退と左右両勢力の伸長、その結果としての社会民主党の下野と人民党の入閣、と激動の歩みを続け、対外的には、フランスを中心とする戦勝国側の苛烈な賠償要求や複雑な民族問題を内包する領土削減問題などへの対応に苦悩は深まるばかりであった。

だが、『魔の山』の成立史をマンの日記で跡づけられるのは、第五章脱稿から五ヶ月後の一九二二年一〇月一五日に第六章を書き始めたというところまでである。

残されているマンの『魔の山』執筆中の日記の最後の日、二二年二月一日の日記には、『魔の山』第六章の最初の節〈変化〉はもうすぐ書きあげられそうだと記されている。——ただし、後述するような第六章の執筆作業の異常なまでの難行、遅滞を考えれば、この「変化」の節も大幅に書き直された可能性は十分にある。

III

すでに本稿第一章で簡単に言及しておいたように、『魔の山』を解釈するさいに成立史的観点がいかに重要な意味をもつかをすでに一九七〇年代半ばに鋭く指摘したのは、T・J・リードであった。

リードは、たとえば『魔の山』の思想的核部とされている例の吹雪の中でカストルプが見る夢と彼がそこから導きだす結論についても、この本来きわめて明快であるはずのアレゴリーがさまざまな解釈上の問題を喚起するのは、つまるところ「この小説の構想全体のきわめて独特な成長の経緯に起因する」と言っている⁽²⁷⁾。というのも、ここでは「ずっと以前に構想されたアレゴリー的な小説挿話が、作者の意見が一八〇度転回したために、結局いわば全く正反対のことを語らなければならないことになってしまった」からである。すなわち、この「雪の場面」は、それが第一次大戦中に最初に着想された時には、⁽²⁸⁾合理主義や進歩主義の浅薄さを批判し、ロマン主義の深遠さを提示する機能をもつ挿話であったはずだが、一九二三年にこれが執筆された時には、この間に生じたマンの思想的転向のゆえに、正反対の方向性をもつ挿話として使われることになってしまったというわけである。

こういった問題は、決して個々の場面についてだけでなく、小説『魔の山』の構造全体にかかわってくる問題である。リードは、こう言っている。

「小説の筋は一九一四年で終る。しかし、書き終えられたのは一九二四年になってからだった。ハンス・カストルプの教育は戦争の始まりで終る。しかし、トーマス・マンがそれを語る視点は、戦時中とヴァイマル共和国の初期にマンが学び取ったものを内包している。トーマス・マンは一九二四年の視点から、彼の最も新しい信念を伝えようと努めたのである——そこには教育的志向があった。だから、彼はこの小説は二十世紀の最初の三分の一の時期におけるヨーロッパの魂の状態と精神的問題性との記録であると言うことができたのだ。しかし、この小説は、マンがこの（最も新しい）信念に到達するまでにくぐり抜けなければならなかった過ちと迷いについての報告でもあった——つまり、そこには告白的・自己批判的志向があった。そこから、主人公に二重の役割が与えられることになる。主人公は、メッセージの伝達者であると同時に、批判の対象でもある」⁽²⁹⁾

リードは、ここでは問題を作者と主人公との関係に収斂させているために、意外に陳腐な結論に収まってしまっているようにも見えるが、このすぐ後で「ここにこそ、まちがいになく、小説構造全体を理解するための鍵がある」³⁰と書いているように、彼がここで基本的に提起しているのは、『魔の山』が小説構造全体としてもっている、ある種の二重性の問題であると言っているだろう。その二重性とは、『魔の山』は、一方では、今世紀初頭から一九一四年の第一次大戦勃発にいたるまでの時代を対象とした小説であると同時に、他方では、それを越えて、一九二四年の『魔の山』脱稿にいたるまでの、より長期にわたる時代を対象とする小説でもあるという、「時代の小説」としての二重構造性である。

周知のようにマンは『魔の山』への手引き」と題した自作解説のなかで、この小説は、時代を扱った小説であると同時に、時間を扱った小説であるという点で、「二重の意味における時の小説 (Zeitroman)」であると言っている。³¹それ以来、とにかく作者による自作解説を有難がる研究者たちの間では、これが『魔の山』解釈の基本テーゼの一つとなっているが、この意味での二重性なら、なにも作者じきじきのお墨付をいただかなくても、『魔の山』を読みさえすれば、だれでも容易に気づく事である。

『魔の山』が「時の小説 (Zeitroman)」としてもつ真の問題性は、「時間の小説」と「時代の小説」という二重性の内部に、前述のような「時代の小説」そのものとしての二重性がさらに潜んでいて、しかも、この二つの二重性が互いに緊密に絡みあい、かつ補完しあっているところにこそあるのではないだろうか。これをテーゼ的に言うなら、『魔の山』は、「二重に重なった二重の意味における時の小説 (Zeitroman)」であると言えるかもしれない。

むろん、リードは、ここまで踏みこんだ議論を展開しているわけではない。彼はただ、『魔の山』の特に後半部にみられる、この小説の成立史の特異性から不可避的に生じてきた両義性や、小説構造上のある種の無理をいくつかの具体例にもとづいて指摘するにとどめている。そして、それも、基本的には『非政治的人間の考察』に代表される大戦中のマンの文章と

『魔の山』のテクストとを比較検討する作業にとどまらざるをえなかった。それというのも、彼が『魔の山』の成立史の特性のもつ問題性に着目し、その意義の重要性をいくら強調しても、『魔の山』執筆時のマンの日記が公表される以前には、その特異な成立史そのものを具体的に再現すること自体が不可能だったからである。

だが、それでは、マンの日記が公表され、前章でも見たように『魔の山』の成立過程がかなり明確に跡づけられるようになった現在では、リードの提起した問題を十全に展開することができるといって、決してそうではない。なぜなら、リードの問題提起をつきつめた時にでてくる「時代の小説としての二重構造化」という問題が顕在化してくるのは、主として『魔の山』の後半部、すなわち『魔の山』の第六章と第七章においてであるが、先に見たように、偶然にも、マンの日記は、彼が『魔の山』の第六章を書き始めた時点までしか残されていないからである。そして、それは、西欧ブルジョア・デモクラシーの代弁者セテムブリーニの論敵として構想されていた反動家ブンゲがナフタに変身して小説の中に登場してくるすし前の時点であるが、マンの日記の中には、ナフタという人物名はついに出てこないままである。さらに言うなら、「時代の小説としての二重構造化」が問題になるのは、時代状況の激変もさることながら、なによりもまずその時代状況の激変の中でのマンの政治的「転向」という一事があるからにはかならないのだが、これまた偶然にも、マンの日記は、彼が「転向」の気配を見せ始めるか始めないかの微妙な時点までしか残されていないのである。

要するに、『魔の山』の後半部については、残念ながら私たちは依然として（おそらくは永遠に）その成立過程の詳細を知ることはいかならないのである。

しかし、幸いなことに、私たちは、残されたマンの日記から、「時代の小説としての二重構造化」の問題の追求を深めていく一つの重要な手がかりをつかむことができる。それは、『魔の山』という小説は、成立史の視点から見ても、前半部と後半部との間に一つの断層があったという事実である。平たく言うなら、前半部の第五章までは、最初の構想である「誘惑

物語の層」を土台にして、大筋として構想どおりに書きすすめられたのに対して、後半部は、物語の基本的な筋書きすら不安定なままに書きすすめられたという事実である。

一九一九年四月の執筆再開以来ほぼ順調に筆をすすめてきたマンは、第五章の終り近くまでできたところで、大きな難問につきあたった。「誘惑物語」に一応の幕をおろすにあたって、その幕切れをどういう形にするかという問題と、その誘惑の女神ヴェーヌス、「魔の山」の「守護神」^{ゲルニウス} ショーシャ夫人をその後どうするかという問題である。より具体的に言えば、主人公カストルプに彼女への愛の告白をさせたあと、二人を肉体的に結ばせるのかどうかという問題と、いずれにしても「ヴァルプルギスの夜」のあと〈魔の山〉を下山させることになっている、つまり小説の舞台から退場させることになっているショーシャ夫人を後でもう一度戻ってこさせるのかどうかという問題である。カストルプとショーシャ夫人との関係が通常の「下界」を舞台にした恋愛小説の場合とは全く異なる複雑多岐にわたる意味内容を負荷させられていることや、結果としてあのような形をとることになった『魔の山』の後半部の展開などを考えれば、この二つの問題が、『魔の山』という小説の基本構造にかかわる大問題であったことは説明するまでもあるまい。マン自身もそのことを十分に自覚していたからこそ、この問題をどう処理するかに苦慮していた一九二一年四月一〇日前後の日記の中で、くりかえし『魔の山』の危機」という言葉を使っている。

第一の、カストルプとショーシャとの肉体的交りの問題については、カストルプの愛の告白がおこなわれたその夜にこれを成就させるか、もっと後になって実現させるか、最後まで実現させないか、という三つの可能性をめぐってマンは大部分迷ったようだが（四月一日の日記）、結局、愛の告白の夜に成就させることに決めて、ともかく第五章を書きあげたのだった。³² 他方、その後のショーシャをどう扱うかという問題については、下山した「クラウディア・ショーシャは二度と戻ってこさせない」（五月二六日の日記）というのが、第五章を書きあげた時点でのマンの一応の結論だったと考えられる。

『魔の山』後半部の成立史を考えるさいに直接的に重大な意味をもつのは、言うまでもなく、「ジョーシャは二度と戻ってこさせない」という決定である。なぜなら、ジョーシャの帰山がなければ、『魔の山』の後半部は、いま私たちが読むことのできる完成稿『魔の山』の後半部とは全くと言っていいほど異なったものとならざるをえないし、ひいては『魔の山』全体の構造も根本的に異なったものとなったにちがいないからである。ジョーシャを伴わない形でペーペルコルンの登場も全く不可能とは言えないにしても、その場合には、ペーペルコルン挿話が小説全体のなかでもつ意味合いは大きく変ってしまうだろう。ペーペルコルン挿話だけのことなら、第七章の前半部だけの問題ではないかという乱暴な異論が出されるかもしれないが、ペーペルコルンを伴ってのジョーシャの帰山と、それに対するカストルプの独特の対応という側面がなければ、カストルプにとってペーペルコルン体験のもつ重さは著しく減少してしまい、そのことが『魔の山』全体に大きく影響してくることは疑う余地はない。

にもかかわらず、「クラウディア・ジョーシャは二度と戻ってこさせない」というマンの当時の考えがかなり根強いものであったことは、彼がこのことを、第五章を書きあげる半月前の二年四月二六日の日記に「クラウディアとの関係についての新しい着想。彼女は二度と戻ってこない。彼は彼女をものにした後、彼女のレントゲン写真を抱いて、七年間彼女を待ちつづける」と書いたあと、一ヶ月後の、第五章脱稿後半月をへた五月二六日の日記に、この日に第六章と第七章のための創作メモを整理したことを記したさいに、すぐ続けて「クラウディアを戻ってこさせないことを、あらためて考えた」と書いていることから推測できる。

約五ヶ月後の、第六章を書き始める三日前の一九二二年一〇月一二日の日記には、「ジョーシャ夫人の所在の問題が、絶えず私を不安にする。最後には、おのずからなるようになるほかあるまい」という記述がみられる。この記述からジョーシャの帰山の有無についてマンがこの時点ですべて考えていたか断定することはできないが、それでも、この時期におけるこ

の記述は、マンが後半部については物語の筋の基本的展開についてすら、依然として決して全面的に明確な構想はもちえな
いままに、第六章以下の執筆にとりかかったことを示す重要な証言にはちがいない。

ちなみに、先述の五月二六日から数日間にわたっておこなわれた第六章、第七章のための創作メモの整理作業に関して日
記から知りうるのは、上述のショーシャの件以外には、第八章と第七章とを均等な長さにしたいということと、第六章は
ヨーアヒム・ツィームセンの死で終えるということだけである。

むろん、この時点での第六章以下の創作プランの中に、ヨーアヒムの下山と帰山と死ばかりでなく、カストルプの雪山体
験、セテムブリーニの論敵の登場と二人の決闘、そして、第一次大戦勃発によるカストルプの下山などといった事柄が一応
すでに含まれていたことは間違いないだろう⁽³³⁾（一応と保留条件をつけたのは、セテムブリーニの論敵の人物像の流動性とか、
先にリードの指摘として紹介したようなカストルプの雪山体験のヴェクトルの逆転といった問題などがあり、それに伴って、
後述するように、ヨーアヒム挿話の機能の変化といったことも起きてくるからである）。したがって、私は決して、マンが
全くなんの見通しもないままに第六章以下の執筆に着手したなどと言っているわけではない。だが、他方で、後述のように、
ペーペルコロン挿話だけでなく、たとえば心霊術実験のくだりも、具体的な形ではこの時期の創作プランにはなかったはず
である⁽³⁴⁾。

ところで、ここで全く別の視点から照明をあててみよう。その視点とは、『魔の山』の完成時期についてのマン自身の見
通しという視点である。といっても、あまり早い時点でのものは意味がないので、『魔の山』前半部の七割以上がすでに書
きあげられていた一九二〇年夏以後の、マンのこの問題についてのコメントのいくつかを紹介しよう。

まず一九二〇年六月二二日付のあるインタヴューで、マンは、『魔の山』を書きあげたら『詐欺師フェーリクス・クルル
の告白』の続きを書くつもりだが、この二つの長編小説を完成したら自分は五〇歳になっているだろうと言っている⁽³⁵⁾。この

時点で満四五歳になったばかりのマンが書いていたのは『魔の山』第五章第六節の終りあたりであり、『魔の山』が完成するのは彼が五〇歳になるわずか八ヶ月前だった。

むろんジャーナリズム向けの自作宣伝の臭いがないわけでもないこの発言を頭から信用することはできないが、半年後の二〇年一二月三十一日の日記にある次のような記述は、それが大晦日の日記の、しかもその最後に記されたものであるだけに、マンの本心を表していると考えていいだろう。「いずれにせよ、一九二一年には『魔の山』が完成するだろう」——この時マンが書いていたのは、第五章の終りから二番目の節の半ばあたりである。ちなみに、マンが第五章を書き始めたのは二〇年一月一五日であるから、この一年間で第五章の約七割を書いたにすぎない。同じペースで書いたとしたら、一年後にも分量としては、完成稿の第六章の半ばまでもいかないかもしれない。仮にマンが翌二一年にこの一倍半のペースで書いたとしても、完成稿の第六章の終りまでの長さにも満たないし、二倍のペースで書いたとしても、第七章の五分の一までも達しない。そして、マンが靈感を得て熱にうかされたように一気に多量の原稿を書くようなタイプの作家でもなければ、『魔の山』がそのような書き方で書ける性質の小説でもないことは、マン自身がだれよりも良く承知していたはずである。とはいえ、文学者の創作過程を単純な数量計算に還元するのは、強引というより、愚にすぎるだろう。

しかし、次のような証言にまで接すると、私たちはやはり計算せざるをえないのではないだろうか。

すなわちマンは、二一年五月一〇日に第五章を書きあげたあと、講演評論『ゲーテとトルストイ』の仕事に没頭し、五ヶ月後の同年一〇月一五日から第六章の執筆を始めたわけだが、その一ヶ月余り後の、といってもまだ第六章の十分の一くらいしか書いていない一二月二一日に書いたアルフレート・ハイン宛の手紙の中で、「この冬のうちに『魔の山』を書きあげる」可能性をほのめかしているのである。⁽³⁶⁾ さらに一二月二九日のエルンスト・ベルトラム宛の手紙では「『魔の山』を書きあげたらすぐにライン旅行の件を考えよう」と書いて、⁽³⁷⁾『魔の山』の完成がそう遠くないことを匂わせ、一月三〇日付の

フィリップ・ヴィトコップ宛の手紙でも「この冬のうちに『魔の山』を終えなければなりません」と書いている。⁽³⁸⁾ 短期間のうちに同じ意向をくりかえし表明しているばかりでなく、ベルトラムなどは当時のマンの文筆活動上の最も親しい相談相手ですらあったことを考えれば、あと数ヶ月で『魔の山』を書きあげたいというマンの意志と、それなりの見通しは、かなり本気であったにちがいない。つまり、この時点でマンがもっていた第六章以下の構想は、あと数ヶ月で書きあげることも不可能ではないと思われる程度のものであったということである。そうすると、先の一九二〇年の大晦日の日記にもとづく数量計算も一定の説得力をもってくるのではないだろうか。⁽³⁹⁾

くりかえし断っておくが、数量計算は問題の所在を明示するための安直な方便にすぎない。問題の本質は、『魔の山』の第六章以下、分量的にも全体の半分強に相当する後半部は、一九二一年秋の時点においてもなお、完成稿『魔の山』とはかなり異なった形で構想されていたという点にある。⁽⁴⁰⁾

ちなみに、マンが「この冬のうちに『魔の山』を書きあげたい」とした一九二一年から二二年にかけての冬の間に実際に書くことができたのは（二二年七月初め頃でようやく第六章第四節「激怒。そのうえなんともやりきれないこと」を執筆中だったということから推して）、⁽⁴¹⁾ いくら多めに見積っても、第六章の四分の一から、せいぜい三分の一、つまり後半部全体の八分の一から六分の一くらいにすぎなかったと思われる。そして、第六章をどうにか書き終えたのですら、なんと一年半後の二三年夏であった。⁽⁴²⁾ この間に特筆するほどの大病をした形跡もなく、また例の「転向」宣言の講演評論『ドイツ共和国について』⁽⁴³⁾ 以外には特に多大な精力を要した著作があるわけでもなく、他方では早期完成を促す出版社からかなり厳しい督促もあったことなどから考えれば、これほど大幅な執筆の遅滞の原因は、作品そのものの中に――構想の変更を迫られた小説そのものの内部にあったと考えるのが順当であろう。

以上見てきたように、私たちは、残されていたマンの一九一八年から二二年までの日記を手がかりとして、『魔の山』の

前半部と後半部との間には、成立史的に見ても一つの大きな亀裂もしくは断層があることを確認することができる。私の言う「時代の小説としての二重構造化」という問題は、このような成立史上の事実をも踏まえたうえで出てくるものである。事は決してショーシャの帰山の有無といった小説のプロット上の問題や、ペーペルコルン挿話その他の部分的追加の問題にとどまるものではなかった。そのことは、もしマンの予定どおりに『魔の山』が一九二一年のうちに、もしくは二三年の春までに書きあげられていたら、それは、すくなくともマンの決定的な「転向」以前の作品として完結していたはずであるという一事を考えてみるだけでも明らかであろう。

ここで私たちは、『魔の山』の第五章から第六章への移行は、ショーシャの下山とナフタの登場に象徴されるように、『魔の山』の構想が本来もっていた二つの層、「誘惑物語の層」と「教育的・政治的小説の層」の間での一種の重心移動がおこなわれる場であることを想起しなければならない。しかも、先に見たように、マンは、この第二の層を大戦後の状況にたいして開かれた状態に置くことによって、小説のアクチュアリティを確保しようと考えて執筆再開にふみきったのだった。第一次大戦後のドイツとヨーロッパの混乱と激動を考えれば、このような試み自体がきわめて困難な企てだったろうことは容易に想像できるが、それでも、もしマン自身の政治的立場が不変であつたら、その困難さはかなり軽減されたはずである。早い話が、その場合には『非政治的人間の考察』による『魔の山』の思想的負荷の軽減作業が大いに有効に作用しただろう。当初の第六章以後の構想が完成稿よりもかなり短かったのではないかと思われるのも、この事とどこかで関係しているはずである。だが、マン自身がそれまでの反デモクラシーの立場から一転して、デモクラシー擁護、共和国支持を宣言するとなると、たとえマン自身は自分の思想の一貫性を強く主張しようとも、いや強く主張すればするほど、その一貫性と、にもかかわらずの転身とを盛りこまれることになった『魔の山』にとっては、『非政治的人間の考察』が逆に加重負荷となつてのしかかってくることになる。そして、皮肉にも、マンが第六章の執筆にとりかかった時期が、マンがおのれの転身

の必要性をしいに自覚しはじめていった時期とほぼ一致したために、『魔の山』の後半部は、前半部とはまた異なった、いちだんと屈折した成立経緯と小説構造の変化をくぐりぬけねばならなかったのである。

マンが共和国支持という政治的「転向」を公然と表明したのは、一九二二年一〇月一五日の講演『ドイツ共和国について』においてであるが、むろん、このような「転向」が突如として生じたはずはない。と言って、マンの「転向」への助走がいつから始まったかを厳密に断定することも、問題の性質上、不可能というほかない。⁴⁴だが、ラーテナウ暗殺事件が「転向」表明の直接的契機となったことに端的に示されているように、野蛮な右翼勢力の跳梁にたいする危機感が彼の「転向」の最も大きな要因となっていたことを考えれば、「転向」への助走開始時期は一九二一年の秋頃だったと言っていいのではないだろうか。というのは、この頃から、時事問題にふれた彼の発言には厳しい右翼批判が目立ち始めてくるからである。このことは、一九二一年七月にヒトラールが名実ともにナチス党の指導者となり、マンの住んでいたミュンヘンを中心にして、彼らの蛮行がいちだんと激烈さを増してきたことと密接に関連していると思われる。

一九二二年九月末に執筆され、いったんは印刷までされながら、妻カーチャの強い反対によって公表されなかった評論『ユダヤ人問題によせて』は、マンの最も早い時期のナチス批判を含んでいる。すなわち、マンはそこで、自分は決して協商側イデオロギーに与する民主主義者や進歩主義者ではないと断わりながらも、「ハーケンクロイツの暴行愚行がその粗野な大衆的表現である今流行の文化的反動」を痛烈に批判し、「保守主義はつねに、穴居人どもの、精神に敵対する粗暴な人間たちの専有物でなければならないだろうか」と言い、逆に、精神にたいして愛情をもち、繊細優雅にして自由で大胆なもの、つまり真の文化を解するユダヤ人たちへの連帯感の表明でこの評論を結んでいる。⁴⁵——そして、この評論の校正刷をマンが手にした二一年一〇月一五日というのが、彼が『魔の山』の第五章を実質的に書きあげてから五ヶ月たって、いよいよ第六章の執筆を始めた日でもあった。

マンは、同じ頃にオスカル・A・シュミッツの『謎の国ドイツ』の書評をゲオルク・ミュラー書店への手紙という形で書いているが、そのなかでも、左翼と同時に右翼をも批判し、「救いは、硬直した保守主義に墮することなく、しかも保守すべき何物かを持っている人びとからのみもたらされる」と書いている。⁴⁶そして、同年一月二〇日の日記には、「ヘデモクラシー」に反対して戦うことが、はたして私にふさわしいことかどうか、それが最後の良心の問題として残る」とまで書いている。

だが、むろん、このような「転向」への助走は、なんのためらいもなく一直線に進んだわけではない。たとえば、二一年一月一四日付のフィリップ・ヴィトコップ宛の手紙のなかで、マンは『魔の山』について、「この奇妙な教養小説は、本当のところ、またもや〈没落〉から脱け出すことはないのです」と書き、その理由を、「山の魔法の呪縛から守ってくれるもの」を「私自身の生活がおそらくもはや取入れることはないだろうからです」と説明している。⁴⁷これは、マンがまだ「転向」を、というよりも「死への共感」から「生への奉仕」への転身を明確には自覚していないことを示していると同時に、『魔の山』という小説が、なによりもまず当時のマン自身の身の処し方の問題と不可分の関係にあったことを明らかにしているという点で注目に値する言葉である。

マンは二一年末に『魔の山』の第六章第一節「変化」を書きあげたあと、二二年一月に評論『独仏関係の問題』を書いている。この評論もまた、『魔の山』の第六章から始まるセテムブリーニとナフタとの論争が基本的には、第一次大戦前の問題によってでもなければ、『非政治的人間の考察』に集約されているような第一次大戦中の問題によってでもなく（むろんそれらをも内包してはいるが）、第一次大戦後の、一九二〇年代初頭のマンの問題意識によって強く規定されたものであることを窺わせてくれる。

この評論を書いた直後に、ナフタのモデル問題でよく引合いに出されるマンとルカーチとの出会いがあるわけだが、「転

向」への助走と『魔の山』成立史との関連性という観点からすれば、むしろ、同じこの時期に——ようやくセテムブリーニの論敵がナフタとして登場してくる第六章第二節「もう一人」の執筆にとりかかろうとしたまさにその時期に、第一次大戦中のマンの窮極の論敵であり、ある意味でセテムブリーニの最大のモデルと言っている兄ハインリヒ・マンと約六年ぶりで和解したことの方がより重要であろう。⁴⁸

この頃から、マンの「転向」への助走は加速度を増していく。マン自身が「転向」宣言『ドイツ共和国について』の冒頭で、いささか過剰なまでのアクセントをつけて紹介している、「共和国の父」エーベルト大統領および「共和国の王」ハウプトマンを前にしての講演『信条と教育との有機的連関の理念』をマンがおこなったのは、『魔の山』第六章第二節または第三節を執筆中の二二年三月初旬ごろである。そして、これまた『ドイツ共和国について』のなかで、「転向」にいたる重要な里程碑として言及されている短いホイットマン論をマンが発表したのは二二年四月中旬である。そのなかでマンは、「ホイットマンが〈デモクラシー〉と呼んでいるものは、私たちが古風に〈フマニテート〉と呼んでいるものにほかならない」と書いて、⁴⁹間接的にはあるが、ついに民主主義支持の立場を表明したのであった。

そして、マンを共和国支持の表明という「転向」に踏み切らせる最終的な契機となった外務大臣ヴァルター・ラーテナウの右翼青年による暗殺事件が起きた二二年六月二四日というのは、『魔の山』の成立史から言えば、ヨーアヒムがついに下山する決心を固める第六章第四節「激怒。そのうえなんともやりきれないこと」が書き始められた頃にあたる（ちなみにこの節の表題とマンのラーテナウ暗殺事件に対する反応とが見事に照応しているのは、はたして偶然であろうか）。

ちなみに、このすこし前の六月八日付のヨーゼフ・ポンテン宛の手紙で、マンは、『魔の山』第六章第三節「神の国と悪しき救済について」のなかで、今やセテムブリーニとナフタとの際限のない論争にまでつきあうことになったカストルプが、「市民としての責任感をもって」自分の思索を整理する作業を「陣取りごっこ（regieren）」と名づけていることを紹介した

うえで、「私は〈陣取りごっこ〉をしなければならないことが、たくさんあります」と書いている⁵⁰。これもまた、『魔の山』第六章以下で語られる事柄が、マンの「転向」問題と深く密接にかかわっていたことを示唆する、と言っては、牽強附会にすぎるであろうか。

無理にそこまで言わなくても、以上に見てきたことから明らかなように、『魔の山』第六章の成立過程は、作者マンの「転向」への道程と時期的に完全な並行関係にあった。すなわち、戦後状況に対して開かれたまま暖められてきた「教育的・政治的小説の層」がいよいよ『魔の山』のなかで具体化されようとしたその時に、肝心の作者自身の政治的立場があらためて激しく流動化していったのである。とすれば、小説の構想が大きく揺らぎ、執筆の進行が遅滞したのも当然の帰結であつたと言えよう。「転向」宣言『ドイツ共和国について』に照応する第六章第七節「雪」が書きあげられたのは、翌三三年六月になってからであつた⁵¹。

だが、「時代の小説としての二重構造化」の問題が生じてくるのは、決して、たんに『魔の山』の構想が途中で変ったからだけでもなければ、作者の政治的立場が作品執筆の途中で変ったからだけでもない。それだけのことなら、似たような例はいくらでもあるかもしれない。「時代の小説」としての『魔の山』の問題は、これまで述べてきたこと全てにもかかわらず、この小説を第一次大戦の勃発によって終らせるといふ基本的構図だけは、マンが最後まで守り通したところから生じてくるのである。大戦前とは激変した戦後の状況を小説の内部に浸透させ、なお変化しつづける状況のなかでの作者自身の転身をも小説の中心部にまで投影しようと思図しながら、にもかかわらず、その「時代の小説」の時代設定だけは、時代状況も作者自身の政治的立場も今とは全く異なっていた頃に設定した枠を頑なに守り通そうというのである。

しかもまた、マンのこの頑なさもまた、彼の「転向」の内実を反映したものだところ、トーマス・マンという作家の、そして『魔の山』という作品の特異性があつた。それというのも、マンは、『ドイツ共和国について』において共和国

支持を宣言したが、同時に、自分が支持するドイツ共和国は、一九一八年ではなく、一九一四年に「死を覚悟して出征していった青年たちの心のなかで成立した」ものであることをも、はっきりと表明していたからである。⁽⁵²⁾

IV

『魔の山』の後半部については、初版の刊行当初から現在にいたるまで、その小説構造上の難点もしくは問題点がさまざまな形で指摘されてきた。たとえば、第七章第七節のレコード鑑賞や第八節の心霊術実験などは、時間の経過をもっともらしくみせるための埋め草にすぎず、この小説には一貫した構成が欠けているといった非難は、最も率直かつ素朴な批判といえよう。いや、カストルプが「死への共感」から「生への奉仕」へと教化されたのなら、その後ますますサナトリウムでの醉生夢死の生活にのめりこみ、あげくの果に、まさに人間解体の場にはかならず第一次大戦の戦場に志願兵としてとびこんでいくというのは、なんとも納得できないという意見の方が、もっと率直かつ素朴な批判かもしれない。そして、『魔の山』は「教養小説」なのか、それとも「教養解体小説」なのかという近年のH・コップマンやB・クリスティヤンセンらの学問的論争も、とどのつまりは、このような素朴な批判や疑問と深くかかわっているのである。

P・メンデルスゾーンのように、『魔の山』には一貫した構成が欠けているという上記のような批判に対してマンを擁護するために、この小説独特の「音楽的・理念的な関連複合体」による緊密な統一性を主張するマン自身の言葉を持出してきても、あまり意味はない。というのも、あらかじめ言ってしまうなら、『魔の山』後半部の小説構造上の問題点は、小説を支える主軸の一つが大きく移動し、変形したにもかかわらず、マンがあくまで当初の構想にもとづく緊密な統一性を維持すべく、持てるかぎりの至芸と力業を発揮し、かつそれにある程度まで成功したところにこそ生じてきたものにほかならない

からである。

いや、そう言ってしまったては、やはり誉めすぎになろう。というよりも、実はマン自身が『魔の山』後半部の構造上の問題を大いに気にしていたのである。彼は、『魔の山』の刊行後約一年たった一九二五年一〇月三〇日付のインタヴューで、『魔の山』の登場人物たちと作者自身との関係を訊ねられたさいに、こう答えている。「ハンス・カストルプが〈雪〉の節でポジティブな瞬間を持つかぎりにおいて、私は今なお誰よりもまずカストルプと立場を共にしたいと思っています。私の本の構成上の一つの欠陥は、あの〈雪〉の節が最後に位置していないことです。そのために、上昇線をたどっていった、あのポジティブな体験で頂点に達するということにならず、下降線をとることになってしまっています」——つまり、マンは、ここでは、先に要約したような『魔の山』後半部に対する批判を基本的には自分でも認めていることになる。

むろん、マンのこの自作批判を鵜呑みにして、「雪」の節と、そこでカストルプが獲得する「人間は善意と愛のために、おのれの思考に対する支配権を死に譲り渡すべきではない」という認識とを勝手に小説の末尾に置き変えた形で『魔の山』を解釈するのは、安易にすぎるだろう（現実には、この種の安手のヒューマニスティックな読み方がいちばん流布しているようだが）。というのも、上述のようなマンの自作批判が一方で真実性は否定できないものの、他方で、マンが、「雪」の節を小説の末尾ではなく、第六章の後半部に据えた時に生じてくる構成上の問題点は十分承知のうえであの場面を書いていることもまた明白だからである。つまり、彼は、吹雪の中でのカストルプの思索体験を、それが極限状況の中での、しかも夢を媒介としたものであるだけに、意識の表層からは消失しても本質的には「いついっまでも覚えている」はずのものとして描くと同時に、「一時間後には」早くもカストルプの夢は「色あせはじめ」、「自分が何を考えたのだったか、彼にはその晩のうちにすでに、もはやしかとはわからなくなっていた」という、なんともイローニッシュな結びでこの「雪」の節を終えているのである。⁵⁶

マンのこの巧妙かつ狡猾な細工のおかげで、カストルプは本当にあの吹雪の中での思索を忘れてしまったのか否か、あの夢に媒介された認識は本物だったのか否かという議論が、今日にいたるまで研究者たちによって際限もなくくりひろげられることになったわけである。そして、その議論が、「雪」の節の後ふたたび「下降線をとる」ことになる主として第七章部分の解釈をめぐる議論と連動してくることは、必然的な成行きである。だが、もともと作者がどちらともとれるように巧妙に書いた個所をめぐる、ああではない、こうではないと議論してみたところで、作者の仕掛けた狡猾な罠にはまるだけではないだろうか。それよりはむしろ、なぜ作者はこのような曖昧な書き方をせざるを得なかったのか、なぜこのような書き方をしてまで、この場所に「雪」の節を据えたのか、という問題を考えてみる方がより肝要であろう。

カストルプは吹雪の中での夢と思索を忘れてしまったのか否かという形で問題を提起すると、どうしても分析の焦点はそれ以後の物語の展開の方に移ってしまいがちで、その結果、『魔の山』後半部の構成上の問題点は「雪」の節以後、主として第七章にあるかのごとくになってしまい、「雪」の節がおかれている第六章そのものの構造分析がなおざりにされがちである。だが、「雪」の節があくまで第六章におかれている以上、小説全体の中でこの節がもつ意義をめぐる議論は、なによりもまず第六章の構造分析にその照準が合わせられねばなるまい。

それに、本稿の前章で述べたように、成立史的に見ても、『魔の山』に大きな転回が生じたのは、ほかならぬ第六章が書き始められた時期においてである以上、『魔の山』後半部を読み解く鍵は、なによりもまず第六章の中に探するのが順当であろう。

むろん、これまでも、第六章をめぐる議論がなされてこなかったわけではない。それどころか、ある意味では、『魔の山』のなかで最も議論と研究の対象となってきたのは、第六章であったとさえ言えるかもしれない。なにしろ、ついにナフタが登場してきて「教育的・政治的小説の層」が全面的に浮上する章であり、そして、カストルプの雪山体験が語られる章

であるから、これは当然のことである。だが、従来の議論や研究の多くは、カストルプの吹雪のなかでの夢や思索それ自体の解釈や、ナフタとはいったい何者なのかという探究や、カストルプはどのような教養体験をつみ、どのように成長しているのか（あるいは成長していないのか）という議論に終始して、この第六章で『魔の山』という小説そのものに何が起きたのか——敢えて極論するなら、この第六章で『魔の山』という小説そのものがどう変ってしまったのか、というところまで議論がすすめられることはほとんどなかった。そのことは、小説として読むかぎり、第六章がセテムブリーニとナフタの論争、カストルプの雪山体験、ヨーアヒム・ツィームセンの下山と帰山と死、という三つの主要素から構成されていることは明白であるにもかかわらず、研究者たちの視線はもっぱら一番目と二番目の要素に注がれ、三番目の要素は無視されるか、たまに言及されることはあっても、三つの主要素の一つとして扱われ、その三つの相互関係にまで分析がすすめられることはほとんどないという事実にも示されている。

さて、『魔の山』の第六章は、「変化」と題された節から始まる。この節の冒頭で語られる時間論は、私が先に指摘した「時代の小説としての二重構造化」を内包した、つまり「二重に重なった二重の意味における時の小説」としての『魔の山』のからくりを解き明かす手がかりを与えてくれるものであり、だからこそ、ほかならぬ第六章の冒頭に置かれているのだが、そのことは、後で述べた方がわかりやすいだろう。

ともあれ、マンは、「変化」と題する節を第六章の冒頭におくことによって、小説がここから新しい局面に入ること示唆し、読者に物語の新たな展開への期待をもたせる。そして、新たな展開のために舞台装置を大幅に取替えるかのように、シヨーシャの下山を報告し、セテムブリーニをサナトリウムから近くの下宿に引越させ、ヨーアヒム・ツィームセンがひそかに激しい想いをよせるマルシャをも下山させ、さらにヨーアヒム自身の下山が近いことを匂わせるのである。『魔の山』全編を通じて、一度にこれだけの配置換えがおこなわれ、一度にこれだけの「変化」が語られるのは、ここだけである。

(なお、ショーシャの帰山の可能性については、睦言のなかでの口約束とか、医師の予測とかにもとづくカストルプの期待として語られているだけで、いずれサナトリウムに舞い戻ってくることはまちがいないとしても、それが果して小説の中においてであるかどうかの決定は巧みに保留されている)。

これだけの前準備をしたうえで、第二節でいよいよ「もう一人」の男ナフタの登場となるわけだが、まず、彼が登場してくる瞬間の設定のしかたに注目する必要がある。それは、散歩しながらカストルプがヨーアヒムにカルデア人の天文学的知識について語り、「三千年の昔でさえ」悠久の無限に比べれば「つい近年のように思えてくる」といったスケールの時間感覚を披瀝して従兄を煙にまいたあと、一転して話題が戦争のことに移った直後のことである。⁵⁷これが作者によって周到にくまれた設定であることは、カストルプたちがセテムブリーニによってナフタに紹介されたあとで、カストルプに「従兄と私は、さっき、あなたたちの後を歩きながら、たまたま戦争の話をしていたんです」と言わせ、ナフタに「聞きましたよ。その言葉が耳に入ったので、私はふりむいたのです」と応じさせていることからして明白である。⁵⁸しかも、ナフタを呼び出す呪文の役割をはたす「戦争」という言葉が、ある程度の戦争一般論を含みながらも、基本的には、カストルプとヨーアヒムの素朴な会話から、セテムブリーニとナフタの丁丁発止の議論にいたるまで、一貫して第一次大戦を示唆していることも、容易に読みとることができる。

本稿の第二章で見たように、「進歩主義者」と「反動家」の論争を『魔の山』のなかに取込むという構想は、もともと第一次大戦が始まってから、マン自身が「武器をとっての思想勤務に召集され」ていくなかで明確になっていったものであるが、ナフタのこの登場のしかたは、このことを如実に反映していると言える。

だが、これまた本稿の第二章で述べたように、マンはこの西欧流進歩主義者の論敵として登場させるべき人物を、大戦後の状況に対しても開かれた状態におくことによって、「時代遅れ」となりかねない小説構想のアクチュアリティを保持し

ようとしたのだった。「進歩主義者」の方ではなく、「反動家」の方を時代の動きに合わせて変身させていくというのは、なんとも卓抜な、なんともイロニーシユな発想である、などと手放して誉めてしまつてはならない。なぜなら、前にも言つたように、ドイツ敗戦後のマンにとっては、勝ち誇る協商陣営のイデオロギー、つまりセテムブリーニのような「進歩主義者」に代弁される西欧ブルジョア・デモクラシーに対抗して、しかもなお戦後の状況下にも有効な思想的立場を確立することは、自分が生きぬいていくための不可欠な要請だったのであり、その意味でも「反動家」こそが時代の動きに対応した人物に仕立てあげられる必要があつたからである。これは、決して、マンが最初は「反動家」を自分の代弁者となりうるポジティブな人物像として形象化しようと考えていたという意味ではない。主人公を「進歩主義者」と「反動家」との「教育的・政治的」な論争の真中に立たせようという構想が早くから固まっていた以上、「反動家」はあくまで一方の極として定位されていた。だが、「進歩主義者」をイデオログとする西側戦勝諸国の驕りがマンの腹に据えかねるものであり、にもかかわらず時とともに彼らの現実的優位が露骨に示されていっただけに、小説の中でこれに対抗する極に立つ「反動家」に負託されるアンチテーゼは、もともと所持していたものに加えて、戦後の新しい時代の動きのなかから取込めるものは全て取込むことによって、質量ともにグロテスクなまでに増殖していったのだった。こうして、一九二二年春にようやく小説の中に登場することとなつた「反動家」ナフタは、ありとあらゆるアンチ・西欧ブルジョア・デモクラシーの思想を――中世的禁欲主義も、イエズス会的教権主義も、天動説擁護に象徴される反・近代科学の立場も、トルストイ的ロシア農民主義も、プロレタリア独裁のコミニズムも、テロルと服従とを説くファシズムも、要するに一切合財ひっくるめて背負い込まれることになつたのである。

ところで、ナフタというまさに奇怪な人物像については、以前から、例のジェルジュ・ルカーチがモデルだとする説に始まって、ナフタとナショナル・ボルシェヴィストたちとの共通性を指摘するものや、あるいはエルンスト・ブロッホの

『トーマス・ミュンツァー論』との親縁性に着目するものなど、数多くの示唆と刺戟にとむ研究がなされてきたが、一昨年（一九八六年）に発表されたハンス・ヴィスキルヒエンの『小説の中の時代史』でおこなわれているナフタ研究は、ナフタ像の解明に新しい時期を画した研究と言えよう。というのは、従来のナフタ研究は、ナフタの展開する錯綜した議論のある一面に拡大照明をあてて、それを同時代の一思潮と比較もしくは照合するといった傾向が強かったのに対して、ヴィスキルヒエンは、マンの日記などの新資料を手がかりにした綿密な実証的作業によって、ナフタ像の形成過程をいわば発生学的に追跡し、この人物像に潜む多層性をかなり明確にすることに成功しているからである。そのヴィスキルヒエンによれば、ナフタ像の形成過程には、大きく分けて三つの層が認められるという。⁸⁹第一は「近代科学の批判者としてのナフタ」で、これは、マンが少なくとも一九一五年以前から強い関心を示していたマックス・シュタイナーやヨハネス・シュラーフらの近代科学批判の思潮を土台にし、敗戦直後期におけるハインリヒ・フォン・アイケンの中世に関する研究書などの読書によって補強されていた層である。第二は「中世的」コミュニストとしてのナフタ」で、これは、上記のアイケンの書物によってマンの中世への関心が強められたことと、大戦直後期のラディカルな左翼革命運動のなかに弥漫していた宗教的、千福年説的情熱、エルンスト・ブロッホやグスタフ・ランダウアーらの著作に見られる現代革命と中世との結びつけ、さらにはコミュニズム運動とロシア的なものとの重なりといった、さまざまな要素が結合して生じてきたものである。第三は「保守的革命的擁護者としてのナフタ」で、これは、思想的には『第三帝国』の著者メラ・ファン・デン・ブルックらに代表され、各種の右翼団体によるテロ活動などを背後で支えていた時代の思潮に対するマンの反応として生まれてきたものである。この右翼的思想や行動は、むしろ大戦直後期から横行していたわけであるが、マンがその危険性を真に認識しはじめたのは、前述のように、一九二一年末から二三年にかけての時期であった。

すなわち、ナフタ像の形成過程には、大戦直後の左翼革命運動の昂揚期と、一九二二年前後の右翼勢力の跳梁期（より正

確には、マンがその危険性を認識した時期というべきだろうが）という二つの時期が、大きな節目となっているわけである。

だが『魔の山』におけるナフタ像のもつ問題性は、このような形成過程についての事実確認だけで解決するわけではない。ナフタ像のもつ真の問題点は、ヴィスキルヒェンも指摘するように、「歴史的に順を追って生起してきたものが、美学的には同時的なものに溶解されている」ところにある。つまり、ナフタが、上述の三つの層を段階的に追って変身していく人物としてではなく、「相互に分別できないように重なり合った種々の異質なイデオロギーの集合体」として描かれているところにある。ヴィスキルヒェンは、ナフタ像がこのような厄介さをもつにいたった原因は『魔の山』の世界には歴史的变化というものが存在しないことにある」と言い、それというのも当時のマンには「歴史の動きは、それが精神的なものの動きのなかに沈澱し、それどころか、精神的なものの方向を規定するようになった時にしか、すなわち、歴史は思想の動きとしてしか形象化することができなかったからである」と説明している。

私は、このヴィスキルヒェンの解釈を、それ自体として、なにも無下に否定するつもりはない。もし問題がナフタ像の問題だけであるのなら、これはこれとして筋の通った解釈であろう。だが、多くのナフタ問題研究者と同じように、ヴィスキルヒェンもまた、ナフタ問題の面白さに心を奪われて、大事なことを忘れてしまっているのではないだろうか。ナフタを主要な登場人物の一人とする『魔の山』という小説、それ自体の問題を。

初めから主要な登場人物の一人として考えられていた人物像の構想が大きく変っていけば、それに伴って、小説そのものの構想が大きく変っていった当然であろう。ナフタ像の形成過程に認められる二つの大きな節目が、本稿でも追跡した『魔の山』そのものの成立史上の二つの大きな節目——ドイツ革命のさなかにおける大幅な書き直しを伴った執筆再開と、マンの「転身」と時を同じくした第六章執筆の大幅な遅滞——と全く重なりあっていることは、このことを強く示唆していると言えよう。そして、私がナフタ像の形成過程の問題に立入る前に、ナフタの小説の中への登場のしかたを問題にしたのは、

私にとっての主要な関心事が、ナフタ像の発生学的な変貌過程それ自体ではなく、上述のような過程をへて、しかも独特の同時的、重層的な「集合体」として形成されたナフタを登場させることによって、『魔の山』という小説に不可避免的に生じざるをえなかった変化の方にあったからにはかならない。

これまでに検討してきた『魔の山』の成立史およびナフタ像の形成過程に内包されていた種々の契機からして、ナフタの登場と同時に小説の中に第一次大戦と、そればかりでなく戦後状況までもが持ち込まれることは避け難いところであった。いや、それは、「時代遅れ」を克服するために、作者自身が望むところでした。ナフタが「戦争」という言葉を合図にして登場してくるのは、まさにそれゆえにほかならない。

しかし、にもかかわらず、小説そのものの全体的構想からして、作者にはここで第一次大戦そのものや、いわんや戦後状況を描くことは許されなかった。早い話が、最後で第一次大戦に出征するカストルプは、今からあらためてセテムブリーニとナフタとの「教育的・政治的」論争という教養体験をめぐりぬけねばならないのである。それに、なによりもまず、ここで「時代の小説」としての要請に応じて第一次大戦を勃発させてしまっただけは、ここまで小説を支えてきた「時間の小説」としての『魔の山』の時の流れは完全に断ち切れ、小説世界そのものが根底から崩壊してしまうだろう。このようなディレンマは、マンが一九一九年春の執筆再開にさいして「教育的・政治的小説の層」を戦後状況のなかに開放して流動化させた時点ですでにある程度は覚悟されていたはずであるが、その後のドイツおよびヨーロッパ社会の激動は、「非政治的人間」マンの予想をはるかに上まわるものであったと考えられる。すくなくとも、あの時点でマンが、一九二二年に自分が政治的「転向」を迫られることになるということまで予想していたはずはない。

これまでに日本で書かれた最も包括的で緻密な『魔の山』研究論文である「トーマス・マン『魔の山』の研究——〈時の小説〉の成立と構造」のなかで、片山良展は、ナフタがはじめて登場してくる第六章第二節を評して「この場面は、〈時〉

と〈永遠〉との切りむすびがもっとも劇的に行なわれる個所のひとつであり、『魔の山』の Zeitroman としての二つの相、すなわち〈現代小説〉と〈時間小説〉の接点をまさに具現していると言えよう」と鋭く適切な指摘をおこなっているが、この「劇的な切りむすび」と「接点」の背後には、上述のような作者マンのディレンマが息を殺して潜んでいたにちがいない。ここで重要な意味をもっているのが、ヨーアヒム・ツィームセンの下山と帰山と死である。この一連のヨーアヒム挿話が第六章の物語の進行全体を貫く一筋の赤い糸として使われていることを読者がはっきりと気づかされるのは、あの吹雪の中で「自分が何を考えたのだったか、彼にはその晩のうちにすでに、もはやしかとはわからなくなっていた」という文章で終る「雪」の節を読み終え、続いて、「この間もずっとハンス・カストルプは、従兄から短い便りを受取っていた。最初のうちは吉報で調子のいい便りだったが、だんだん威勢がわるくなり、最後には、なにかとても悲しい事を辛うじて取り繕っている感じのものになってきた」という書出しで始まる第六章の最終節「兵士として立派に」を読み始めた時である。

私たちは、ここでまず、カストルプの雪山体験はヨーアヒムが下山して軍務についている間になされたものであることを、あらためてしっかりと確認させられるのである。つまり、カストルプの雪山体験は、決して無時間的な次元でのみ、「永遠の今 (nunc stans)」の相の下でのみなされたのではないことを、作者は読者に告げているのである。その意味では、この第六章第七節から第八節へと移行する個所こそ、第六章第二節にもまして「〈時〉と〈永遠〉との」、「〈時代の小説〉と〈時間的小説〉との「切りむすびがもっとも劇的に行なわれる個所」であると言えよう。

換言するなら、カストルプの雪山体験は、従兄ヨーアヒムの下山体験と対をなす形で描かれているのである。——さらに言うておくなら、この二人はたんなる従兄弟としてではなく、ディオスクレーンの双生児として描かれていることをこのさいに思い出しておくことも必要だろう。いずれにせよ、このような二つの相の切り結びや、二つの体験の対置への視点を欠落させたまま、カストルプの吹雪の中での夢と思索との意味するところや、また彼はそれをすぐに本当に忘れたのか否かを

議論してみても始まらないことだけはたしかである。

マンがヨーアヒムの下山の問題と、彼の不在中にも山上で進行しつづける物語の展開との間にある関連をいかに細心の注意を払って、しかも、あまり目立たぬようさりげなく描こうとしたかは、第六章第八節「兵士として立派に」をもう少し読みすすんだところにでてくる次のような個所に如実に示されている。

医師の警告を無視して平地に戻り、半年余り軍務に励んだあと、病状を悪化させて高山のサナトリウムに帰ってきたヨーアヒムは、ここで死ぬまでの約四ヶ月をふたたびカストルプとともに過すことになる。「兵士として立派に」の節は、基本的には、この四ヶ月間を描いているわけである。したがって、ヨーアヒムのしだいに衰弱していく様子がこの節の物語の展開の主軸となっている。この節でもセテムブリーニとナフタの議論は何度か描かれるが、それが小説の中の議論である以上、あくまで小説全体の物語の進行と無関係に読まれてはならないことは言うまでもあるまい。作者もそのことを読者に警告するかのように、「ハンス・カストルプは、わきにいる高貴な本質的存在の戦士であり代表者である人物（ヨーアヒム——筆者注記）のことが、というよりも、その人のこれまでとは違った目の表情が気になっていたので、二人の議論には半分しか注意をむけていなかった」といったようなコメントを時折さしはさんでいる。そして、私がいま注目したいのは、そのようなコメントの一つとしてさりげなく挿入された次の文章である。「断っておかねばならないが、弟子と二人の師のそれぞれとの間で別々におこなわれたフリーメイソンに関するこれらのおしゃべりは、まだヨーアヒムがこの上の人びとところに帰ってくる以前になされたものである。」⁶⁴

先述のように、小説のこのあたりはすでにヨーアヒムの帰山後を扱っているところであるだけに、そこにわざわざ挿入された、それも、いかにも言い忘れてはならないとばかりに後から付記する形で挿入されたこの断り書くらい、マンがナフタの登場による「教育的・政治的小説の層」の本格的浮上とヨーアヒムの下山の挿話とをいかに緊密に関連づけて描こうとし

ているかを、明確に示すものは他にあるまい（カストルプの雪山体験がヨーアヒムの下山期間中になされたものであることも、この断り書によってあらためて再確認を迫られることになる）。

では、その気にさえなればヨーアヒムが下山中のもっと前の節で断り書なしにセテムブリーニとナフタの議論のなかに組みこむことがいくらでも可能だったはずなのに、わざわざ、雄々しい決意をもって軍務に馳せ参じながら、志をはたせず空しく帰山し、深い失意のうちに死を迎える兵士ヨーアヒムの最期を物語る「兵士として立派に」の節のなかに、このような断り書をつけて挿入するという手の込んだ操作によって読者に手渡されるものは、いったい何だろうか。断り書のなかでは、それは「弟子と二人の師のそれぞれとの間で別々におこなわれたフリーメイソンに関するこれらのおしゃべり」と書かれている。たしかに、それは、まずナフタがカストルプに「セテムブリーニはフリーメイソンである」ことを暴露し、フリーメイソンの歴史について教えてくれる会話と、それを受けてセテムブリーニが、自分はフリーメイソンであることを認めたいうえで、例によってカストルプに訓戒をたれる会話である。だが、事が「フリーメイソンに関するおしゃべり」だけであれば、あの断り書は無意味であり、不必要であろう。あの断り書が必要であったことの意味は、あくまでも、この二つの会話において、下山中のヨーアヒムがどのような文脈のなかで言及されるかということに求められねばならない。

まずナフタとカストルプとの会話では、ヨーアヒムのことは二度話題にのぼる。最初は、ナフタがフリーメイソンについての講義を始める前に、セテムブリーニのブルジョア的啓蒙主義の時代遅れ性をくそみそにこきおろしたうえで、次のように言う個所である。「破局のなから本当に勝利者として立ち現われ、破局から利益を引出すのは、自己の内部で古いものの諸要素と最も未来に富むものとを融合させて、真の革命を生みだす生きた精神です…… あなたの従兄さんはどうしてられますか、ハンス・カストルプさん。ご存知のように、私はあの人にとっても好感をもっているのですよ」——ヨーアヒムの⁽⁶⁵⁾ことが話題にのぼる際のこの唐突さは、逆に、ここでナフタが語っている事柄と下山中のヨーアヒムとの関連の緊密さを示

している。ナフタはすでに登場後もない頃から、中世的教権政治と現代のコミュニズムとファシズムとをごちゃまぜにした、つまり戦後状況を濃厚に反映した主張をおこなっているから、ここで彼の言う「真の革命」なるものも、そのようなものとして理解しなければならぬし、彼の言う「破局」が第一次大戦を意味することも明らかである。つまり、ナフタが第一次大戦の意義を語っている最中に、不意に——ということとは、それだけ必然性をもって、下山中のヨアヒムが呼出されるのである。⁶⁶そして、ナフタの問いかけに対して答えるカストルプが指摘するのは「ヨアヒムの身分に内在するある種の熱狂的テロリズム」である。この時ナフタとカストルプの二人の念頭に結ばれているヨアヒムのイメージは、ひいては作者が読者に喚起することを求めているヨアヒムのイメージは、はたしていかなるものなのだろうか。すくなくとも、それが、ヨアヒムは『ブデンブローク家の人びと』のトーマス・ブデンブロークから『ヴェニスに死す』のグスタフ・アッセンバッハにいたる系譜につらなる「業績の倫理家」であるといった通説的な理念的解釈だけでは収用しきれないものを含んでいることだけは間違いあるまい。

この会話で二度目にヨアヒムのことがでてくるのは、ナフタがカトリック教会とフリーメイソン結社とに共通した秘儀について説明するときである。今度はカストルプの方が、ナフタの話の途中で口をはさみ、ヨアヒムが軍隊生活のなかから書いてよこす手紙を引合いに出して、軍隊生活のなかにもそれに類似したものがあるらしいと言うのである。ナフタはこれにかまわず講義をつづけて、次のように言う。これらの秘儀の「眼目となっているのは、最後の究極的なものの象徴的表現であり、オルギア的な原始宗教性の諸要素であり、死滅と生成、死と変容と復活とを賛える放縦な暗夜の犠牲奉獻の儀式なのです。⁶⁷」ナフタの講義はさらにイシスやエレウシースの秘儀へと展開し、ヨアヒムの名はこの会話ではもうでてこない。たしかにカストルプの差し出口そのものは、ナフタによっても無視されているように、他愛ないものかもしれない。しかし、そうであればあるだけ、作者がここで下山中のヨアヒムをことさら呼出していることに意味がないかぎり、例の断

り書は宙に浮いてしまうだろう。

下山中のヨーアヒムを嬉々として平時の軍隊生活に勤しむ律儀な青年兵士として想起するかぎり、ナフタの秘儀についての講義とヨーアヒムとの間にはなんの関係もでてこない（ナフタがカストルプの言葉を無視するのもそのためである）。両者の間に深い関係が生ずるのは、私たちが、砲弾の飛びかう泥濘の戦場で、第一次大戦の戦場で戦う兵士ヨーアヒムの姿を想い描くときだけである。それというのも、『魔の山』の最後で描かれる第一次大戦の戦場は、L・ザントも指摘しているように、エレウシースの秘儀やデメーテル神話など、まさに「死滅と生成、死と変容と復活とを賛える放縦な暗夜の犠牲奉献の儀式」と深くかかわった独特の神話的空間を内に秘めたものとして描かれているからである。⁽⁸⁸⁾そして、だからこそ、マシは、「この世界を覆う死の饗宴からも、あたり一帯の雨の夕空を燃えあがらせているこの熱病のような業火からも、いつか愛が生まれでてくるだろうか」という、再生への祈りをこめた文章で『魔の山』を結ぶことができるのである。——これをナフタの視点から見ると、「破局」のなかで「真の革命」をめざして戦う戦士ということになる。すなわち、小説の最後で描かれる第一次大戦の戦場場面を秘められた媒介項とすることによってはじめて、下山中のヨーアヒムが呼出される第一の個所と第二の個所とは関連したものとなるのである。

さらに言うておこなら、B・クリスティヤンセンが指摘しているように、『魔の山』の最後の戦場描写がカストルプの雪山体験の描写と共鳴しあっていることは明らかである。だが、この余りにも形而上学的な解釈に夢中な研究者は、カストルプの雪山体験と戦場描写との関係のみに注意を奪われて、それを問題にするのなら見落してはならないはずの、カストルプの雪山登山との対応関係において描かれているヨーアヒムの下山の問題にまで目配りすることを忘れてしまったようである。『魔の山』という小説の本質をなす多層性や多義性を無視して、形而上学的解釈の唯一絶対性を主張するために、「時代の小説」としての側面を切捨て、戦場場面の解釈においても、それが第一次大戦であることすら否定しかねないようなクリス

ティヤンセンには、いわんや「時代の小説としての二重構造的性」などどうでもいいことなのだろう。

さて、ヨーアヒムの下山中におこなわれたという特別の断り書のついたもう一つの会話の方はどうであろうか。このカストルプとセテムブリーニとの会話では、ヨーアヒムのことは一度しか言及されない。すなわちセテムブリーニは、フリーメイソンの問題はさっさと切り上げた後で、カストルプをあらためてドイツの若い世代の代表者とみなすかのようなあらたまった口調で、「東と西との間に置かれた」ドイツがヨーロッパ文明に対して、「ヨーロッパの幸福と未来に対して」もつ責任を説き、今やドイツが東と西のいずれを選ぶか、決断の時が迫っていると主張する。これに対してカストルプが頑なに黙りこんでいると、セテムブリーニはこう言う。「あなたは黙っていらっしゃる。あなたとあなたのお国は、あなた方は、いつも留保たっぷりの沈黙を守っていらっしゃる。その沈黙は見通し難く、その深さを判断することすらできません——（中略）——しかし、無言は孤立化をまねきます。おそらく、あなた方は、あなた方の孤立を行動によって打破しようと試みられることになるでしょう。あなた方は、従兄のジャコモさんを（セテムブリーニ氏はヨーアヒムのことを言いやすいように、いつもジャコモと呼んでいた）、従兄のジャコモさんをあなた方の沈黙の前に押し立てるおつもりでしょう。へさすれば彼は二人を薙ぎ倒し、残りの奴らは逃げうせる」……」⁷⁰

ここで今度はセテムブリーニによって不意に呼出される下山中のヨーアヒムは、今度こそそのものずばりの、戦う兵士ヨーアヒムである。しかも、「沈黙」と「行動」をめぐる議論は、私たちに容易に『非政治的人間の考察』の「非文学的な国」の章を思い出させる。すなわち、第一次大戦において戦っているドイツを想起させるのである。

これが、ヨーアヒムが下山している間におこなわれた会話であるという断り書つきで、敗軍の将さながらに安らかな死場所を求めて帰山してきたヨーアヒムの最期を描く「兵士として立派に」の節で紹介される二つの会話である。

念のために言っておくなら、第六章第四節「激怒。そのうえなんともやりきれないこと」の終りでヨーアヒムが下山して

から、第六章第八節「兵士として立派に」でヨーアヒムが帰山してくるまでの間には、「撃退された攻撃」、「精神錬成」、「雷」の三つの節があるが、この三つの節のなかでヨーアヒムのことがある程度問題になるのは、「精神錬成」のなかでカストルプがイエズス会士ナフタと軍人ヨーアヒムとの共通性について考える個所だけである。そのさいにナフタとヨーアヒムを結びつける存在として、くりかえし名前をあげられているのは、ナフタの属するイエズス会の創立者スペインのロヨラと、「ヨーアヒムの総師プロイセンのフリードリヒ大王」である。第一次大戦時のトーマス・マンおよびドイツ人にとって、フリードリヒ大王が四方の敵を相手に勇猛果敢に戦うドイツ軍の象徴であったことは説明するまでもあるまい。しかも、ここでは「ヨーアヒムの総師プロイセンのフリードリヒ大王」という言葉につづけて、そのフリードリヒ大王の「戦争規則」である「攻撃！ 攻撃！」「敵に食いさがれ！」「常に攻撃あるのみ！」といった言葉まで列記されているのである。⁽⁷⁾そしてこの前後に、軍人の「名誉と栄誉」とか、「手に血塗ることを恐れないという原理」などについて語られるのである。

「兵士として立派に」の節の冒頭で紹介されるヨーアヒムの手紙を別にすれば、先の二つの会話のなかの三個所と今のこの個所とが、下山したヨーアヒムについて、彼の不在中に語られる全てである（厳密に言えば、この間に他にも一、二個所でヨーアヒムの名がでてはくるが、特に問題にするほどの言及はなされていない）。これらの記述を一つに束ねたとき、はるか遠方におぼろげに浮かびあがってくるのは、第一次大戦に死を賭して従軍していったドイツ軍兵士の像であると言っは、はたして言いすぎだろうか。

そして、先の二つの会話に続いて描かれるセテムブリーニとナフタの論争のなかで、「地中海的・古典的・人文主義的な伝統は、はたして人類全体の問題であり、したがって人間にとって永遠のものであるのかどうか——それとも、それは、せいぜい一つの時代の、つまり市民的・自由主義的な時代の精神形式であり、その時代の付属物であったにすぎず、したがってその時代とともに死滅するとも考えられるのではないかどうか、という問題こそが、今日まさに問われている問題なので

ある⁽⁷²⁾」という議論がおこなわれるとき、そのかたわらにいるヨーアヒムの「目の表情」に死の影が現われ始めたことを読者は知らされるのである。

ナフタの特異な思想ばかりでなく、このあたりの一連の会話や議論の内容が、たんに大戦争中の『非政治的人間の考察』ばかりでなく、大戦後の、とりわけ政治的「転向」に前後する時期のマンの思索をも色濃く反映していることは、マンの読者には容易に見てとることができる。たとえば「東と西との間に置かれた」ドイツに課せられた責任についてのセテムブリーニの訓戒は、たしかに思想的テーマそれ自体としては一般的にも、またマンの思想的軌跡においても必ずしも目新しいものではないが、それがドイツの若い世代に対する切迫した真摯な要請としてあらたまった熱っぽい口調で説かれるとき、私たちはいやでも、一九二一年九月四日にマンがリュールベックでおこなった講演『ゲーテとトルストイ』の結びでドイツの若者たちに熱い口調で呼びかけられる「ローマでもなく、モスクワでもなく、ドイツ！」⁽⁷³⁾という訴えを連想せざるをえない。また、「地中海的・古典的・人文主義的な伝統」についての議論にしても、同じ講演のなかで「今日まさに問われている問題」として提起されているものである。いや、『ゲーテとトルストイ』に限らず、一九二二年の『独仏関係の問題』にしても、一九二三年の『ドイツ共和国の精神と本質』にしても、要するに一九二二年一〇月の「転向」宣言『ドイツ共和国について』を中心とするこの時期の一連のマンの評論群において問題の核心部を形成しているのは、つまるところ、ナフタの意味での「真の革命」（反動とボルシェヴィズムとファシズム）のもつ危険性への批判と、セテムブリーニ的進歩主義（西欧ブルジョア・デモクラシー）のもつ独善性の指摘とを踏まえて、「中間の国」ドイツの使命を模索するなかで、「地中海的・古典的・人文主義的な伝統」の問題を「今日の問題」として考えていこうとする試みにはかならない。

すなわち、ナフタ像の戦後化、さらには二〇年代化は、当然の帰結として、『魔の山』という小説全体の戦後化、さらには二〇年代化をひきおこしたのである。そして、カストルプが吹雪のなかで獲得する「人間は善意と愛のために、おのれの

思考に対する支配権を死に譲り渡すべきでない」という、ある意味ではきわめて陳腐とも言える思想が、マンの政治的「転向」の文学的表現となりえたのは、それがこのように戦後化され、二〇年代化された小説構造のなかに据えられているからにほかなるまい。

マン自身が、よりによって『ドイツ共和国について』の結び近くで、自分の政治的「転向」と『魔の山』との、とりわけ「雪」の節に集約されている『魔の山』の基本的理念との同一性を強く示唆している以上、マンが第六章における『魔の山』の戦後化、二〇年代化を積極的に意図し、読者にもこの部分を決してたんに戦前の物語としてばかりではなく、戦後の「今日の問題」としても読んでくれるよう期待したであろうことを否定することはできない。この意図と期待を小説のなかになんとか織込むために、マンが苦心惨澹して利用したのがヨーアヒム挿話だったのではないだろうか。

むろん、『魔の山』の物語は、ヨーアヒムの手紙の方にもとづいて進行する。すなわち、ヨーアヒムは、あくまでも平時の軍隊勤務を短期間体験しただけで、病状を悪化させて、ふたたびダヴォースのサナトリウムに帰ってくるにすぎない。そして、下山期間中のヨーアヒムの平地での生活については、簡潔な筆緻で必要最小限のことが報告されているにすぎない。これは、『魔の山』の特異な小説空間を維持するためには当然な措置である。だが、そうであるだけに、私たちは下山期間中のヨーアヒムについても、それが『魔の山』の特異な小説空間のなかではどのように捉えられているかをも——つまり、先に見たような、下山中のヨーアヒムについて〈魔の山〉の住人たちが会話や思索のなかで紡ぎだすもう一つのイメージをも見落してはならないはずである。

ここで、参考までに、ヨーアヒム像についての成立史的な事柄を紹介しておこう。主人公カストルプがダヴォースのサナトリウムにやってくる直接的契機となる従兄の存在は、当然のことながら、『魔の山』の一番最初の構想のなかにすでに含まれていたと考えられる。事実、イエール大学に保管されている第一次大戦前の原稿にもすでにこの従兄のことは書かれて

いるが、ただし名前は、最初はローレンツ・ツィームセンとなっていたのが、後でヨアヒム・ツィームセンに変えられたことがわかる。⁷⁵しかし、名前の変更はの場合さしたる問題ではあるまい。私が注目しておきたいのは、H・ザウアーエーシッヒが指摘している、ヨアヒム像には実在の第一次大戦の傷痍軍人ギュンター・ヘルツフェルト・ヴュストホフの姿が投影しているということの方である。⁷⁶この人物は、第一次大戦に青年士官として従軍し、脚に重傷を負って、野戦病院で長い間療養したのち帰還した人物である。彼が前線からマンに書き送った手紙がマンを感動させ、マンがこの手紙を『非政治的人間の考察』に引用したことなどが機縁となつて、ヘルツフェルト・ヴュストホフは、帰還後マンの家に親しく出入りするようになった。当時マンが、この名誉の負傷を負つて、戦いに敗れて荒廃した祖国に帰ってきた青年士官にいかに関心と共感をよせていたかは、マンが一九一八年一〇月末の末娘エリーザベトの洗礼式にさいして、エルンスト・ベルトラムとともにこの青年に代父になつてもらつてゐることからもわかる。そればかりでなく、マンは翌一九年に『幼な子の歌』のなかでこの洗礼式の様子を描いたさいに、彼に熱烈な賛歌を呈している。⁷⁸

むろん、私は、このような人物がモデルになつてゐるのだから、ヨアヒム像もその方向で理解すべきだなどと言いたいのではない。ただ、このモデル問題を手がかりにして言えることが一つだけある。それは、ナフタ像と同じく、ヨアヒム像も、最初から最後まで戦前あるいは戦時中の構想のまま『魔の山』のなかに描かれてゐるわけでは決してなく、長い成立史の過程で戦後状況による照射を強く受けてゐるのだということである。その意味でも、セテムブリーニやショーシャの描かれ方や役割に微妙な変化が認められると同様に、ヨアヒムの描かれ方や役割にも途中で変化や屈折があると考えることがむしろ自然なのである。

話をもとに戻すと、第六章におけるヨアヒムの下山は、一方では、先に指摘したように第一次大戦への出征兵士のイメージを密かに宿しながら、他方では、たとえ手紙の内容の要約的伝達という形をとつてはいるにせよ、小説の最初の方を

除けばともかく『魔の山』の特異な小説空間に下界の、通常の世界の空氣が流れこんでくる唯一の局面である。(下界から叔父が訪ねてくる挿話を語る「撃退された攻撃」の節は、あくまでも〈魔の山〉という特殊な空間のなかでの話として描かれている)。それが通常の時間感覚がゆるぎなく支配する平地での出来事として報告されるがゆえにこそ、読者は、ヨーアヒムが下山中に従事したのは、いまだ第一次大戦以前の平和な時代における軍隊勤務であるという平地的次元での事実を承認せざるをえないのである。一方でナフタとセテムブリーニの議論やカストルプの雪山体験を介しての戦後状況の侵入が顕著になり、小説の時代相が不安定になってきている時であるだけに、この平地からの報告がもたらす歯止め機能は大きい。ここに、マンがヨーアヒム挿話を第六章全体を貫く縦糸として用いた大きな理由があったと考えられる。つまりマンは、最も単純であるかに見えるヨーアヒムという人物像にも密かに二重性を仕掛けて下山させ、これを最大限に利用することによって、今や不可避的になった「時代の小説としての二重構造化」を支えようとしたのである。

いや、結論を急ぐのは控えて、もうすこしヨーアヒム像に秘められた二重性を見ておこう。

すでにヨーアヒムが下山の決意を固めるところからして、私たちは第一次大戦への連想を誘われるのである。下山したいとはやる気持を抑えかねているヨーアヒムの苛立ちは、第六章に入ると第一節から早くも読者にはっきりとわかる形で描かれているが、先に言及したナフタ登場のきっかけとなるカストルプとヨーアヒムとの戦争をめぐる会話のなかで、ヨーアヒムは「戦争は必要だよ。戦争がなければ世界はまもなく腐敗するだろう、とモルトケも言っている」と語る。⁽⁷⁹⁾そして、第六章第四節でついに下山を決意するときのヨーアヒムの言葉は「不潔だ。なにもかもおそろしく、むかつくほど不潔だ」とい⁽⁸⁰⁾う、目に涙をにじませて吐き捨てるように口にする言葉である。つまり、ヨーアヒムが軍務につくために下山するのは、腐敗し不潔きわまるものとなってしまった世界の浄化を戦争に期待しての行為にはかならない。これが第一次大戦勃発にさいしてマンが示した感激の最も本質的な部分と照応していることは、開戦直後に書かれた『戦時の思想』の次のような一節を

読めば明らかである。「(戦前の世界は) 蛆虫のような精神の害虫どもがうようよ群がっていないなかっただろうか。文明の生み出したさまざまな分解要素のために発酵し、悪臭を放ってはいなかっただろうか。……戦争！ 私たちが感じたものは、浄化であり、解放であった。途方もなく大きな期待であった。詩人たちが語ったのは、このことについてである。このことについてだけである」⁽⁸¹⁾——そして、第一次大戦に「世界の浄化」を期待したのは、決してマン一人ではなかったのも周知の事実である。

むろん、『魔の山』という小説全体がこのような第一次大戦観を土台にして書かれているわけであり、その意味では、ヨーアヒムの下山からとりたててこのような連想をするのは強引にすぎるといふ反論が出されるかもしれない。たしかに、マンは、第七章第六節「巨大な鈍感」以後の最後の数節で、サナトリウムの澱みきった雰囲気、いささか露骨なまでに大戦直前期のヨーロッパの閉塞状況に見立てた形で描いている。したがって、『魔の山』における第一次大戦勃発にかかわる直接的描写そのものは、あくまで最後の数節に求めるべきであって、私にしても、第六章におけるヨーアヒム挿話を第一次大戦そのものの描写であると強弁したいわけではない。問題は、あくまで、ヨーアヒム挿話が喚起する連想作用であり、その連想作用によって可能となる「時代の小説としての二重構造化」の問題である。そして、ヨーアヒムの下山の決意から第一次大戦勃発を連想することが、決定的外れでも、強引でもないことは、マン自身が保証してくれている。というのは、マンは第七章第六節「巨大な鈍感」で、いよいよ第一次大戦勃発の直前期の閉塞状況の描写にとりかかろうというさいに、まずこう書いているからである。「ハンス・カストルプが最近おちこんでいる行詰りは彼の身振りや表情にも現われていたが、それは、亡きヨーアヒムがあゝの無茶な反抗的決意を心中ひそかに固めつつあった時の身振りや表情をはっきりと思い出させるものだった」⁽⁸²⁾と。そればかりではない。続く第七章第七節「妙音の饗宴」は、カストルプのレコード鑑賞という形で『魔の山』全体をもう一度ふり返って総括する役目を担っている節だが、そこでカストルプがグノーのオペラ『ファウスト』

のヴァーレンティーンを介して思い出すヨーアヒムは、まさに「愛する祖国をあとにして」「最も激しい戦場」へとおもむく勇敢な兵士として現れるのであり、そして、これに続く第七章第八節「ひどくいかわしいこと」では、ついに第一次大戦時のドイツ軍兵士の戦闘服を連想させる服装をしたヨーアヒムの霊が出現するのである。⁶⁴

よく引合いに出されるように、マンは『魔の山』への手引き」のなかで、この小説を真に理解するためには、二度読みかえして、その細心に組立てられた意味連関を小説の「後の方に向かってばかりでなく」、「前の方に向かって」きちんと把握して読んでほしいと言っているが、この作者自身の強い勧めにしたがって『魔の山』を二度読みかえす読者は、第六章のヨーアヒム挿話を読むとき、後で描かれるこれらのことを想起せずにはいられないはずである。そして、それこそが作者の望む読み方なのである。

あるいは、同じことを逆に小説の「後の方に向かって」言うなら、下山していったヨーアヒムのイメージとして、後になるほしだいに鮮明度を増してくるのは、ヨーアヒムの平地からの手紙に描かれていた平時の国内勤務に勤しむ律儀な見習士官の方ではなく、むしろ、先に指摘したような、〈魔の山〉の住人たちによって密かに紡がれたもう一つの、戦うドイツ軍兵士ヨーアヒムのイメージの方である、と言っているだろう（むしろ、前者の方も全く消滅してしまうというわけではないにしても）。

このようなヨーアヒム挿話に秘められた二重性は、第六章第八節「兵士として立派に」で、ヨーアヒムが帰山し、セテムブリーニとナフタの議論のかたわらで衰弱していき、そしてついに死を迎える様子が克明に描かれていくなかで、かなりあからさまに示唆されるようになっていく。

それというのも、マンは、ヨーアヒムの死を、決してたんなる病死としてではなく、勇敢に戦って死んでいった兵士の戦死としても描いているからである。ゲーテの『ファウスト』に依拠し、したがってグノーのオペラ『ファウスト』を介

して先述のレコード鑑賞の場面にも結びつく「兵士として立派に」というこの節の表題からもそのことはわかるが、特にヨーアヒムの死の前後の描写には、彼の死は本質的に戦死であることを示唆する表現がいろいろな形でちりばめられている。たとえば、ひげを剃ることもできなくなったヨーアヒムのやつれた蠟色の顔を縁どるひげは「兵士が戦場で伸びるにまかせている兵隊ひげそっくりだった」と描写され、ヨーアヒムの死を確認した医師ベーレンスは聴診器をはずすと、その「兵隊ひげの生えたヨーアヒムの動かぬ顔を見つめながら」、「無茶な若者でした、だがとてもいい男でした。無理を承知で強行したんですね、——むろん、彼の低地での勤務は無理と強行の連続だったからです、——熱に浮かされながら、彼は一か八かで軍務を遂行したのです。名誉の戦場へと、いいですか、この脱走者は私たちのところから逃れて、名誉の戦場へと赴いたのです。しかし、名誉とは、彼にとっては死だったのです……」と言う。⁽⁸⁶⁾ また、女患者シュテール夫人は、ヨーアヒムの遺骸を見て「英雄でしたわ、英雄でしたわ」と叫ぶ。⁽⁸⁷⁾

もちろん、ヨーアヒムの死の描写にも、この小説全体をつらぬくフモールにみちた筆致は存分に揮われている。それは、自明のことである。だが、「兵士として立派に」の節をしめくくる次のような数行には、もはやフモールも、イロニーも含まれてはいない。

「私たちは、最終幕に入る前にもう一度だけ幕をおろすことにしよう。だが幕が静かにおりていく間に、私たちは、高地に居残ったハンス・カストルプとともに、はるか彼方の下界に想いを駆せて、低地の湿っぽい墓地に目を向け、そこで軍刀が一閃し、号令がひびき、兵士ヨーアヒム・ツィームセンの木の根が絡みあった墓の上に、熱烈な弔礼である三回の小銃斉射が響きわたるのに耳をすますことにしよう」⁽⁸⁸⁾

この数行は、その書き出しからもわかるように、たんに「兵士として立派に」の節のしめくくりとしてだけではなく、最後から二つめの章である第六章全体をしめくくる言葉としてここに置かれている。すなわち、マンは、立派に戦死していっ

たドイツ兵士への、抑制されてはいるが、かぎりない哀惜の念をこめた鎮魂の言葉をもって『魔の山』第六章を結んでいるのである。そして、一九二〇年代のドイツで書かれ、出版される現代小説において、立派に戦死していった若い兵士への挽歌がうたわれるとき、それが連想させるものは、第一次大戦で死んでいった若者たち以外にはありえないことをマンは十二分に承知していたに違いない。

言うまでもなく、私は今、本稿の課題から見た場合の問題点の所在を明確にするために、マンが芸術的手腕のかぎりをつくして多義化し多層化している精緻にして巧妙きわまる小説の網の目を強引に切裂いて、その一側面だけに照明をあてているのである。たとえばマンは、物語がいぜんとして第一次大戦前のお話であることを示すために（とはいえほとんどお義理のようにごく時たま）一九一〇年頃の時事的話題を挿入している。また、ヨリアヒム像を特定の時代、特定の戦争における具体的な兵士像に結びつかせないために、さまざまな工夫をこらしている。それどころか、マンが一九二五年一〇月のあるインタヴューで語っているヨリアヒム像についての作者自身による注釈を借りるなら、ヨリアヒムの「勤務至上のプロイセン的原理は、たんなる軍隊的なものを越えて、生への奉仕性にまで高められた勤務至上主義です」⁹⁰という解釈をすら可能にするようにさえ描かれている。したがって、これらの点を持出して私の解釈を批判することはきわめて容易である。だが、それを言うのなら、真の問題の核心は、マンがヨリアヒム像をそのような形でしか描かなかったところにこそあるのではないだろうか。換言するなら、マンがヨリアヒムを第一次大戦に参戦するためではなく、「八月に始まる大演習」に参加するのをなによりの楽しみに軍務に勤ませるといふ描き方しかなかったところに、名誉の戦死ではなく、「十一月に」名誉の病死をとげるといふ描き方しかなかったところにこそあるのではないだろうか。マンは、第六章の初めの方でセテムブリーニに「兵士の存在は……純粹に形式的で、それ自体としては内容をもっていません。……要するに、スペインの反宗教改革の兵士、革命軍の兵士、ナポレオンの、ガリヴァルディの兵士があっただけ、プロイセンの兵士があるだけです。兵士

が何のために戦うかが明らかの場合にのみ問題になりうるのです⁽⁹⁾と語らせているが、それを承知のうえでマンは上述のような形でヨーアヒムの死を描いたのである。

ここで私たちは、カストルプの雪山体験とヨーアヒムの下山体験との同時性の問題——より正確に言うなら、マンが自分の政治的「転向」の文学的表現であるカストルプの雪山体験をヨーアヒム挿話の真中に配置したことのもつ意味について、あらためて考えてみなければならぬ。マンは、戦後体験をくぐりぬけたうえで自分の転身を小説のなかで形象化するためには、『魔の山』の小説空間をなんらかの形で戦後化する必要がある、その苦肉の策の一環としてヨーアヒム挿話を利用したと言えるが、もしマンがヨーアヒム挿話によって意図したものがそれだけであつたとしたら、私が指摘したさまざまな事柄にもかかわらず、マンの試みは成功しているとはいえない（その限りにおいて、私は、ヨーアヒム挿話から第一次大戦を読みとれというのは無茶な要求だという批判には謙虚に耳を傾ける用意がある）。しかし、マンがカストルプの雪山体験を包みこむ形でヨーアヒム挿話を描いたのには、マン自身の転身にかかわるもっと切実な理由があつたと考えられる。

すなわち、マンは自分の政治的「転向」を『魔の山』のなかに盛込むにあたって、同時に第一次大戦で死んでいった兵士たちへの鎮魂歌をなんらかの形で書かずにはおれなかつたのである。これは、マンの政治的「転向」の内実から言っても当然の要請であつた。なぜなら、彼の共和国支持への「転向」は、決して第一次大戦において勇敢に戦つたドイツの自己批判や自己否定のうえに成立しているのではなく、先述のように、むしろ「一九一四年の感激」の延長線上に成立しているものだからである。このことは『ドイツ共和国について』でも明言されていることだが、彼の政治的「転向」が一方では第一次大戦以来の一貫した保守主義的、愛国的姿勢にもとづくものであつただけに、マンが第一次大戦で戦死したドイツの若者たちによせる想いには熱いものがあつた。マンの「転向」問題をめぐる議論のかまびすしさに隠されて、この点がしばしば見落されがちであるが、たとえば「転向」から二年近くもたった一九二四年八月一八日にシュトラールズントでマンがおこ

なった戦没者追悼演説⁽⁹²⁾を読めば、彼の熱い想いに疑念を抱くことはできまい。それに、なによりもまず、『魔の山』の結末部そのものがマンのこのような「転向」の表現にほかならない。しかし、マンは、主人公カストルプに第六章以降ではナフタ体験そのほかを介してある種の戦後体験と、それにもとづく「転向」をもくぐりぬけさせることに決めた以上、たとえ最後でカストルプを第一次大戦の戦場に送りだすにしても、彼の「転向」そのものにとって不可欠な前提である戦没者への追悼の念は、それとは別になんらかの形で形象化しなければならなかった。

マンは、一九二五年一月九日付のアルトゥール・シュニツラー宛の手紙のなかで、こう書いている。『魔の山』についての御好意あるお言葉に感謝いたします。とりわけ、あなたが善良なヨーアヒムに深い関心をよせてくださったことを嬉しく思います。まちがいに、彼は、ならず者たちばかり登場するなかで、最良の人間なのです。私は、彼を永の眠りにつかせた日には、本当に悲しい思いにひたっていました⁽⁹³⁾」

また、一九二五年六月初旬のあるインタヴューのなかでは、「ハンス・カストルプが雪のなかで見る夢は、なにかある積極的なものを、私たちが築きあげねばならない未だ知られざる世界をかいま見させてくれます」と言ったあとで、ヨーアヒムについてこう語っている。「もうミリタリズムの役目は終わったのです。再登場する余地はありません。しかし、今なお好戦的で軍隊的な精神態度は存在していますし、その重大さを見誤ってはなりません。『魔の山』の私のヨーアヒムは、右翼の若者たちに媚を売るものではありません。軍人義務という観念に、いや義務そのものという観念にとりつかれてしまったこの華奢な人物は、たんに兵士の本能にのみ忠誠を誓っているわけではありません。この兵士の本能を転換し浄化することが大切なのです。たしかにこれは危険な本能ですが、しかし、理想的形態をとるときには、有用なものとなりうるのです。私たちは、英雄精神と陶醉状態とを取り違えてはなりません⁽⁹⁴⁾」(傍点筆者)。

シュニツラー宛の手紙のなかの言葉は、マンがヨーアヒム・ツィームセンという人物像に託した想いが、セテムブリー

ニやナフタといった「西」や「東」の、「ローマ」や「モスクワ」の政治的イデオログ的な人物像たちに対するものとは全く異質なものであったことを示唆しているのに対して、後のインタヴューのなかの言葉は、マンがそのヨーアヒム像を何から守らねばならなかったかを明確に教えてくれる。マンは、彼の哀惜してやまない若きドイツ兵士の像を、「匕首伝説」をまきちらして共和国転覆を企む右翼勢力の手にゆだねてはならなかったのである。そのためには、熱い想いで追悼し、鎮魂の祈念を捧げる英雄的兵士の像を、「転換し浄化し」うる形で、（先に引用した別のインタヴューでの言葉を借りるなら）「たんなる軍隊的なものを越えて、生への奉仕性にまで高められた勤務至上主義」の形象化として描かなければならなかったのである。

マンの「転向」が右翼の跳梁に対する警戒心を最大の現実的動因とするものであり、かつまた、本稿の前章末で述べたように、マンをついに「転向」宣言に踏み切らせる直接的契機となったラーテナウ暗殺事件の起きたのが、ちょうどヨーアヒムに下山を決意させる「激怒。そのうえなんともやりきれないこと」の節の執筆時期と重なっていたことを考えれば、マンがヨーアヒム挿話を書くにあたって、これを右翼的な「兵士」像から守ることにいかに気を配ったかは容易に推測できよう（逆に言えば、だからこそ、マンは自分の兵士像を造形せずにはいられなかったということになるのだが）。そして、その用心と配慮が、ヨーアヒム挿話に二重構造化を組込む作業をいちだんと困難なものにし、ひいては、それを曖昧なものに弱めてしまうことになったであろうことも⁹⁸。

だが、他方では、このような「転換し浄化し」うる可能性を内包した、たぶん抽象化され普遍化された兵士像として描かれることによって、ヨーアヒム・ツィームセン像は、第一次大戦後の「転向」の前提としての戦没兵士への追悼碑という役割をはたすと同時に、それを超えて、「革命の始まり」としての第一次大戦にあらためて参加するために下山するハンス・カストルプの先駆けとしての役割をも担うことができたのである。

さて、この章を終えるにあたって、カストルプの雪山体験の解釈問題について、本稿における私の視点からの意見を簡単に書いておこう。

カストルプが吹雪のなかで見る二つの夢とそれにつづく思索のなかで到達する結論とが、『魔の山』という小説の思想的な核心部分であることは否定できない。しかし、にもかかわらず、小説全体との関係で見たとき、そこになにか曖昧な両義性が認められることもまた否定できない。私は、この曖昧な両義性は、すくなくとも次の三つの理由から生じたものだと思う。一つは、先にT・J・リードの説に関連して紹介したように、「雪」の場面が本来は逆の志向を秘めた挿話として構想されていたのではないかという、『魔の山』の特異な成立史に由来するものである。もう一つは、後で若干言及するような、マンの「転向」そのものに内在し、保守主義的な民主主義者マンの後半生にも潜在しつつけることになる思想的な二面性に由来するものである。そして、三つ目は、私がこの章でヨーアヒム挿話を手がかりにして指摘したような、「時代の小説としての二重構造化」に由来するものである。なぜなら、戦後状況の層においては明確に反映されることを必要とした「転向」も、戦前の物語の層にあっては曖昧化されねばならなかったからである。

前にも述べたように、両義性をもつものは両義性をもつものとして読むのが正しい読み方であろう。そして、そのような読み方することによってのみ、私たちは『魔の山』を、一人の作家が激動する時代の嵐のなかで翻弄されながらも、辛うじてまとめあげた「時代の小説」として正当に遇することができるのではないだろうか。

V

前章で指摘したさまざまな戦後の徴候にもかかわらず、『魔の山』は、その第六章においても、あくまで第一次大戦前の

物語として語られる。これは否定することのできない事実であるばかりか、ここに『魔の山』という小説の面白さと、そして、問題性がある。

トーマス・マン自身が第六章以下を書くにあたって、このあたりの問題の厄介さを十二分に自覚していたことは、第六章第一節「変化」の冒頭で語られる時間論から読みとることができる。

第五章の冒頭で、ベッドでの安静を命じられたカストルプの枕もとに、毎日きまった時刻にきちんきちんと運ばれてくるスープになぞらえて「永遠のスープ」と題されて語られる時間論では、昨日と今日と明日の区別がぼやけてしまい、「静止する今」「拡がりをもたない現在」となってしまった時間の「永遠」の相が強調されていたが、第六章の冒頭では、「時間が生みだす変化」が問題にされる。時間は「静止する今」としてではなく、「変化を生みだす」ものとして捉えられる。このような時間論の捉え直しそのものがマンの第一次大戦体験と深く結びついていること自体は、すでに片山良展も指摘しているところである。⁹⁶ その意味では、第六章の最初におかれたこの時間論からしてすでに、第六章に内在する戦後性を示唆していると言うことができる。

しかし、第六章冒頭の時間論が一筋縄ではいかないのはここからである。というのは、マンは（正確には、語り手は）言うべきだろうが、「時間は変化を生みだす」と言い、「今は昔ではなく、ここはあそこではない、なぜなら両者の間には運動があるからだ」と言ったあとすぐに、「だが、時間を測る拠りどころとなるこの運動なるものは、循環的であり、自己完結的なものだから、運動や変化は、静止と呼んでもかまわないようなものである。なぜなら、昔は今のなかに、あそこはこのなかにたえず反復されるからである」と言い、さらには「永遠のなかにあっては前後というもの (Nacheinander) がありうるだろうか、無限のなかにあっては左右というもの (Nebeneinander) がありうるだろうか」と言って、「時間が生みだす変化」のもつ意味をほとんど「ゼロに還元」してしまいかねないふう議論を展開するからである。そして最後には、

「永遠と無限というやむをえぬ假定と、距離、運動、変化といった諸概念とは、いや宇宙のなかに局限された物体が存在するということすらも、どのように折合っていけるのだろうか。まあ、せいぜい問いつづけてみるがいいだろう！」と、突き放した形でしめくくっている。⁹⁷

この「変化」と「永遠の反復」との両面性をもった時間論のなかに、後の『ヨーゼフ物語』につながる神話的なものを指摘することは容易である。そして、そのような視点をも踏まえたうえで、『魔の山』後半部を、特に第七章のペーペルコルン挿話などを思い切り神話に関連づけた形で解釈することも、さして困難でもあるまい。

だが、この時間論が第六章の冒頭におかれ、かつまた、この時間論を枕にした「変化」の節が、まさに第六章における『魔の山』という小説そのものの変化の導入部の役割を果している以上、この時間論がこの小説においてもつ機能も、第一義的には『魔の山』第六章で語られる事柄との関連において考えられるべきであろう。

これまでに見てきたように、ナフタの登場、ヨーアヒムの下山と帰山と死、カストルプの雪山体験の三つを主たる要素として構成される『魔の山』第六章における変化とは、一言で言えば、第一次大戦前の物語のなかへの戦後状況の侵入によってもたらされたものにはかならない。そして、これまたすでに述べたように、マンの「転回」宣言とカストルプの雪山体験との照応関係からして、マン自身にも『魔の山』の読者に、この戦後状況の侵入を隠蔽する意志はなかったはずである。それどころか、ナフタ的なものへの批判は、この第六章を書いている一九二一年末から二三年にいたる時点でのマンの警世のメッセージですらあった。⁹⁸だが、にもかかわらず、他方で『魔の山』はあくまで第一次大戦前の物語として読んでもらう必要があったし、事実そのようなものとして物語られているのである。この矛盾を、「時代の小説としての二重構造化」を読者に受入れさせるための前口上の役割を担っているのが、あの「時間が生みだす変化」を強調しながら、その「変化」を「永遠の反復」のなかに吸収させてしまう第六章冒頭の時間論であると言えるのではなからうか。言うまでもないことだが、

『魔の山』で語られる時間論は、哲学的認識としての当否以前に、なによりもまず小説の語りの一部であり、小説の語りの一部としての機能をもっているのである。読んでいるうちに軽い眩暈をおぼえてくるような、堂々めぐりにも似た時間論につきあわされたあげくに、「まあ、せいぜい問いつづけてみるがいいだろう」と突き放され、そのうえさらに「変化」の節の後半でまたまた春夏秋冬の交替すら定かでない「四季の混淆」をたっぷりと聞かされ、サナトリウムの生活の「永遠に単調なリズム」、「どのようにして変化が生みだされるのか理解に苦しむような静止する永遠」を再確認させられ、そして、とどめに、第二節「もう一人」の始めの部分で、「三千年の昔でさえつい近年のように思えてくる」というカストルプのカルデア人への想いを聞かされたあとで、ようやくナフタが登場してきて、第六章の物語が本格的に始まるとなると、誰が第一次大戦前か第一次大戦後かなどといった、たかが数年間か、せいぜい十年間くらいの時間的ズレに目くじらたてる気になるだろうか。「時代の小説としての二重構造化」は、こうしてまんまと「二重の意味での時の小説 (Zeitroman)」のなかに吸収されてしまうのである。

むろん、私がここで言おうとしていることを、語りのテクニクとか、小説作法の巧みさとかいった問題としてのみ受取ってもらっては困る（もっとも、とかく難解で非文学的な思想的議論をふりまわすことにのみ走りがちなマン研究者たちに対しては、あれは全てマンの老獪な語り口ですよ、と言い放ってしまった方がすっきりとするのかもしれないが）。マンにこのような形で「時代の小説としての二重構造化」を止揚することを可能ならしめたのは、当然、彼の歴史認識がそれに見合う形のものであったからにはかならない。

政治的「転向」を表明し、民主主義の擁護者となって以後、死にいたるまで、マンの思想と行動に、そしてその表現としての彼の文筆活動全体にたえずつきまとっていたある種の曖昧さ、敢えていうならある種のいかがわしさは、従来からさまざまな形で指摘され、批判されてきたが、ヴィスキルヒェンは「トーマス・マンは長年月にわたって、いわば二重生活を

送ったのだ」とまで言い切っている。⁽¹⁰⁾ 内部にいかに深刻な亀裂が認められるにしても、それが一つの人格によってその人なりに見事に統括された形で営まれつづけた場合、これを「二重生活」と呼んでいいかどうかは問題の残るところだが、「転向」後のマンが、一方では、時とともにますます敏感に政治的問題に反応し、人間性と民主主義の擁護を主張する姿勢を強めていきながら、他方では、むしろ状況にに応じての一定限度の修正を加えながらも、一貫してショーペンハウアーの哲学を最大の支柱とする保守主義的・ロマン主義的世界観を保持しつづけたことは否定できないところであろう。とりわけ一九二二年の「転向」自体が、ドイツの真正の文化的伝統を右翼ナショナリズムによる狭隘化と野蛮化から守るための一種の緊急避難的性格をたぶんにもった、きわめて保守主義的志向の強いものであったことからしても、そのような「転向」を色濃く反映した『魔の山』の第六章が、その根底に保守主義的世界観をもつことになったのは、きわめて当然の成行きであった。

保守主義の立場を堅持しながら、しかもなお現実の推移に合わせて一度程度の「転向」をおこなおうとするとき、その「転向」者が最も腐心するのは、「転向」前と「転向」後とをつなぐ自己の同一性、連続性の証明である。マンもまたこの問題にいかに関心したかは、『ドイツ共和国について』においてドイツ・ロマン主義とヴァイマル共和国とを結びつけるために彼が用いている、時には曲芸的とさえ思える論法からも見てとることができよう。そして、ヴィスキルヒエンがマックス・シェーラーやエルンスト・トレルチなどを例証として引きながら確認しているように、⁽¹¹⁾ 世界を二層性において捉え、表層をなす政治的・社会的行為の層は時代によって変化するが、存在の核心をなす基層は歴史的变化などに煩わされることのない超時代的なものであるとする二重構造的な現実認識法は、ドイツのリベラルな保守主義者たちが第一次大戦後の激動する現実に対応していくために採用した一つの有力な思考法であった。むしろ、『魔の山』における独特の時間論をただちにこれと重ね合わせることはできないが、一方で「変化」を強調しながら、他方でその「変化」を「ゼロに還元」してしまおうとする時間論の背後に、基本的に同種のヴェクトルをもつ保守的心性がはたらいっていることは否定できないだろう。

だが、マンが「転回」にもかかわらず、自己の同一性と連続性に固執し、ロマン主義的伝統への忠誠を内心に保持しつつ（雪山体験におけるカストルプの言葉を借りるなら「僕は心のなかで死への忠誠を守ろう」ということになる）、加えて、「転回」の目標をすら伝統的なゲーテ的・人文主義的な教養理念を手がかりにして設定しようとするとき、本来は現実への適応策として踏みだされたはずの「転回」は、逆に現実からの乖離を自己増殖していくことになる。ヴィスキルヒェンの言葉を借りるなら、マンの「転回」は、「保守的なドイツのユートピアを、したがって超時代的な理想像を、ヴァイマル共和国という歴史的現在と調和させる」という、現実には不可能な試みへと傾斜していくことになる。マンが自分の「転回」を小説のなかで表現する場を求めて、もともと現実社会から隔離された特殊な「密閉された」空間であるサナトリウム「ベルクホーフ」からさらにカストルプを引離して、雪山という無時間的・神話的な空間へと誘いこまねばならなかったのも、マンの「転回」そのものが内包するこのような非現実的、超歴史的な性格と深くかかわっていたはずである。

すなわち、マンは、自分の第一次大戦後における「転回」を『魔の山』のなかに持込むにあたっては、一面では『魔の山』のなかに戦後の状況をなんらかの方法で織込まねばならなかったと同時に、他面では、そのことによって小説のなかに生じる時間的かつ時代的混乱を逆手にとって、時間の流れを止揚し、時代を超えた小説空間を創出する必要があったのである。それが、『魔の山』を「時代の小説」として捉える視点から見たときの第八章冒頭の時間論のもつ意味であり、そして、ナフタの登場とヨーアヒムの下山とカストルプの雪山体験とを巧みに組合せた第六章の構造の妙である。

いや、問題は逆に捉えられるべきなのかもしれない。すなわち、マンが自分の「転回」を小説のなかでは、このように時代を曖昧化し、時代を超越した小説空間を創出することによってしか表現しえなかったことこそが、マンの「転回」がいかなるものであったかを示しているというべきなのかもしれない。

いずれにせよ、政治的「転回」という、最も時代の変化と密接に結びついた問題が、『魔の山』に大きな影を投げかけ始

めた時から、なんとも逆説的なことに、この小説は、「時代の小説」としての一義的明確性を加速度的に急速に失なっていくのである。先にふれたカストルプの雪山体験後に描かれるヨーアヒムの死における兵士像の普遍化と抽象化にもそれは如実に認められるが、第七章に入って、ペーペルコロン挿話が語られる段になると、それがいつの時代の物語であるのか、もはや語り手も意に介していないのではないかと思われるほどである。

すくなくとも、語り手が第七章の冒頭の節で、カストルプの時間感覚の完全な麻痺を伝えるに先立って、「恍惚状態の短時間のうちに、十年間、三十年間、いや六十年間にもおよぶ、それどころか人間に経験可能な時間範囲の限界を超えることさえある長期間にわたる夢を生きる阿片吸飲者」の例まで引合いに出して、「物語の用いる錬金術的魔法と時間に関する超越的遠近法」⁽¹⁸⁾ について語るとき、それが、読者をもそのような「物語の用いる錬金術的魔法と時間に関する超越的遠近法」の世界に誘いこむ招待状の役割を担っていることは明らかである。そのような招待状を出しておいてから、語り手は、いかにも聞こえよがしに、ヨーアヒムの下山と帰山と死は「暦の上ではいつのことだったのか」、あるいは、ショーシャが「何年に」戻ってきたのか（つまり、これから物語るペーペルコロン挿話がいつの話なのか）カストルプには全くわからなくなっていたし、「一人としてそんなことを質問する者はいなかった」と書くのである。⁽¹⁹⁾

むろん、この語り手からの招待状を額面通りに受取ってはならない。なにしろ、語り手自身が、すぐこの後で「曖昧で、わけのわからぬものは自分の健全な感覚に合わないという読者は、ちょっと苦労しさえすればすぐに計算できるはずだ」と言い、さらには、カストルプの時間感覚の完全な喪失を「最も質の悪い良心喪失」であるとして倫理的批判を加えてさえるのである。⁽²⁰⁾ だが、だからといって、いわば招待を取消し、阿片吸飲者に覚醒を呼びかけるようなこれらの言葉を真に受けて、律儀に時間の経過を計算し始めようものなら、これまた、「一人としてそんなことを質問する者はいなかった」のに、無作法にも詮索を始める「健全な感覚」の野暮さかげんを笑われかねない。それに、「ちょっと苦労しさえすればすぐに計

算できるはずだ」という言葉さえ、「時代の小説としての二重構造的性」の問題を考慮にいれると、そう素直に受取るわけにはいかないのである。

第七章の冒頭におかれた時間論は、第六章の冒頭におかれた時間論よりもいちだんと手のこんだ、老獪きわまる語りになっているとも言えるが、反面で、それだけに作者の意図が、というより苦心の細工が見えやすくなっていると言えなくもない。というのは、「海辺の散歩」と題されたこの第七章第一節は、何気なく読むと、時間感覚の喪失状態を読者に受入れさせるための一貫した巧妙な語り口で語られているように見えるが、注意深く読むと、語り手の姿勢がたえず揺らいでいるのに気づかざるをえないからである。すなわち、一方の極には、物語は時間を自由自在に扱うことができるのだと「物語の錬金術的魔法と時間に関する超越的遠近法」を説く語り手の視座があり、他方の極には、時間感覚を喪失したのは作中の主人公カストルプであることを確認し、これに倫理的批判をさえ加える語り手のもう一つの視座があって、全体としての語りは、この両極の間を巧みに揺れ動くのである。しかも語り手は、というよりも作者マンはこの揺れをいちだんと効果的にするために、学問的議論に似せた文章や、全く抒情的な文章や、イロニーとフモールに満ちた文章やらを入れ代り立ち代りくりだしてきて、それこそ「目まい (Täumel) といかさま (Betrug) のどちらの意味にもとれるような幻暈 (Schwindel)」⁽⁸⁾を読者にも味わわせようと努めるのである（もっとも、この Schwindel という語のもつ両義性をカストルプへの距離を置いた描写のなかで説明することによって、間接的に読者に手のうちを明かしながら、しかも、そうすることによってますます幻惑的な語り口のなかに読者をひきこんでいこうとするところに、作家マンの煮ても焼いても食えないしたたかさがあるのだが）。

この二つの視座の間の揺れは、それ自体としては、いろいろな角度からの解釈が可能であろう。だが、この時間論もしくは物語論も、それがあくまで一編の小説『魔の山』のなかの、一つの限定された場所に置かれたものである以上、なにより

もまず、その置かれた状況に即した解釈を試みるべきであろう。

それが置かれているのは、『魔の山』が新たな展開をみせた第六章の後を受けて、いよいよ最後の章が始まる場所である。『魔の山』を「時代の小説」として考察する本稿の視点から見れば、それは、第一次大戦前の物語のなかに戦後的状況や問題がさまざまな形をとって侵入することによって、本来明確であるべき時代性が混乱し、曖昧化され、時代性そのものが止揚される気配をすらみせるにいたった第六章の後を受けて、最後の章、第七章が始まる場所である。ということは、第七章は二つの互いに矛盾する役割を担わされていたことになる。すなわち、一方では、第六章でおこなってしまった戦後化（それどころか「転回」表明まで）とそれに伴う時代性の止揚傾向をなんらかの形で継続し発展させねばならないと同時に、他方では、最終章である以上、第一次大戦の勃発による幕切れにそれなりの説得力をもたせ、この物語をあくまでも大戦前の物語として自己完結させるためには、しだいに時代性を一義的に明確化させていかねばならなかった。この相反する二つの課題を同時に達成することは至難の業であった。マンが、カストルプが吹雪のなかの夢を忘れたのか忘れなかったのか判定のしにくい書き方をせざるをえなかったのも、「雪」の節が最後に置いてないのは私の本の構成上の欠陥です」とつい口走ることがあったのも、そして、発表当初から特に第七章の構成のルーズさについては厳しい批判が絶えなかったのも、さらには、『魔の山』研究者の多くが、個別的な問題の指摘はともかくとしても、全体としての第七章の問題を論じるのをとかく敬遠しがちなのも、全てなんらかの形で、第七章が内包していたこのディレンマと関係しているのではないだろうか。

この解決不可能とも思えるディレンマをなんとか解決可能にしたものが、一方における「物語の錬金術的魔法と時間に関する超越的遠近法」と、他方における主人公カストルプの時間感覚の喪失現象との出会いであった。つまり、小説自体が明確で一義的な時代性を放棄して、今やなんらかの形で時代性を止揚した物語世界を創出するほかには自己を維持できなくなったときに、そのような無時間的・超時代的な物語世界の出現に見合うものとして、主人公の時間感覚の喪失が考えられ、

しかも、その主人公の時間感覚の喪失が物語の本来的展開からしても最も自然であるばかりでなく、これを一つの時代の特
性によって深く規定された病的現象として描くことで、物語本来の時代性も辛うじて維持できるというのが、第七章第一節
「海辺の散歩」に仕掛けられた小説装置である。しかし、この装置がいかに巧妙かつ精巧につくられても、それが二つの相
反する要請にもとづくものである以上、そこにある程度の揺れが生ずるのは不可避免的であった。

ここで忘れてならないのは、すでに本稿第三章で検証したように、『魔の山』の第六章以降は、決して当初の構想にもと
づいて書かれたものではないということである。早い話が、これまでに私が指摘してきたような第六章の問題の多くは、明
らかにマンの「転向」によって生じてきたものである。これが第七章になると、当初の構想からの逸脱、と言って悪ければ
当初の構想への追加は、いちだんと大幅になり、かつ露骨になるのである。

それというのも、第七章は全部で十の節によって構成されているが、そのうち少なくとも五つの節（分量にして六割強）
は、明らかに一九二二年末以降のマンの体験を直接的契機として書かれたものだからである。その五つの節とは、ペーペル
コロン挿話を物語る第二節から第五節までと、「ひどくいかがわしいこと」と題して心霊術実験を描いた第八節である。前
者が一九二三年十月にマンがボルツァーノでたまたまゲールハルト・ハウプトマンと二週間にわたって同じホテルに滞在し
て親しく交際したときに受けた強烈な印象を直接的契機にしていることも、また、後者が一九二二年末から二三年初頭にか
けてマンが三度にわたって参加したフォン・シュレンク・ノッツィング男爵邸での心霊術実験会での見聞を下敷にして書か
れたことも、周知の事実である。

むろん、直接的契機となった体験や恰好のモデルとの遭遇が一九二二年末あるいは二三年に起きたからといって、ただち
に、だからこの部分は一九二二年以降に構想されたものであると主張するのは、乱暴であり、あまりに外在的で非芸術的発
想であるという批判がなされることは十分に予測できる。早い話が、ペーペルコロンのモデルはハウプトマンであるという

噂がしだいに広まって、スキャンダルに発展しそうになったとき、マンがハウプトマンに送った弁明の手紙のなかで「私はあなたに対してたいへんな罪を犯してしまいました。私は切羽つまった状態におちいついたために、誘惑にかられ、誘惑に負けてしまったのでした。芸術上の問題で切羽つまっていたのです。と言いますのは、私はある人物像を求めていたのですが、その人物像はどうしても必要であり、構成上はずっと以前から予定されていたにもかかわらず、目に見え、耳に聞こえるような形姿としては捉えることができずにいたのです」と書いているのを楯にとって、ペーペルコルン挿話は基本的には「ずっと以前から」構想されていたのだと主張することは、きわめて容易である。だが、私たちは、先輩であり文壇の大御所であるハウプトマンへの丁重な詫び状に認められたこの言葉を、それほど愚直に信じていいものだろうか。それに、「目に見え、耳に聞こえるような形姿としては捉えることはできずにいた」ようなものが小説の構想として具体的にどれだけの意味をもちうるかという問題はさておくとしても、「ずっと以前から」というのは、はたしてどれくらいの期間を指しているのかも曖昧である。すくなくとも、ナフタ像（ブンゲ像）の場合と違って、ペーペルコルン像を具体的に示唆するような記述は、これまでに公表された資料に関する限り、一九二三年九月以前の『魔の山』成立史のなかに見出すことはできない。それに、ペーペルコルン挿話がショーシャ夫人の帰山というモチーフと密接に結びついていることを考えれば、先述のように、どちらかといえばショーシャ夫人を二度と小説中に登場させない方向で構想を立てていた一九二一年の第五章脱稿時には、ペーペルコルン挿話は全く構想の中にはなかったと考える方が自然だろう。

いや、なにもこのような廻りくどい考証をしなくても、実はマン自身が、ペーペルコルン挿話は第七章を書くにあたって全く新しく考え出したものであることを白状しているのである。すなわち、一九二三年末あるいは二四年始めに第七章の執筆にとりかかったマンは、一九二四年二月一九日付のエルンスト・ベルトラム宛の手紙の中で、『魔の山』の運命は、最後に近くなってもう一度、なんとも意外な（私にとって意外な）転回をみせることになりました」（傍点筆者）と書いている

のである。¹⁰⁰ 先のハウプトマン宛の手紙とは違って、これは、長年月にわたる『魔の山』の執筆期間を通じて最も親密な相談相手だったベルトラムに対する執筆状況の報告であるだけに、文面通りに受取るべきだろう。要するに、純粹に理念的な腹案はどうであつたにせよ、具体的な形をとつた小説構想としてのペーペルコルン挿話は、あくまで一九二三年十月にマンがハウプトマンを親しく観察する機会に恵まれたことが決定的な契機となつて生まれてきたことだけは否定できない事実である。

きわめて多面的な問題をはらんでいるペーペルコルン挿話全体のもつ意味については、本稿とは異なつた視点からの分析をも加えて、いずれ別の機会にあらためて論じてみたいと思つていたので、ここでは、本稿の主題にとって必要なかぎりの言及にとどめることにするが、「時代の小説」としての『魔の山』を考えるさいには、ペーペルコルンの容貌や言動がどの程度にハウプトマンをモデルにして描かれているかということよりも、ペーペルコルン挿話そのものが一九二三年秋の時点におけるマンのハウプトマン体験を直接の契機として生まれたという事自体が、すくなくとも意味をもつていと言わねばなるまい。それというのも、ハウプトマンは、マンの「転回」と切り離すことのできない深い関係にあつた人物だからである。¹⁰¹ 先に引用したハウプトマンへの詫び状のなかですら、マン自身、自分の「転回」宣言文である『ドイツ共和国について』を引合いに出して、自分があそこであなただを「国民の王」と称えたことを思い出してください、と書いているほどである。だから自分が悪意をもってあなたをモデルに使うはずはないというのが、マンの釈明のレトリックであるが、このレトリックは、裏を返せば、マンがハウプトマン体験に靈感を得てペーペルコルン挿話を着想したときにも、それが自分が「国民の王」「共和国の王」と呼んで、自分の「転回」表明にさいして支柱の一つとして利用した人物であることを十二分に意識していたことを、なによりも雄弁に語っている。

『魔の山』のなかでペーペルコルンのはたす最大の役割が、西欧ブルジョワ民主主義の代弁者セテムブリーニと左右両翼

のラディカリズムの混淆を体现するナフタという二人の能弁な知識人を、理屈ではなく存在によって、「人格(Personlich-keit)」によって圧倒し、彼ら二人をたんなる「おしゃべり屋」に「矮小化」してしまうことにあることを考えれば、マンがそのペーペルコルンのモデルに自分が「転向」宣言文のなかで「ドイツ共和国の王」と呼んだ人物を利用したというのは、きわめて意味深長であると言うほかない。むろん、たとえばハンス・マイアーなども言っているように、ペーペルコルンはあくまで作中人物として自立した十全な存在感をそなえた形姿として見事に造形されているのであって、ペーペルコルンをハウプトマンと同一視するのは馬鹿げているにちがいない。だが、メンデルスゾーンやリードが指摘しているように、問題を個人的次元のモデル問題としてではなく、ドイツ性の代表者、ヴァイマル共和国の代表者、つまり「ドイツ共和国の王」という存在形式のもつ問題性という次元で捉えるなら、ペーペルコルン/ハウプトマン問題は、『魔の山』を「時代の小説」として読むうえで、やはり無視できない大きな意味をもつであろう。というのも、マンは、ペーペルコルンによってセテムブリーニとナフタを「矮小化」すると同時に、そのペーペルコルン自身の現代における不可能性をも描いているからである。メンデルスゾーンは、マンはハウプトマンという伝統的な意味でのドイツ的「詩人(Dichter)」における明晰な理性的批判精神の欠如を戯画化して批判的に描くことによって、『非政治的人間の考察』で自からが擁護した伝統的なドイツ的芸術家のもつ「代表性」から脱却する決定的な一步を踏みだしたのだと主張しているが、これは、ペーペルコルン/ハウプトマン問題についての最も正鵠を射た指摘と言えよう。もっとも、メンデルスゾーンは、マン自身がこのことを『魔の山』執筆時にどこまで自覚していたかは疑問であるとし、この問題を小説『魔の山』のなかの問題としてよりも、むしろその後には、ペーペルコルン/ハウプトマンの二人がドイツの「代表者」として描いた軌跡の相違の方にひきつけて論じている。これに対してリードは、ペーペルコルンがニーチェに代表される「生の哲学」——「いわゆるデカダンスに対する反発と称しながら、基本的にはこのデカダンスの一部であった生の主張」——を踏まえて造形された「苦悩するディオニュソス」的人物像であることを

確認したうえで、そのモデルがハウプトマンであったことの意味を重視し、さらにはメンデルスゾーンの見解に同意している。

これ以上ペーペルコロン問題に立入るのは別の機会にゆずることにして、いま私が言っておきたいことは、要するに、ペーペルコロン挿話は、すくなくともその重要な一面において、ナフタ像の形成や吹雪の場面における「転向」表明、さらにはこれらを包みこむ形で兵士ヨーアヒムの挿話などによって第六章で推進された『魔の山』のなかへの第一次大戦後の状況と問題との侵入現象を、つまり「時代の小説」としての二重構造化を継承し、いちだんと発展させるものを含んでいたということである。考えてみれば、ナフタが戦後状況にたつぷりと浸された形で登場し、カストルプが作者の「転向」をあら程度まで反映する役割を担わされ、セテムブリーニの描かれ方まで「転向」後の作者の立場に影響されて、より好意的なものへと微妙に変化していった以上、その後で彼らに対抗する役割を担って登場するペーペルコロンがなんらかの形で戦後性を内包せざるをえないのは、当然の要請であったはずである。言うなれば、ナフタが大戦前の反近代的思潮から大戦後の左翼ラディカリズム、さらには二〇年代のファシズムまで多層的に取込んだ人物像であるのと見合う形で、ペーペルコロンは、ニーチェ的「生の哲学」とそのデカダンス化から「ドイツ共和国の王」ハウプトマンにいたるまで、そして、さらにその「王者」の限界の指摘をさえも多層的に包含しているのである。⁴⁴

だが、くり返し述べてきたように、あくまで第一次大戦前の物語である『魔の山』のなかで戦後の状況と問題を生のまま描くことは許されない。「時代の小説」としての二重構造化が深まれば深まるほど、そこから生ずる矛盾を止揚し、亀裂を隠蔽するためには、超時代的な形象化が必要となった。好都合なことに——というよりも、ここでそのような人物を着想し創造したところにマンの卓抜さがあるのは言うまでもないが——ニーチェ的「生の哲学」を土台にし、ナフタやセテムブリーニとは違って、理論や意見によってではなく、存在そのものによって意味をもつ、理性では捉えようのないペーペルコ

ルンという人物くらい、神秘的・神話的な扮飾をほどこすのに適した人物はいなかった。こうして創造されたのが、現代のディオニュソスでありキリストであるペーペルコロンだった。しかし、ペーペルコロンが実に見事に造形された魅力あふれる人物であることは多くの人が認めながらも、ペーペルコロン挿話が本当に無理なく、必然的な形で『魔の山』という小説のなかに填めこまれているかという点になると、研究者たちの間にも疑問と戸惑いがしばしば見られるのは、やはり「時代の小説」としての二重構造化に起因するある種の無理が根底にあるからではないだろうか。⁽¹⁵⁾

それでも、ペーペルコロン挿話においては、ハウプトマンのモデル問題に象徴されるような戦後性は、ペーペルコロンという半ば超時代的もしくは無時代的特性を付与された人物像のなかにともかくも吸収されているし、またモデル問題自体も、すくなくとも『魔の山』の発表当初には、一般読者のまえに公然と提示されたわけではなかったのに対して、第七章第八節「ひどくいかがわしいこと」になると、読者は、そこに描かれているのが第一次大戦後の社会現象を下敷にしたものであることを、あらかじめ知らされていた。

というのは、先述のように、ここで描かれる心霊術実験はマン自身が一九二二年末から二三年初頭にかけて実際に見聞したことを下敷にしているのだが、マンは、その体験記を『オカルト体験』と題する文章にまとめて、『魔の山』刊行以前に発表しているからである。むろん、作家が現在の時点での体験を過去の時代を扱う物語のなかで利用すること自体は、いくらでも例のあることであり、とりたてて問題にするほどのことではないだろう。しかし、ザウアーエーシヒが指摘しているように、この種の心霊術実験は「第一次大戦直後期の苦しい状況のなかで大流行した」⁽¹⁶⁾ものであり、だからこそマンが『オカルト体験』の朗読会をおこなったときには「演壇にまで聴衆が坐りこむ」⁽¹⁷⁾ほどの盛況を呈したのである。つまり、「ひどくいかがわしいこと」でマンがあからさまに下敷として利用したものは、決してたんなる私的体験ではなく、明確に戦後状況の、二〇年代初頭の状況の刻印をおびた社会現象だったのである。しかも彼はそれを、物語がいよいよ終幕に近づき、

第一次大戦勃発が間近いことを予感させる黒雲が「巨大な鈍感」(第七章第六節)や「巨大な焦立ち」(第七章第九節)として『魔の山』をすっぱりと覆い始めたところで挿入しているのである。

むろん、心霊現象への関心はなにも第一次大戦後にはじめて生じてきたものではない。古来からさまざまな形をとって伝えられてきたものであるし、一八八二年には、心霊現象の科学的研究をめざして「心霊現象研究会」という組織がロンドンに創設されたこともよく知られている。したがって、マンが心霊現象の実験場面を第一次大戦直前期の物語のなかに持込んでも、べつに時代錯誤を犯したことはない。

それに、マンが一九二二年末に(したがってまだ『魔の山』第六章の前半部を書いている時期に)はじめて心霊術実験に立会った直後に早くも、これは『魔の山』に使える恰好な材料だと判断したのは、⁽¹⁸⁾基本的には、後に彼が言っている言葉⁽¹⁹⁾を借りるなら、これは「肉体の神秘主義と有機体の秘密とにつねに注目しているこの小説の理念的構成にぴったりはまる」ものであると考えたからであろう。また、『魔の山』に描かれた心霊術実験の場面がマンのショーペンハウアー受容と深く関わっていることも、すでにM・ディールクスやW・フリーツェンが指摘しているところである。⁽²⁰⁾あるいはまたE・ヘフトリヒは、ゲーテの『ファウスト』を引合いに出すことによって、『魔の山』のこの第七章第八節「ひどくいかかわしいこと」が第五章第九節「ヴァルプルギスの夜」といかに密接な関係にあるかを論証している。⁽²¹⁾こういった純粹に理念的あるいは思想的観点から見ると、マンが第一次大戦後の体験を『魔の山』の終り近くに取り込んだことも別に問題とするに値しないだろう。

本稿の冒頭で断っておいたように、『魔の山』を本質的に多面的かつ多層的な構造をもつ小説とみなす私は、心霊術実験についての上記のような諸解釈の妥当性自体を否定するつもりはない。だが、この種の解釈だけでは、マンがカストルプに心霊術実験を体験させたことの意味までは説明できても、なぜそれが小説のこの場所においてでなければならないのか、な

ぜここで呼出される霊がヨーアヒムでなければならないのか、なぜヨーアヒムの霊は第一次大戦の兵士を連想させる姿で現われねばならないのかといったことまでは説明できないのではないだろうか。

たしかに、カストルプがだれかの霊を呼び出すとすれば、それはヨーアヒムの霊であるのがいちばん自然だとは言えるだろう。しかし、それだけの理由であれば、カストルプが出現したヨーアヒムの霊に対して「すまない！」と謝って、急いで実験を中断することの解釈も、たとえばH・クルツケのように、『非政治的人間の考察』まで引合いに出して、死とか誕生とか宗教とかいった事柄は「生の根源的な力」にぞくするものであり、「好奇心にかられてこれらに手をふれようとするのは、古来の神話論理にしたがえば冒瀆であり」、したがってカストルプがヨーアヒムの霊に謝って、実験を急ぎ中止するのは、「触れてはならないものに対する保守主義的な畏敬」によるものである、といった陳腐な解釈に終らざるをえないであろう。⁽¹²⁾ この種の解釈も必ずしも全面的に間違っているというわけではないが、これでは、「ひどくいかがわしいこと」と題されたこの第七章第八節がほかならぬこの場所に置かれている必然性も説明されないことになり、第七章は、特にその後半は、たんに時間の経過を読者に納得させるための苦しまぎれの埋め草にすぎないのではないかという批判にも有効に答えることはできないであろう。その意味では、この種の解釈で満足するくらいなら、むしろT・J・リードのように、「ひどくいかがわしいこと」の最後でヨーアヒムの霊が第一次大戦を思わせる兵隊姿で呼び出されるのは、「節の表題が意図しているような倫理的な意味でいかがわしいだけでなく、芸術的にもいかがわしい。この挿話の正当性はどこに求められるのか」と苛立つ方がまっとうであろう。⁽¹³⁾

私見によれば、この挿話の正当性は、諸研究者たちの説く理念的、思想的解釈をも踏まえたうえで、『魔の山』が第六章以後もつにいたった「時代の小説としての二重構造化」と、そこから生じるディレンマ、そして、にもかかわらず今やもう第一次大戦勃発という大詰に向かって物語を収斂させなければならないという要請などが複雑に絡みあった結集点としてこ

の挿話を読むときに、はじめて見出せるのではないだろうか。

マンがこの挿話を意識的にこの場所に挿入していることは、彼がこの挿話を入れた理由を説明した一九二五年二月二三日付のユーリウス・バープ宛の手紙^(註)のなかで、「徐々に戦争が近づいてきますが、その戦争は不潔なものとなるでしょうから、不潔な仕方ですと予告されて当然なのです」と言っていることから十分に推察できる。リードはこの言葉を、説得力のない逃げ口上にすぎないとして一蹴しているが、はたしてそうだろうか。すくなくとも、この言葉は、ヨーアヒムの霊の出現というこの挿話は死一般や心霊術一般の問題としてのみ考察されてはならず、第一次大戦という一つの具体的な戦争と密接に関わるものとして読まれなければならないことを、そして、だからこそ大詰近くのこの場所におかれていたのだということを示唆している。マンは、同じ手紙のなかで、ヨーアヒムの霊がまよっている「未来の軍服」にも言及し、自分はこれによって「時間的テレパシー」という要因をも取込んだのであるが、これは、時間の思想が大きな役割をはたしているこの小説の構成によく適合しているはずだ、とも言っている。この言葉は、この挿話のもつ意味を考えるさいには、『魔の山』全体のもっている時間的な構造をも、したがって時代性の問題をも考慮に入れなければならないことを教えてくれる。リードは、このマンの言葉をも、マンはそのようなオカルト的現象を信じていたのかどうかという問題にすりかえて無視してしまっているし、マン自身も、これは「形而上的」な問題だとしてはぐらかしているが、上に指摘した二つの視点——第一次大戦との密接な関連という視点と、時間構造の多層性という視点をもって、この挿話を本稿の主題に即して解釈すればどういうことになるだろうか。

問題の鍵となるのは、やはり、ヨーアヒムの霊の姿である。読者にまず伝えられるのは、「それは、彼の最後の日々に見られたように、頬は暗く落ちくぼみ、兵隊ひげを生やし、そのひげの間から唇をふっくらと誇らしげに反りかえらせているヨーアヒムであった」^(註)ことである。これを、呼びだされた死者の霊が死んだ時と同じ顔つきで現われるのは当然だ、などと

言って片づけてしまつてはなるまい。現にこのあとすぐに、ヨアヒムの霊は彼が死んでいった時とは全く違った身なりをしていることが語られるのである。心霊術の論理はともかくとして、小説の作者がヨアヒムの霊をまず最初に「彼の最後の日々に見られたのと同じ」顔つきをしていたという言葉で描き始める狙いは、読者に第六章の最後で語られたヨアヒムの死の場面を想起させること以外にありえない。そして、そのうえでおもむろに——しかも、これまたヨアヒムがあの「兵士として立派に」の節で志破れて帰山してきた時の場面^(註)を読者に想起させるように——ヨアヒムの霊が生前のヨアヒムとは違って、「普通の背広姿ではなく」と言つて「正式の軍服姿でもない」身なりをしていることが語られるということは、この場面が、すでに第六章で語られたヨアヒムの死の隠されていた意味の開示という機能をもっていることを示してはいないだろうか。そして、いま描かれるヨアヒムの霊がまっている身なりとは、E・ヘフトリヒの言葉を借りるなら、それが時間的に「未来の軍服」であるために、「ハンス・カストルプにはわからないが、読者にはまちがいなく第一次大戦におけるドイツ軍兵士の軍服であることがわかる」^(註)身なりなのである。本稿の前章で指摘したことをくりかえしておくなら、作者の望みどおりにこの小説を二度読み返す読者は、第六章の最後でヨアヒムの死出の旅を見送るとき、ヨアヒムが以後は「第一次大戦におけるドイツ軍兵士の軍服」を着て冥界をさまよう姿を連想せざるをえないであろう。

E・ヘフトリヒは、ヨアヒムの霊が着ているのは「第一次大戦におけるドイツ軍兵士の軍服」であることを確認したうえで、だが「これは、ヨアヒムの死装束ではなく、ハンス・カストルプの死装束である」と言っている。むろん、私も、これがカストルプの死装束でもあることを否定するつもりは毛頭ない。マンが「時間的テレパシー」なるものを利用して「未来の軍服」を紹介するのも、いや、そもそもこの挿話をわざわざ大詰近くにもつてきたのも、第一次大戦の勃発が近いことや、カストルプが第一次大戦に出征していくことを示唆し、それによって、第一次大戦前の物語としての明確な時代性を回復することをも、意図してのことである以上、これがカストルプの死装束でもあるのは自明のことである。だが、これ

がカストルプだけの死装束であって、ヨーアヒムの死装束ではないとすれば、カストルプがヨーアヒムの霊に向かって「すまない！」と赦しをこうのは、やはり死者への冒瀆の反省という一般論でしか解釈できなくなってしまうのではないだろうか。（あるいは、いつまでも「魔の山」にとどまりつづけているカストルプの良心の呵責の表明という解釈が関の山であるうが、それならヨーアヒムの霊は大戦前の平時の「正式の軍服姿」で現われる方が自然であろう。）だが、第七章後半の数節は作者がこの小説の時代性の問題にあらためて細心の心配りと工夫をこらしているところであるだけに、時代性の問題を無視した解釈は許されないはずである。

第七章第八節「ひどくいかがわしいこと」が、ヨーアヒムの霊の出現に一役買うグノーのオペラ『ファウスト』のレコードを介して、前節「妙音の饗宴」と緊密に結びつけられていることは説明するまでもない。そして、この第七節「妙音の饗宴」が、シューベルトの歌曲「菩提樹」を介して、小説『魔の山』の最後でカストルプが第一次大戦の戦火のなかに消えていく場面と緊密に結びついていることも周知の事柄である。つまり最後の数節にいたって、音楽と第一次大戦の兵士像という二つのものを介して、ハンス・カストルプとヨーアヒム・ツィームセンという二人の従兄弟の関係は、『魔の山』を読み始めた当初には読者が予想もしなかったような（おそらく『魔の山』を書き始めた当初には作者自身も予想しなかったような）緊密なものに、それこそ「カストルとポルクス」的双生児性に、ほとんど一心同体的な関係にまで近づけられていくのである。二人の関係をそのようなものとして捉えてはじめて、ヨーアヒムの霊がまもっている服装がカストルプの死装束であるという解釈は成立つはずである。だとすれば、それはまたヨーアヒムの死装束でもあったのだと解釈する方が自然なのではないだろうか。いや、結論を急ぐのは慎しまねばなるまい。

第七章第七節「妙音の饗宴」は、カストルプのレコード鑑賞という形で『魔の山』全体をあらためて総括する役目をはたしている。これまた、あらゆる意味でもあまりにも膨張しすぎて、あまりにも茫漠とした時空に拡散してしまいかねなくなっ

た小説に、あらためて一つの見取図を与えることで一つの筋道をつけ、そのあと一気に大詰にもっていきこうという——しかも、それを時間をもて余して浮世離れた酔生夢死の生活を送っている主人公の、それでいて時代の動きを鋭敏に反映して技術文明の最先端をゆく装置を使つての道楽（オカルトの実験との対照の妙！）にことよせておこなうという、実に心憎い芸である。この総括のなかには、当然のことながら、あの「雪」の節に集約された「死への共感から生への奉仕」への転回も、つまりマンの「転回」に照応する部分も盛込まねばならなかった。それが、カストルプは吹雪のなかでの夢と思索を忘れてはいなかった証しとしてよく引合いにだされる、歌曲「菩提樹」の解釈であり、「死への共感」と深く結びついたロマン主義の、「愛と未来」をめざしての「自己克服」の決意表明である。そして、この「自己克服」の決意表明によってこの総括は終るのである。これによって、作者マンは主人公カストルプを第一次大戦の戦火のなかに送り出す思想的裏づけ作業を終えたうえで、次節「ひどくいいがわしいこと」を語り始めるのである。

たしかに、「菩提樹」の解釈とそれにもとづいての「自己克服」の決意表明には、説得力不十分な面があるかもしれない。だが、「転回」後のマンが主人公をなおかつ第一次大戦のなかに送りだすためには、その思想的裏づけとしてこのような決意表明は不可欠の要請であつたことは疑いない。また、ここでこのような形での総括をおこなっておかなければ、「転回」の文学的表現としての「雪」の節の意義は、それこそ「忘れられてしまう」だろうことも間違いない。

しかしまた、マンの「転回」問題の反映こそが、『魔の山』の第六章以後の小説構造を複雑なものにし、この小説に戦前性と戦後性の二重構造を付与する最大の原因であつたことも前に指摘したとおりである。いま「妙音の饗宴」の最後で、その「転回」問題がロマン主義の「自己克服」の決意表明という形で表面に再浮上してきた以上、私たちは、それに続く「ひどくいいがわしいこと」をも、「時代の小説としての二重構造型」の視点から読まねばなるまい。マンがここで、それが戦後の社会現象であり、また作者にとっても戦後の体験であることを読者も熟知している素材を敢えて（あるいは気にせず

に「下敷にして、この挿話を書いているのも、まさにそれゆえにはかなるまい。そして、「ひどくいかがわしいこと」を二重構造的に読む視点とは、ヘフトリヒの言葉になぞらえて言うなら、ヨアヒムの霊のまどっている「第一次大戦におけるドイツ軍兵士の軍服」を、「これは、ヨアヒムの死装束であり、かつまたカストルプの死装束である」というふうに読む視点なのである。しかもここで大事なのは、ヨアヒムの霊は、カストルプの「すまない！」という言葉に端的に表現されているように、冒瀆された形で出現するのに対して、カストルプは作者の再生への祈念をこめた別れの言葉を背にして戦火のなかに消えていくという違いである。

ヨアヒムの霊の出現する場面のもつ意味を解く手がかりは三つある。一つは、先ほどから問題にしている、すでに語られたヨアヒムの死の隠された意味を開示する霊の姿である。もう一つは、売春宿を連想させる描写からもわかるように、この霊が「ひどくいかがわしい」心霊術実験によって呼出されることである。そして最後に、カストルプがこの霊に対して「すまない！」と謝ることである。この三つの手がかりにもとづいて解釈するなら、すなわち、ここに描かれているのは、作者が一度深い哀悼と哀惜の念をもって永遠の眠りにつかせた第一次大戦の戦没兵士の霊が、戦後状況のなかでいちだんと勢いをまし、今や完全にいかがわしいものとなってしまった非合理主義的、反理性的思潮によって冒瀆されようとしていることに対する、強い自責の念を伴った反省である。そう解釈するときはじめ、この場面は、すぐ前の「妙音の饗宴」の末尾におけるロマン主義の自己克服の決意表明と結びつき、作者マンの「転向」の表現として一つの明白な意味をもってくるのである。それというのも、H・イエンドライエクも示唆しているように、心霊術実験を「いかがわしいもの」と見るマンの眼は、彼の右翼やファシズムに対する批判と密接に関連しているからである。また、セテムブリーニの強い諷刺にもかかわらず、ずるずると「いかがわしい」実験にのめりこんでいくカストルプの姿には、政治的に「転向」してもなお、「死への共感」を、ロマン主義への愛着を心の底に秘めつつづけているマンのある種の「二重生活」が投影していると言えるだろう。

ちなみに、マンは、『オカルト体験』の結び近くで、次のような自戒の言葉を記している。「私は、シュレンク・ノッツィン・グ氏のところへは、もう行かないだろう。なにも得られはしないのだから。すくなくとも、良いものはなにも得られはしないのだから。私は、私が倫理的な上部世界と名づけたものを愛する。私は、人間的な詩を、明晰で人間にふさわしい思考を愛する。私は、頭脳のたがを狂わすものを、精神的な汚水溜を忌避する。たしかに私は、地獄の業火をほんのちよっぴり見たにすぎない。しかし、それで満足しなければならないのだ」。

だが、ヨーアヒムの霊が呼出されねばならない理由は、これでつきるわけではない。ヨーアヒムの霊は、あのような姿をとって現れることによって、彼の死に隠されていた意味を開示するとともに、まさにそうすることによって、カストルプの第一次大戦への出征に新たな意味を付与する役割をもっているのである。

本稿の前章で見たように、兵士ヨーアヒムに密かに託された戦没兵士のイメージは、基本的に第一次大戦勃発時から敗戦の後にいたるまでマンがドイツ軍兵士によせた熱い共感をもとにして、それを右翼による歪曲から守るためにいちだんと純化したものであった。だが、今マンが〈魔の山〉から下山させ、戦火のなかに見送ろうとしているカストルプは、セテムブリーニとナフタとの論争を介して戦後のイデオロギー的混乱の試鍊をもくぐりぬけ、作者の「転回」をさえも負荷された人物である。換言するなら、カストルプが参戦する戦争は、たしかに第一次大戦ではあるが、しかし、もはや第一次大戦ではないのである。より正確には、二度目の第一次大戦とも言うべきものである。つまり、それは、「転回」後のマンによって捉え直された第一次大戦であり、そこに出征していく兵士は、現実には一九一四年八月に出征していった兵士ではなく、一九二四年の作者のメッセージを託されて、十年前の戦場にあらためて派遣される兵士なのである。だからこそ、カストルプは、セテムブリーニに見送られて出征し、⁽³⁾ ロマン主義の自己克服への願いをこめて「菩提樹」の歌を歌いながら、戦火のなかに消えていくのである。

『魔の山』に含まれている戦後性を重視するJ・シャルフシュヴェールトも、この小説の最後で描かれる戦争は「もはや第一次世界大戦だけを意味するということはありません、早くももっと先のものを指し示しているとさえ言えるかもしれない」と言っているが、私の解釈はこれとは微妙に異なる。たしかに『魔の山』の戦後性と、右翼批判を梃子にしたマンの「転向」と、その後の歴史の流れ、およびそのなかでのマンの身の処し方などを考えると、シャルフシュヴェールトの解釈も十分な妥当性をもっている。しかし、『魔の山』という小説自体を考えると、マンがやはりこの物語を最終的には第一次大戦でしめくろうとしたことは疑いえない。これは、「共和国は、一九一八年ではなく、一九一四年に生まれたのだ」という彼の「転向」の論理を守るためにも、崩してはならない枠組であった。だからこそ、マンは、一九二四年夏に書いた最後の数節において、いささかとてつけたような感じがしないでもない形で、いつのまにか時代性が曖昧になってしまったこの物語が実はいまようやく第一次大戦勃発の直前期にさしかかったのであることを読者に納得させようと、懸命に努めているのである。そして、そのなかで、にもかかわらず紛れもなく戦前性と戦後性の混在という「時代の小説としての二重構造化」をもつにいたった『魔の山』の幕のおろし方に腐心したのである。この難題の解決策の一つとして考え出されたのが、兵士ヨーアヒムと兵士カストルプとのダブルイメージだったと言えるのではないだろうか。このダブルイメージは、本稿の前章で指摘したように、問題の最後の数節の最初の「巨大な鈍感」の節で、カストルプの身振りや表情が「亡きヨーアヒムがああ無茶な反抗的決意を心中ひそかに固めつつあった時の身振りや表情をはっきりと思い出させるものだった」と書かれる時に始まり、先述のように「妙音の饗宴」においていちだんと強められ、そして、ヨーアヒムの霊が第一次大戦のドイツ軍兵士を連想させる戦闘服姿で出現することによって、読者の脳裡にはっきりと焼きつけられるのである。

一九一四年夏におけるマンの感激に照応するように、「不潔な世界の浄化」を期待して欣然と死地に赴いた、プロイセン兵士の鑑ともいべきヨーアヒム・ツィームセンと、すでに「その戦争は不潔なものとなる」ことをすら認識するにいたっ

た「転向」後のマンによって、一九二〇年代半ばのマンによって捉え直された第一次大戦に、「ロマン主義の自己克服」と「共和国の成立」への願いを秘めて出征していく、半ばヴァイマル共和国の市民ともいべきハンス・カストルプ——この二人の兵士の戦闘服姿が読者の脳裡で一つに重なって、第一次大戦の戦火のなかに消えていくとき、小説『魔の山』の「時代の小説としての二重構造化」も、その全てを焼きつくす戦場の劫火のなかで、一つに熔解していくのである。

* * *

付記——結果として、『魔の山』の「時代の小説としての二重構造化」のうち、その戦後性の側面のみを強調する形になってしまったが、戦前性の方はいわば自明のことであり、また、本稿の課題の焦点が、マンの戦後の「転向」が『魔の山』の小説構造にどのように反映しているかという点にある以上、これは必然的な帰結であろう。なお、本稿においては、無数の『魔の山』論が書かれてきたにもかかわらず、本格的に論じられることが余りにも少ないヨーアヒム像に照明をあてることを意図的に試みてみたわけだが（そのためにある種の強引さが生じたことを否定はしない）、むしろ、「時代の小説としての二重構造化」の問題は、ヨーアヒム像だけに限られた問題ではない。それは、戦火のなかに消えていく主人公カストルプ像の内部にも存在するし、ナフタ像を初めとして、ほとんど全ての主要な登場人物や挿話のなかに秘められていると言っても過言ではあるまい。

そういったことをも含めて、全面的な『魔の山』論としてはもちろんのこと、「時代の小説」としての『魔の山』論としても、さらにはマンの「転向」をめぐる考察としても、言い足りない点は実に多いが、それらについては他日を期することとしたい。

（一九八八年十一月末日）

注

トーマス・マンの著作からの引用等は、最も新しい全集である S. Fischer Verlag 刊行の Thomas Mann: Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurt Ausgabe herausgegeben von Peter de Mendelssohn, Frankfurt am Main 1980-1986. から採っている。以下においては書名と頁数のみを記すことにする。また必要に応じてその後個別の評論の題名を括弧内に記すことにする。

- (1) マンは一九三九年の講演『魔の山』への手引き」のなかで、この小説は「二〇世紀の最初の三分の一の時期におけるヨーロッパの魂の状態と精神的問題性との記録である」(傍点筆者)と言っている。Rede und Antwort, S. 66. (Einführung in den Zauberberg) また、『魔の山』刊行直後の一九二四年十二月十六日付のインタヴューでは、第一次大戦前に短編小説として構想したものが、しだいに成長して、最近ようやく大長編小説として完成できたことを語ったあと、「この本は多くのアクチュアルな事柄に触れています。政治的な事柄にもです」と言っている。Volkmarr Hansen/Gert Heine (Hrsg.): Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann 1909-1955. Hamburg 1983, S. 68. この問題を重視した研究者としては、後で紹介する T. J. Reed のほかにも Jürgen Scharfschwerdt などがある。vgl. Jürgen Scharfschwerdt: Thomas Mann und der deutsche Bildungsroman. Stuttgart 1967, S. 130f. なお注 (31) をも参照されたい。
- (2) 『魔の山』と時代との複雑な関係を重視する Reed や Scharfschwerdt なども、セテムブリーニやナフタ、そしてペーベルコルンについてはその視点からある程度の分析をおこなっているが、ヨーアヒムに関しては、彼らの問題提起にふさわしい形での分析は全くと言っていいほどおこなっていない。
- (3) 近年におけるこの方向での代表的研究者としては Hermann Kurze をあげることもできる。H. Kurze: Auf der Suche nach der verlorenen Irrationalität. Würzburg 1980. Vgl. auch H. Kurze: Romantik und Konservatismus. München 1983, S. 36-40. 彼はこの他に、活況を呈する近年のトーマス・マン研究界の交通整理者の役割をも精力的につとめて、Thomas-Mann-Forschung 1969-1976. Frankfurt am Main 1977. および Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Aufsätze seit 1970. Würzburg 1985. という、マン研究の現状を概観するうえで貴重な二冊の書物を刊行しているが、彼は後者の巻頭におかれた「一九七六年以後の研究の諸傾向」と題する文章の冒頭で次のように書いている。「著しく改善された資料状況がその成果を生みだした。もはや中心に位置するのは、六〇年代のように、亡命時代の反ファシズム闘争によって刻印されたような代表的共和主義者にして人文主義者トーマス・マンというオプティミスティッシュな像ではなく、審美主義、保守主義、ベシシズムス、ナルツィスムスといったものを強調し、共和主義への転向のなかにたんなる表面的事象を認めるにすぎない懐疑的な考察方法である」。私もマン研究の現状についてのこのような事実認識に異を唱えるつもりはないが、それこそトーマス・マンのひそみに倣って言うなら、世の趨勢について認識すること、それを双手をあげて歓迎することとは別であろう。本稿は、そのような自覚にもとづいて、マン研究の現状にたいする私なりのいささか屈折した異議申立てでもある。
- (4) 私にとってはマンの「転向」とその周辺をめぐる問題は、一九六〇年代末から七〇年代初頭にかけてマンの『非政治的人間の考察』を翻訳刊行(前田敬作と共訳、筑摩書房刊)した頃からの関心事であるが、最近書いたものとしては「タンホイザー伝説の変容」(音楽之友社『年刊ワグナー』一九八四年)、「あるゲーテ論の誕生」(日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』第二十七巻、一九八五年)、「転身の状況」(希土同人社『希土』第一五号、一九八六年)があるので、これらの拙論を参照してもらえれば幸甚である。

- (6) Heinz Saurebzig: Die Entstehung des Romans ›Der Zauberberg‹. Biberach 1965. この論文は後に若干加筆されて次の書物に収録された。Heinz Saurebzig (Hrsg.): Besichtigung des Zauberbergs. Biberach 1974.
- (7) Terence J. Reed: Thomas Mann. The Uses of Tradition. London 1974. この書物のなかの『魔の山』についての章は、若干加筆のうえドイツ語に訳された。Der Zauberberg. Zeitenwandel und Bedeutungswandel 1912–1924. 以下の表題は、このHeinz Saurebzig (Hrsg.): Besichtigung des Zauberbergs. の収録された、この最近の著者のHermann Kurzke (Hrsg.): Stationen der Thomas-Mann-Forschung. にも再録されている。本稿における引用は原則としてBesichtigung des Zauberbergsに収録されたものからおりたこととする。
- (8) Gerhard Loose: Naphia. In: Ideologiekritische Studien zur Literatur. Hrsg. von Volkmar Sander. Frankfurt am Main 1972. Pierre-Paul Savage: Der Begriff des Terrors in Thomas Manns Zauberberg. In: Dialog. Hrsg. von Rainer Schönhaar. Berlin 1973. Judith Marcus-Tar: Thomas Mann und Georg Lukacs. Budapest 1982. など。この時期には、ナフタ問題とは別に『魔の山』の成立経過を考えようとして直接あるいは間接に示唆にとむ数多くの実証的研究成果が発表されているが、本稿の叙述には直接関係はないので列挙するのは控えることにする。
- (9) Thomas Mann: Tagebücher 1918–1921. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main 1979.
- (10) James F. White: The Yale Zauberberg-Manuscript. Rejected Sheets Once Part of Thomas Mann's Novel. Bern und München 1980.
- (11) Hans Wisskirchen: Zeitgeschichte im Roman. Bern 1986.
- (12) 最近のマン研究の種々相については、注に紹介したH. Kurzke: Stationen der Thomas-Mann-Forschung. を参照されたい。ただし、この書物が刊行されて以来わずか三年間のあいだにも前記のWisskirchenの著書を初めとして、叢書Thomas-Mann-Studienの枠内だけでも三冊の書物が刊行され、そのいずれもが、『魔の山』執筆期のマンについての新しい資料や、それを手がかりにしての新たな調査結果や研究成果をも含んでいるというのが、マン研究の、あるいは彼の「転回」問題や『魔の山』についての研究の現状である。
- (13) 『魔の山』全体の基本構造を徹底してショーペンハウアーの哲学にひきつけて分析し、この小説は本質的にペシシスティッシュな作品であるという解釈を打出して、従来支配的だった『魔の山』を教養小説とみる考え方を否定したクリスティヤンセンの『魔の山』論 Børge Kristiansen: Uniform-Form-Überform. Thomas Manns Zauberberg und Schopenhauers Metaphysik. Kopenhagen 1978. に端を発する一連の論争について、Hermann Kurzke: Stationen der Thomas-Mann-Forschung, S. 11 f. に要約されている。また同書にはクリスティヤンセンの再反論も収録されている。Vgl. Helmut Koopmann: Der klassisch-moderne Roman in Deutschland. Stuttgart 1983. und derselbe: Philosophischer Roman oder romanhafte Philosophie? In: Text & Kontext, Sonderreihe, Bd. 16. Kopenhagen/München 1983. Børge Kristiansen: Der Zauberberg. Schopenhauer-Kritik oder Schopenhauer-Affirmation? In: Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Hrsg. von Hermann Kurzke.
- (14) Eckhard Helfrich: Zauberbergmusik. Über Thomas Mann. Frankfurt am Main 1975. Lotti Sandt: Mythos und Symbolik im Zauberberg von Thomas Mann. Bern/Stuttgart 1979.
- (15) Thomas Mann: Über mich selbst, S. 127. (Lebensabriß) など『魔の山』とタンホイザー伝説との関係については、拙稿「タンホイザー伝説の変容」を参照されたい。
- (16) Thomas Mann: Briefe an Paul Amann 1915–1952. Lübeck 1959, S. 29.

- (16) James F. White, a. a. O. S. xvi. u. S. 27.
- (17) Vgl. Thomas Mann : Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 12 f.
- (18) Hans Wysling : Narzissmus und illusionäre Existenzform. Bern/München 1982, S. 361.
- (19) Thomas Mann : Briefe an Paul Amann, S. 53.
- (20) Terence J. Reed : Der Zauberberg. Zeitenwandel und Bedeutungswandel 1912 - 1924. In : Besichtigung des Zauberbergs, S. 92 ff.
- (21) Peter de Mendelssohn : Nachbemerkung des Herausgebers. In : Der Zauberberg, S. 1020.
- (22) 第一次大戦勃発時に愛国的興奮に駆られた文章を発表し、大戦中も基本的に愛国的立場を堅持したうえで、大戦後すみやかに共和国支持を打出した文学者や知識人はマンの周囲にも多数存在したが、彼らの「転回」はマンの場合ほどには物議をかまなかった。この点については、拙稿「転身の状況」をも参照されたい。
- (23) 以下の記述におけるマンの日記からの引用は、すべて次の書物による。本文中に日記の日付をそれぞれ明記しておいたので、煩を避けるために出典個所の注記は省くことにする。 Thomas Mann : Tagebücher 1918 - 1921. Frankfurt am Main 1979.
- (24) 『魔の山』ばかりでなく、マンの「転回」問題を考えるうえでも、この時期のマンにおけるエロスの問題が重要な意味をもっていることは、『ドイツ共和国について』の中でのノヴァーリスやホイットマンへの言及などからも察知できる。私はいずれこの問題をも含めて「転身の情念」といった形で扱ってみたいと思っているが、いつかは、この方向で当時のマンの問題を研究した最近の研究文献として次の三点をあげておくことにする。 Claus Sommerhage : Eros und Poesie. Über das Erotische im Werk Thomas Manns. Bonn 1983. Karl Werner Böhm : Die homosexuellen Elemente in Thomas Manns >Der Zauberberg<. In : Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Gerhard Härle : Die Gestalt des Schönen. Untersuchung zur Homosexualitätsthematik in Thomas Manns Roman >Der Zauberberg<. Königstein/Ts. 1986.
- (25) Thomas Mann : Dichter über Dichtungen, Teil I. Hrg. von Hans Wysling. München 1975, S. 454. なお、マンは『魔の山』の「手記」のなかで、『魔の山』を最初に構想したときには、結末をどうつけるかは未定だったと言っている。 Rede und Antwort, S. 71.
- (26) ただし厳密に言えば、マンは「ヴァルブルギスの夜」のフランス語の部分を通して明らかに原稿をブルーノ・フランクに預け、返してもらった原稿の浄書にとりかかったのは二年一〇月一〇日で、最終的に第五章を書きあげたのは二年一〇月一三日であった。
- (27) Terence J. Reed, a. a. O. S. 110 f.
- (28) 『魔の山』第二章第七節「雪」の構想の原体験となったのは、マンが一九一五年始めにバート・テルツの別荘で体験した大雪であり、これを『魔の山』のなかで利用するつもりであつたことをマンはすでに一九一八年夏に明言している。 Vgl. Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910 - 1955. Pfullingen 1960, S. 21 u. 72.
- (29) Terence J. Reed, a. a. O. S. 119.
- (30) Terence J. Reed, a. a. O. S. 120.
- (31) Thomas Mann : Rede und Antwort, S. 76. (Einführung in den >Zauberberg<) なお、いつではマンは「時代」の方を一義的に「戦前の時代」と言っている。 あることはこのことが、マンのこの言葉を引く研究者たちに、私が以下に提起する「二重に重なった二重性」という問題にまでただちに踏み

こませない陥穽になっているのかもしれない。

- (32) イェール大学にある『魔の山』の原稿のなかには、「ヴァルブルグスの夜」の最後でカストルブがいったんショーシャ夫人と別れたあと、あらためて彼女の部屋に忍んでいくところまでが描かれている。完成稿ではこの部分は抹消されているわけだが、こういった点にも、第五章の結末のつけ方についてのマンの迷いが見てとれる。James E. White, a. a. O. S. xiv, u. C 572.

- (33) たとえばセテムブリーニと論敵とが決闘をおこなうという構想自体がかなり早くからあったことは、一九二〇年二月一日や同年七月五日の日記から明らかである。

- (34) 第七章第七節「妙音の饗宴」におけるレコード鑑賞の場面も、この時すでに構想のなかにあったことは一九二〇年二月一日の日記から推測できるが、後述するように、この場面と心霊術実験との緊密な結びつきを考えると、この時点でのレコード鑑賞場面の構想が完成稿のそれと全く同じであったとは考えられない。なお、レコード鑑賞の件については注40をも参照のこと。

- (35) V. Hansen/G. Heine (Hrsg.), a. a. O. S. 47 f.

- (36) Thomas Mann: Dichter über Dichtungen, Teil I, S. 465. なお同じくすでに同年七月九日付のAdele Gerhardt宛の手紙でも言っている。

- (37) Thomas Mann: Briefe 1889 - 1936. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main 1961, S. 190.

- (38) Thomas Mann an Ernst Bertram, S. 105.

- (39) Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer (Hrsg.): Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register, Bd. I. Frankfurt am Main 1976, S. 324.

- (40) 『魔の山』のなかで最も集中的に、マンとしては異例なほどの速さで書きあげられたのは第七章であるが (Vgl. Peter de Mendelssohn: Nachbemerkung des Herausgebers, S. 1045 f.) それでも第七章だけでもすくなくとも数ヶ月はかかっている。それに、第七章の執筆は、しびれを切らした出版社が完成した分から印刷にとりかかり、すでに第六章の終りまで印刷がすすんでいたという状況下でおこなわれたものであることを考慮しなければならないまい。

- (41) きわめて具体的な一例をあげておこう。マンは二一年一〇月一五日に第六章を書き始めたが、その約半月後の一〇月二八日の日記に、ふたたびレコード鑑賞の場面を『魔の山』に入れることを記しているが、そこには、これを入れる場所は、完成稿のように第七章ではなく、「第六章に組みこむ」と書かれている。

- (42) Vgl. Thomas Mann an Ernst Bertram, S. 113.

- (43) Peter de Mendelssohn, a. a. O. S. 1043

- (44) 一九二二年末にはS・フィッシャー社は『魔の山』の近刊予告をだし、二三年に入ると、出来上っている分から印刷にとりかかり始めた。Peter de Mendelssohn, a. a. O. S. 1042 f.

マンの「転向」については、拙稿『転身の状況』をも参照してもらいたい。なお同論文への補足として、マンは一九一八年二月一四日の日記に「もしもどうせ組織に組入れられるのなら、〈ドイツ人民党〉に加わる方がいい」と書き、さらに一九二〇年五月二五日の日記には、六月六日に迫った国会議員の選挙で民主党に投票するよう妻カーチャに勧められたが、自分は「投票するならドイツ人民党だ」と書いている(実際には棄権した)ことを、ここに記しておきたい。私はマンの「転向」を当時の現実政治との関係で考える場合には、極右勢力の跳梁の問題ばかりでなく、ドイツ人民党の動向と「大

- 連合」の問題をも重視しなければならぬと考えるが、この点については『転身の状況』で論じたので、ここでは省くことにする。
- (45) Thomas Mann: *An die gestitete Welt*, S. 845 ff. (*Zur jüdischen Frage*) の評論の執筆から撤回にいたる経緯については、マンの一九二二年九月二二日、一〇月一日、一〇月二八日の日記およびそれに付された注記を参照されたい。なお、この評論におけるマンの右翼批判の一つの契機となっているのは、民族主義的ドイツ文学研究者アドルフ・バルテルス教授のマンに対する中傷的批判である。Vgl. a. a. O. S. 842 f.
- (46) Thomas Mann: *Briefe 1889–1936*, S. 193.
- (47) Thomas Mann: *Dichter über Dichtungen*, Teil I, S. 465.
- (48) 第二章第一節の執筆開始は二二年の二月になってからと推定される。(Hans Wisskirchen: a. a. O. S. 207.) マンとルカーチとの出会いは一月一七日で (Judith Marcus-Tar, a. a. O. S. 69.) マンとルカーチとの和解は一月二二日である (Thomas Mann: *Briefe 1889–1936*, S. 196.)
- (49) Thomas Mann: *Rede und Antwort*, S. 620. (Hans Reisigers *Whitman-Werk*)
- (50) *Dichter oder Schriftsteller? Der Briefwechsel zwischen Thomas Mann und Joseph Ponten 1919–1930*. Hrsg. von Hans Wysling, Bern 1988, S. 42.
- (51) Thomas Mann an Ernst Bertram, S. 120.
- (52) Thomas Mann: *Von Deutscher Republik*, S. 130 f. マンがこの点をいかに重視していたかは、数ヶ月後に『ドイツ共和国について』の後から書かれた「序文」によって発表した文章のなかでも、この点を強調しているところからわかる。a. a. O. S. 117.
- (53) Peter de Mendelssohn, a. a. O. S. 1056.
- (54) Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.), a. a. O. S. 79.
- (55) Thomas Mann: *Der Zauberberg*, S. 694 f.
- (56) ebd. S. 695 ff.
- (57) ebd. S. 521 ff.
- (58) ebd. S. 532.
- (59) 注7参照。
- (60) Hans Wisskirchen, a. a. O. S. 56–83
- (61) 片山良展「トーマス・マン『魔の山』の研究」大阪大学文学部紀要第十八巻。一九七五年。一三八頁。なお片山の「現代小説」という訳語は私の「時代の小説」に対応するものである。私が敢えて「時代の小説」という言葉を用いた理由は、本稿全体の論旨から明らかであろう。
- (62) Thomas Mann: *Der Zauberberg*, S. 697.
- (63) ebd. S. 731.
- (64) ebd. S. 725.
- (65) ebd. S. 710.
- (66) このナフタの言葉の最後の部分は、最も流布している邦訳の一つである新潮文庫版『魔の山』(高橋義孝訳)では、「ところでおい、こゝさんはいかがです

か、ハンス・カストルプさん。存在のとおり、私はあのひとに少なからず同情しているのです」と訳されているが、これでは、この会話がヨアヒムの下山中におこなわれたものであるという断り書の意味はなくなってしまう。ここでは、ナフタはヨアヒムに対する見舞いの言葉述べているのではなく、下山中のヨアヒムの様子を知らたがっているのであり、だからこそ意味深長な一節なのである。

- (67) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 717.
- (68) Lotli Sandt, a. a. O. S. 354 f.
- (69) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 1006.
- (70) ebd. S. 724.
- (71) ebd. S. 626 f.
- (72) ebd. S. 729.
- (73) Thomas Mann : Goethe und Tolstoi. Aachen 1923, S. 48. なお、これはマンの評論『ゲーテとトルストイ』の最初の版であって、現在広く流布しているものは異なる。詳しくは拙稿『あるナールテ論の誕生』を参照されたい。
- (74) Thomas Mann : Von Deutscher Republik, S. 157 f.
- (75) James F. White, a. a. O. S. xv. u. 13.
- (76) Heinz Sauereßig: Besichtigung des Zauberbergs, S. 16 f.
- (77) Thomas Mann : Betrachtungen eines Unpolitischen, S. 459 f.
- (78) Thomas Mann : Späte Erzählungen, S. 131 ff. (Gesang vom Kindchen) なお、クルツフェルト・ヴェストホフにあてたマンの手紙類が現存するそうだが、なか未公開のものもある。Vgl. Thomas Mann : Tagebücher 1918 — 1921, S. 563.
- (79) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 521.
- (80) ebd. S. 581.
- (81) Thomas Mann : Von Deutscher Republik, S. 11 f. (Gedanken im Kriege)
- (82) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 881.
- (83) ebd. S. 913.
- (84) ebd. S. 957. なおヨアヒムの服装についてはVgl. Eckhard Helfrich, a. a. O. S. 147. und T. J. Reed : Thomas Mann. The Uses of Tradition, p. 265. また注(88)をも参照のこと。
- (85) Thomas Mann : Rede und Antwort, S. 75f. (Einführung in den >Zauberberg<)
- (86) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 751.
- (87) ebd. S. 753 f.
- (88) ebd. S. 754. 先にもふれたように、このようなヨアヒムの「英雄性」を、たとえば『ヴェニスに死す』の第二章に述べられているような「業績の倫理家」「弱さの英雄主義」といった意味での「現代の英雄性」として捉える考え方が、ヨアヒム解釈の半ば定説となっている。これには作者の側からの

裏付けの発言もあり (Thomas Mann: Dichter über Dichtungen, Teil I, S. 565.) 私もこのような解釈もまた正しいことを否定するわけではない。しかし、私がここに紹介したようなヨーアヒムの描写は、同じマンの『魔の山』以前の作品のなかの人物を引合いに出すのなら、トーマス・ブデンブロークやグスタフ・アッシェンバッハなどよりも、先に紹介した『幼な子の歌』のなかで「時代の戦士」として賛えられている青年士官を連想する方がより自然な読み方というものであろう。いわんや、無教養さを最大の特徴とするシュテール夫人の言葉などにいたっては。

- (89) ebd. S. 756. この箇所について E・ヘフトリヒは「このような墓や埋葬式は平和時にしかありえない」と言っている (Eckhard Hefttrich, a. a. O. S. 148.)。彼は、ヨーアヒムの霊が着ている軍服についても、これは第一次大戦時のドイツ軍兵士の軍服だとしたうえで、だが「これはヨーアヒムのではなく、ハンス・カストルプの死装束である」と言っている (注 (84) 参照)。つまりヘフトリヒは「戦争における実際の兵士の死」は『魔の山』の最後でカストルプが戦火のなかに消えていくとき初めて描かれるのだと主張したいわけである。だが、そんなことは自明のことであって、私にしてもそれを否定する気は毛頭ない。「実際の」戦死が描かれるのはカストルプの場合であるということ、私の言うヨーアヒム像のもつ二重性という問題とはなんら矛盾するものではない。むしろ、余人には気付きえないような隠された引用や密かな意味連関の発見に多大な労力を費して、『魔の山』の多層性や多義性の解明に優れた寄与をなしたヘフトリヒが、ヨーアヒム像の問題になると、かくも単純素朴な視点に固着してしまうことの方が理解に苦しむ。

- (90) Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.), a. a. O. S. 76.

- (91) Thomas Mann: Der Zauberberg, S. 531.

- (92) Thomas Mann: Von Deutscher Republik, S. 204. (Aus der Rede am 18. August 1924 in Stralsund.)

- (93) Thomas Mann: Dichter über Dichtungen, Teil I, S. 487.

- (94) Volkmar Hansen/Gert Heine (Hrsg.), a. a. O. S. 88. なお、このインタビューは翌二六年一月二三日に初めて印刷公表されたので、上掲書にもその日付で収録されている。(Vgl. a. a. O. S. 89.)

- (95) この問題を考えるためには、先述のようにヨーアヒムの重要なモデルとみなされるギュンター・ヘルツフェルト・ヴストホフを「時代の戦士」と賛えて描いた『幼な子の歌』の一節における若きドイツ兵士の像を思い比べて両者の差異を考えてみるといい (注 (78) 参照)。ちなみに『幼な子の歌』のこの部分は、一九一九年二月末に執筆されたものである。Vgl. Thomas Mann: Tagebücher 1918-1921, S. 156 ff.

- (96) 片山良展、上掲書一三四頁以下。

- (97) Thomas Mann: Der Zauberberg, S. 484.

- (98) Vgl. Terence J. Reed, a. a. O. S. 119.

- (99) Thomas Mann: Der Zauberberg, S. 507 ff.

- (100) ebd. S. 513.

- (101) ebd. S. 520.

- (102) Hans Wisskirchen, a. a. O. S. 108.

- (103) ebd. S. 94 ff.

- (104) ebd. S. 101. Vgl. auch Hans Wysling, a. a. O. S. 205 ff. マンの「転回」を保守的方向で解釈する傾向が強まるにともなって、マンの「転回」を一種の

ユートピア志向として捉える見方も強まってくと思われるが、このようなマン研究の現象自体がもつ、私たちの時代に深く規定された問題性について
もいっか論じてみたい。

- (105) Thomas Mann : Der Zauberberg, S. 758.
- (106) ebd. S. 759.
- (107) ebd. S. 760 f.
- (108) ebd. S. 762.
- (109) Thomas Mann : Briefe 1889 - 1936, S. 235.
- (110) Thomas Mann an Ernst Bertram, S. 124.
- (111) 拙稿「転身の状況」を参照されたい。
- (112) Hans Mayer : Thomas Mann, Frankfurt am Main 1980, S. 152.
- (113) Peter de Mendelssohn : Von deutscher Repräsentanz, München 1972, S. 216 ff. Terence J. Reed, a. a. O. S. 114 ff. und S. 137. (Anmerkung 98.)
- (114) ペーペルコロン／ハウプトマン問題についてJürgen Scharfshwerdt, a. a. O. S. 127 ff. を参照のこと。
- (115) ちなみにマンは一九二五年一〇月三〇日付のインタヴューのなかで、ペーペルコロンについてこう語っている。「私はたしかに理念的で抽象的なものに対して、ひとつの自然を対置しようと思いました。しかし、私が自然のなかに絶対的に肯定的なものを見ているというわけでは決してありません。というのは、自然もまた不十分なものをもっているからです。ペーペルコロンは悲劇は、彼の不可能性にあるのです。ちなみに、彼は一つの象徴的意義をもっています。彼は、ドイツ的な力の浪費を体现しているのです。三十年戦争を考えてみてください。世界大戦のことも考えてみてください。」(Volkmar Hansen/Gert Heine, a. a. O. S. 79.) この言葉は、ペーペルコロンに対する作者マンのアンビヴァレントな態度を語っていると同時に、マンがペーペルコロン挿話に時代史的な問題をも盛込もうと意図していたことを示唆している発言である。
- (116) Heinz Saurebüg, a. a. O. S. 31.
- (117) Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer : Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens, Frankfurt am Main 1965, S. 61. Thomas Mann : Briefe 1889 - 1936, S. 205. なお、オカルト現象への世間の関心の高まりが人々の第一次大戦体験と無縁でないことをマン自身も認識していたことは、『オカルト体験』の一節からも読みとることができよう。Thomas Mann : Über mich selbst, S. 223. (Okkulte Erlebnisse)
- (118) Thomas Mann an Ernst Bertram, S. 116. なお、この一九二三年二月二十五日付のベルトラム宛の手紙には、『魔の山』と心霊術実験について「最近またまた新しい、恰好の題材がつけ加りました」という表現に始まる報告があり、「ひどくいいがわしいこと」の節がこの時点で初めて『魔の山』の構想に組入れられたものであることを裏付けている。
- (119) Thomas Mann : Briefe 1889 - 1936, S. 233.
- (120) Manfred Dierks : Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann, Bern/München 1972, S. 133 ff. Werner Frizen : Zaubetrunk der Metaphysik, Frankfurt am Main 1980, S. 278 ff.
- (121) Eckhard Heffrich, a. a. O. S. 136 - 145. なお、フトリヒは、マンが一九一〇年代に書いたメモを拠り所として、『魔の山』における「ヴァルプルギスの

夜」とオカルト実験との結びつきはマンが実際にそのような実験を見聞する四半世紀前から「萌芽としては」存在したのだと主張している (a. a. O. S. 354 f.)。「萌芽としては」と言われるかぎり、これに反対する理由はない。また、マン自身も『オカルト実験』のなかで、自分は「理論的には」かなり以前からオカルト現象に関心があったと書いている。Thomas Mann: *Über mich selbst*, S. 225 f. (Okkulte Erlebnisse) しかし、マンが一九二三年三月二〇日付のインタヴューで、「つい二、三ヶ月前にある体験が、それまで全く無縁だったオカルティズムに私をひきつけたのです」と言っていることも忘れてはなるまい (Volkmann Hansen/Gert Heine, a. a. O. S. 60.)。ことはペーベルコロン/ハウプトマン問題と同じであって、理念的構想の萌芽を問題にするのなら、いくらでも前に遡行することができるだろう。しかし、それが、具体的イメージをそなえて初めて意味をもつ小説の構想という次元で、はたしてどれだけの意義をもっているだろうか。

(122) Hermann Kurze: Thomas Mann. Epöcke-Werk-Wirkung. München 1985, S. 208.

(123) Terence J. Reed, a. a. O. S. 123.

(124) Thomas Mann: Briefe 1889-1936, S. 233 f.

(125) Thomas Mann: Der Zauberberg, S. 957.

(126) ebd. S. 703.

(127) 注(84)を参照のこと。むしろ、ヨリアヒムの服装は一方では「古風で昔の傭兵を思わせる」ようなものとも書かれることによって、『ファウスト』のヴァーレンティーンとの連関も保持されている。だが、このような「古風さ」と第一次大戦的な現代性との混淆も、たとえばナフタにおける「中世的コミューニズム」との照応関係で捉えるなら、ヨリアヒムの服装を「第一次大戦におけるドイツ軍兵士の軍服」姿とする解釈にとつての障害とはならないはずである。また、ヨリアヒムの霊の軍装と小説の最後で描かれるカストルプの軍装との細部における異同を言挙げすることには余り意味はあるまい。

(128) Helmut Jendreich: Thomas Mann. Der demokratische Roman. Düsseldorf 1977, S. 333.

(129) Thomas Mann: *Über mich selbst*, S. 254. (Okkulte Erlebnisse) しかも、マンはこう書きながらも、あと一度か二度は誘惑に負けて出かけていくだろうことを匂わせているのである。

(130) マンは一九二五年一〇月三〇日付のインタヴューで、戦火のなかに消えていったハンス・カストルプの運命をドイツの運命と重ね合わせながら、カストルプとドイツの歩むべき道は「東と西の中間」にあることを強調しつつも、それでも、どちらかと言えば「西に傾いている」ことを認めている。Volkmann Hansen/Gert Heine, a. a. O. S. 77 f. もともと、マンの「中間」志向の強固さは、カストルプを見送るさいのセテムブリーニの振舞い方を「いかにも南国人のように(あるいはまたロシア女性のように)両頬に口づけした」と描いて、わざわざ括弧つきの文章で、ひそかにロシア女性シヨリシャ夫人にもカストルプを見送らせていることを忘れてはなるまい。Thomas Mann: *Der Zauberberg*, S. 1001.

(131) Jürgen Scharfschwerdt, a. a. O. S. 130 f.

(132) 注(82)参照。

文献一覧 (本稿の本文および注において引用もしくは言及したものを挙げることにする。)

レーベン・マンの著述など

- Thomas Mann : Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurter Ausgabe herausgegeben von Peter de Mendelssohn, Frankfurt am Main 1980—1986.
- Der Zauberberg. 1981.
- Späte Erzählungen. 1981.
- Betrachtungen eines Unpolitischen. 1983.
- Über mich selbst. 1983.
- Rede und Antwort. 1984.
- Von Deutscher Republik. 1984.
- An die gesittete Welt. 1986.
- Thomas Mann : Tagebücher 1818 – 1921. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main 1979.
- Thomas Mann : Briefe 1889 – 1936. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main 1961.
- Thomas Mann : Briefe an Paul Amann 1915 – 1952. Lübeck 1959.
- Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910 – 1952. Pfullingen 1960.
- Thomas Mann/Josef Ponten : Dichter oder Schriftsteller? Der Briefwechsel zwischen Thomas Mann und Josef Ponten 1919 – 1930. Bern 1988.
- (Thomas-Mann-Studien, Bd. 8.)
- Thomas Mann : Dichter über Dichtungen, Teil 1. Hrsg. von Hans Wysling. München 1975.
- Thomas Mann : Goethe und Tolstoi. Aachen 1923.
- Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer (Hrsg.) : Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register, Bd. 1. Frankfurt am Main 1976.
- Hans Bürgin/Hans-Otto Mayer : Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. Frankfurt am Main 1965.
- Volkmar Hansen/Cert Heine (Hrsg.) : Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann 1909 – 1955. Hamburg 1983.

研究文献

- Karl Werner Böhm : Die homosexuellen Elemente in Thomas Manns >Der Zauberberg<. In : Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Hrsg. von Hermann Kurzke. Würzburg 1985.
- Manfred Dierks : Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann. Bern/München 1972. (Thomas-Mann-Studien Bd. 2.)
- Werner Fritzen : Zaubertank der Metaphysik. Frankfurt am Main 1980.

- Eckhard Heftirich : Zaubermusik. Über Thomas Mann. Frankfurt am Main 1975.
- Gerhard Härle : Die Gestalt des Schönen. Untersuchung zur Homosexualitätsthematik in Thomas Manns Roman ›Der Zauberberg‹. Königstein/Ts. 1986.
- Helmut Jendreich : Thomas Mann. Der demokratische Roman. Düsseldorf 1977.
- 片山良展「ターレス・メン『魔の山』の研究」〈時の小説〉の成立と構造」。大阪一九七五。
- Helmut Koopmann : Der klassisch-moderne Roman in Deutschland. Stuttgart 1983.
- Helmut Koopmann : Philosophischer Roman oder romanhafte Philosophie? In : Text & Kontext, Sonderreihe Bd. 16. Kopenhagen/München 1983.
- Børge Kristiansen : Uniform-Form-Überform. Thomas Manns Zaubenberg und Schopenhauers Metaphysik. Kopenhagen 1978.
- Børge Kristiansen : Der Zaubenberg. Schopenhauer-Kritik oder Schopenhauer-Affirmation? In : Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Hrsg. von Hermann Kurzke. Würzburg 1985.
- Hermann Kurzke : Auf der Suche nach der verlorenen Irrationalität. Würzburg 1980.
- Herman Kurzke : Romantik und Konservatismus. München 1983.
- Hermann Kurzke : Thomas-Mann-Forschung 1969 – 1976. Frankfurt am Main 1977.
- Hermann Kurzke (Hrsg.) : Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Aufsätze seit 1970. Würzburg 1985.
- Hermann Kurzke : Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung. München 1985.
- Gerhard Loose : Naphta. In : Ideologiekritische Studien zur Literatur. Hrsg. von Volkmar Sander. Frankfurt am Main 1972.
- Judith Marcus-Tar : Thomas Mann und Georg Lukacs. Budapest 1982.
- Hans Mayer : Thomas Mann. Frankfurt am Main 1980.
- Peter de Mendelssohn : Nachbemerkung des Herausgebers. In : Thomas Manns ›Der Zauberberg‹. Frankfurt am Main 1981.
- Peter de Mendelssohn : Von deutscher Repräsentanz. München 1972.
- Terence J. Reed : Der Zaubenberg. Zeitenwandel und Bedeutungswandel 1912 – 1924. In : Besichtigung des Zauberbbergs. Hrsg. von Hainz Sauereißig. Biberach an der Riss 1974.
- Terence J. Reed : Thomas Mann. The Uses of Tradition. London 1974.
- Pierre-Paul Sagave : Der Begriff des Terrors in Thomas Manns Zaubenberg. In : Dialog. Hrsg. von Rainer Schönhaar. Berlin 1973.
- Loti Sandt : Mythos und Symbol im Zaubenberg von Thomas Mann. Bern/Stuttgart 1979.
- Heinz Sauereißig : Die Entstehung des Romans ›Der Zaubenberg‹. Biberach an der Riss 1965.
- Heinz Sauereißig (Hrsg.) : Besichtigung des Zauberbbergs. Biberach an der Riss 1974.
- Jürgen Scharfschwerdt : Thomas Mann und der deutsche Bildungsroman. Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz 1967.
- Claus Sommerhage : Eros und Poesie. Über das Erotische im Werk Thomas Manns. Bonn 1983.

James F. White: The Yale Zauberberg-Manuscript. Rejected Sheets Once Part of Thomas Mann's Novel. Bern/München 1980. (Thomas-Mann-Studien, Bd. 4.)

Hans Wiskirchen: Zeitgeschichte im Roman. Bern 1986. (Thomas-Mann-Studien, Bd. 6.)

Hans Wysling: Narzissmus und illusionäre Existenzform. Bern/München 1982. (Thomas-Mann-Studien, Bd. 5.)

なお、邦訳書としては、高橋義孝訳『魔の山』(新潮文庫版)と、関泰祐・望月市恵訳『魔の山』(岩波文庫版)とを参照した。